

特274
929

特274

929

春秋左氏傳(第四卷)

始



第四卷 概観

春秋左氏傳

靈王にねらはれた小弱國とは陳と蔡とであつた。小雀を睨んだ大鷲のやうに、靈王はこの二國の動靜に注意をおこたらず、九月になると王族の弃疾（後の平王）に大軍をさづけて陳を討ち、たちまち滅ぼしてしまつた。諸侯の間には恐慌が起り、晉を頼つて楚の勢力を食ひとめようとする運動が起りかける。が、肝腎の晉にその氣力なく、晉の平公は楚の靈王が建築した御殿を羨み、自分もその眞似をしたいと考へるだけだつた。今や楚晉の地位は一轉して、晉の方で楚の機嫌をとらねば危くなつてきた。その上、天下の支配者である周にも内亂が生じ、大義名分の大旗をかざして楚の非理を咎めるものはゐない。靈王はほくそ笑んで、さらに蔡の隙をうかがつてゐた。——八年。

魯の昭公の十一年に、周の景王が襄弘といふ豫言者に「今年の吉凶はどうだ」と尋ねた。「今年は多分楚が蔡を滅ぼしませう。しかし楚の靈王は無道が重なつてゐますから、そろそろ年貢のをさめ時がまゐりました」と、襄弘は言上する。その豫言どほり、靈王は申（楚の地）にゐて蔡の靈公を招いて殺さうとした。靈公は家老の諫めるのを無視して申の地に向く。酒宴の席上で、靈公がすつかり酔つた時、突然楚の武者が多數幕の蔭からあらはれ、靈公を弑してしまつた。これで楚は陳と蔡とを完全に手に入れたことになる。晉の叔向はこれを聞いて、「惡運が強ければ、一時は天命に勝つこともあります。楚の靈王がその例です。けれども決して

第四卷 概観

て惡人は最期まで榮えることはありません。天はその惡業をつくさせた後に、おもむろに罰をくだします」と、韓起に語り、靈王の未來を豫言した。蔡が滅びたと知つて、晉ではまたも楚を討たうと計畫し、諸侯を厭愁の地に會合した。鄭の子産はこの會合の無意味なことを洞察して、「三年お待ちなさい。三年たてば天罰が楚にくだります」と、自信ありげにつぶやいた。——十一年。

生母がなくなつても魯の昭公は哀しみの色ひとつ見せない。晉の史趙は昭公がやがて國を追はれて流浪するであらうと豫言する。楚では王族の弃疾を蔡の君として、家老の申無宇が靈王にむかつて、弃疾にあまり勢力を與へては危険だと諫言する。魯には前途に暗雲がみなぎり、楚には妖雲が日毎にひろがる。周ではまたまた内亂が起り、衛もまた家老の間に反目がある。晉は晉で老衰した。子産のために鄭だけがやや平和を保つてゐるといふ状態て、群雄割據の特色を極度に見せたまま卷二十二は幕を閉ぢる。——十一年。

富士山でも頂上があるやうに物事には何でも頂點があり、それを越えれば下り坂となる。人間は得意の時が最も危険で、誰もそれが自分の運命の頂點だとは考へないから、圖にのつて更に空中に足をのばさうとする。忽ち奈落に陥つてその人の肉體までも亡ぼす例が随分ある。楚の靈王は今やその得意の絶頂にあり、自分で絶頂に居ることを意識しなかつた。靈王を怨むものはすこぶる多い。第一に靈王に殺された家老養掩の一族が憎んでゐる。第二

に靈王のために夷といふ土地に遷された許の人人が憤り、第三に父を殺された蔡の浦といふ男が、第四に土地を奪はれた蔓成然が、第五に恥辱を與へられた越の家老の常壽過が、第六に國を奪はれた陳と蔡の人人が、それぞれ靈王の命を縮めようと計り、楚の王族の弃疾を擁して靈王に反旗をひるがへした。弃疾は靈王が乾谿の地に出向いた留守をうかがつて楚の國都に入り太子の祿と王族の罷敵とを殺してしまふ。そしてこれもまた靈王に敵意を持つてゐる觀従といふ男を乾谿に行かせ、すぐに王のもとを離れて國都へ歸つた者だけは命を助けてやる。さもなければやがて極刑に處すであらう」と、楚の軍隊に告げまはる。楚の人人はそれを聞いてあわてて靈王のもとを離れて國都に歸る。王は國都を弃疾に占領され、太子を殺されたと聞いてすつかり落膽し、申無宇の子の申亥の家にかくれたが、自分の運もこれまでと觀念し、つひにその家で縊死してしまつた。——十三年。

楚の靈王につづいて平王が立つた。王族の弃疾が平王となつたのである。平王はまづ陳と蔡とを復活したのみでなく、靈王時代の弊政を一つ一つ改めて、國民の同情を得、正しい意味で楚の國はまたもや強大となつていつた。——十四年。

楚に内亂の起つてゐる間に、齊の國がだんだん勢力を増した。齊の景公は勝手に大軍を發して何の罪もない徐の國を伐ち、それら小國の長となつた氣であるけれども、この時は周には天下を支配する實力なく、晉も老衰し、楚では大亂の最中である。魯の叔孫婁は、實になげかはしいことだ。齊の罪を裁く國が世のなかに一つもない。大義名分の標準は地に墮ちてしまつ

たしと、さめざめ泣きながら口惜しがつた。——十六年。

晉の韓起が鄭の國に使者となつて來た。子産が諸役人にむかつて、大國の使者の前で粗忽な振舞があつてはならぬといましめる。酒宴の席上で、家老の孔張が席をまちがへ、韓起らに嘲られる。他の家老がそれを子産の責任だといふと、さうしたこととて自分の責任を云云されてはたまらぬと、子産が反駁した。韓起は一片の環を持つてゐた。他の一片が鄭の商人の所有であることを知り、大國の威光で奪はうとする。子産が頑として承知しない。それでは買上げようと、安い値をつける。子産はそれをも辭退して、諄諄と道理を説き聞かせる。韓起も道理には敵しかね、子産の前に頭を下げてその不心得を謝した。鄭の名宰相は今や大國晉の家老の前に一步も譲らぬ立場となつたのである。——十六年。

夏五月に鄭に大火があつた。この日は餘程の悪日だつたと見え、宋にも陳にも衛にも大火が起つた。子産はすぐさま人人に武裝させて城壁の上に登らせる。晉の國境守備隊長がその不穩な行動について抗議を申込んだが、例によつて子産の見事な答辯に一言もいはずに引込んでしまつた。——十八年。

昭公の十九年には楚、衛、宋の三國に内亂が起つた。靈王につづいて立つた楚の平王がまだ蔡の君であつた時分に、愛妾の腹から太子の建がうまれた。平王が楚の君となるに及んで、伍奢と費無極とをその輔佐とする。費無極は自分が太子に信用を得られなかつたのでそれをしり

妻せけようとの悪計をめぐらし、太子のために奥方を迎へるとの口實で秦の王女を楚にとりなす父の平王の妾としてしまった。それでも足りずに太子と伍奢とが謀叛をたくらんでゐると讒言したため、平王は伍奢を捕へる一方、奮揚といふ男に命じて太子を殺させる。奮揚は太子の無罪を知つてゐたのでひそかに宋に亡命させた。費無極は第三の計畫をたて、平王にむかつて伍奢の二人の子を殺していただきたいと願つて許可を得る。兄の伍尚は潔く楚におもむいて殺され、弟の伍員は呉にのがれて、かならず父と兄との復讐をしなければならぬと、悲壯な決心をする。——一九年、二〇年。

楚と同じく衛にも宋にも大亂があつた。就中宋では元公と家老の華定、華亥、向寧などとの間に激しい意見の衝突があり、家老たちは一時陳に亡命するが、ふたたび侵入して大いに戦ふ。時に元公は敗戦して、國を棄て去らうと用意までしたこともあつた。諸侯の援助がなかつたならば、宋の國はおそらく家老たちの手に入つたであらう。三家老はそこでふたたび楚に亡命したのである。——二〇年、二一年、二二年。

かうしてゐるうちに鄭の子産が病氣となり、子大叔に政治の秘訣を教へて死ぬ。子大叔はそれを守らず國民の同情を失つたのちに後悔した。孔子は子産が死んだと聞いて涙を流し、「あの男こそ現代ではまったく珍しい程の家老である。書物の上でしか知り得ないむかしの賢人のおもかげがあつたのに」と、惜しんだ。楚の靈王と鄭の子産と、全然相反した二つのタイプを見事に描寫しながら、事件は事件を産みつつ、さらに讀者を倦ませない秘法を、「左氏傳」の作者

は充分心得てゐるのである。

世の中の萬物が時間と共に移り變り、一刻も現状のままでは、哲學者の澁面をかりなくとも、第二次ヨオロツバ大戦のニュースを觀なくとも、歴史の本を一頁でも開ければ誰にも話される事實である。靈王を絶頂として、あれほど威力を誇つた楚にも、やがて秋が訪れ、新興國の呉が堂堂と、それと雌雄を争ふこととなる。呉の人人が州來の地を攻める。楚では執政の子瑕が大將軍となつて州來を援助した。呉王壽夢には光といふ太子がゐる。縦横に戦略をめぐらし、楚軍に立ち向ふ用意は十分できてゐる。そのうちに楚の子瑕は病氣で陣中に死に、蕩越が代つて全軍の指揮者となる。總帥の交替といふきはどいところをねらつて、呉は楚の大軍を、鷄父の地でさんざんにうち破つた。楚はその翌年、呉に復讐戦を計つたが、これまた敗戦して、巢と鍾離との二都市を奪はれてしまつた。——二三年、二四年。

やがて魯に内亂が起つて、昭公が國外に亡命するといつた不祥事が勃發した。昭公を追つたのは久しい間魯の國政を支配してゐた季平子である。昭公は季平子の專横を憎んでそれを除かうとしたが、昭公以上に勢力のあつた季平子は先手を打つて君を追ひ出し、自分は上下の支持を得て、事實上、魯の支配者となつた。魯では季孫、孟孫、叔孫の三氏が絶對權力を握り、孔子が常にそれを惱んでゐたことは「論語」などでも窺へるが「論語」だけを續んだのでは、三家老がある、といつた事實だけがぼんやりと判るだけで、どんな人物で、どうした行爲があつ

たかは判明しない「春秋」のこの記載は、いはば「論語」の補足となつてゐるので興味深いものがある。——二五年。

魯から追はれた昭公に同情した齊の景公は、昭公を援けて季平子の軍隊と戦ふことになつたけれども、季平子は國民の支持を得てゐるし、昭公には國民の同情がない。民が第一、君が第二といふ支那思想は、かうした場合にも發揮されて、魯の國民の大部分は、季平子に従つて齊軍と炊鼻（魯の地）で戦ひ、それを撃破した。昭公はこの後、齊に頼り、晉に頼りして、一生涯を國外に放浪した。——二六年。

さきに王族の朝によつて巻き起された周の國の旋風は、なほ當分は續いて、敬王に一勝一敗があり、大勢は次第に敬王側の有利となつて來た。周の國外に去つた王族の朝は、諸侯に檄を飛ばして宣傳につとめるが、笛吹けども諸侯は踊らず、かうして、周の内亂は峠を越えた觀があつた。

新興國の吳は、大飛躍をする前に大きな試練に遭つた。鐵は熱したうちに打たなければならぬ。吳王闔閭は一刻も早く王になりなれと願つて、まだ太子の身である間に王を弑してしまつた。かうして吳では闔閭が天の一方を睨んで嘯いてゐると、これまた新興國の越の國がそろそろ頭を持ち上げ出して、「春秋」の記述は晉楚對立時代から、吳越抗爭時代に移つて行くのである。——二七年。

吳王闔閭が立つた後の第一の仕事は、楚の勢力を徹底的に奪ふことにあつた。元來、闔閭の參謀であつた伍員（伍子胥）は楚の國に深い怨を抱いてゐたので、折を見ては、楚を伐つやうに言上し、闔閭に向つては「楚、執政衆くして乖き、適として患に任ずるなし。若し三師を爲して以て肆し、一師到らば、彼必ず皆出でん。彼出なば則ち歸り、彼歸らば則ち出でむ。楚必ず道に罷れん。亟々肆して以て之を罷らし、多方以て之を誤らしめん。既に罷らし、而して後に三軍を以て之に繼がば、必ず大に之に克たん」と、戰略までを詳細に論じた。伍員の戰略は今日ていふゲリラ戦で、楚は其の後數年の間、吳のゲリラ戦術に惱まされることになるのである。——三〇年。

けれども、吳は楚を伐ちながらも、一方に軍を動かして越の國に侵入すると、「春秋」の記事は、早くも吳の滅亡を晉の蒍墨に豫言させてゐる。吳の運命は闔閭のつぎに立つた夫差の時代に、越王勾踐のために亡ぼされるのであるが、宿敵の越と最初に兵を交へた瞬間から、吳の敗北の運命が或る人人には判つてゐた。今から四十年経たないうちに、越の國はきつと吳を領有することにならう。何故なら歳星が越の方に宿つて居るのに、吳がこれに逆つて越を伐つのであるから、その禍を避けることは不可能である。かうした豫言は、日本の史書にも時に見られるが、特に天命を信じ、天運を重要視した支那人の思想にびつたりと合つてゐるので、もし、支那人の性格を認識しようとする人があれば、深く周易の研究にまで進まなければいけない理由となつてゐる。但し、本書はさうした目的で口譯されたものでないから、その點の記述は往

往省略した——三一年。

齊から晉に亡命した魯の昭公は、晉の鞌旋で本國に歸る機會があつたが、また、昭公自身も歸る意志を持つてゐたが、昭公と共に亡命した家來たちが反對して、結局、國外でなくなつてしまつた。一個の悲劇的な人物を、淡淡と書き流して餘韻をとどめない。春秋は天下の不義者を懼れさせるに十分であつても、さすが成立時代が古いだけあつて、かうした一個人の心情を解剖するといふまでには至つてゐない。現代の讀者から親しみにくい大きな原因の一つは、かうした部分にあるのかも知れない。——三二年。

魯の昭公につづいて定公が立つた。昭公の遺骸はやがて魯に歸つたけれども、忠臣の子家は二君に仕へるのを拒絶して他に去る。季孫の人人は昭公を憎んでゐたから、その墓地を代々の墓地から離れた場所に選定したが、孔子が後に、その周圍に溝を掘つて、その區別を失はせ

た。——元年、二年。
楚と吳とが柏舉の地で決定的に戦ふ日が刻々と近づいて來た。楚への復讐心に燃えてゐる伍員は常常その機會をうかがつてゐたが、蔡の昭公が楚に怨を持つて吳に救援を求めると、待つてゐましたとばかり、吳は全軍を出動させて楚軍と衝突した。

はじめ、蔡の昭公は救援を晉に求めた。晉では諸侯を召陵といふ土地で會合して楚を伐つことになると、晉の大將軍の荀寅は蔡の昭公にむかつて賄賂を要求した。昭公はそれを拒絶する。

荀寅は、それならば楚を伐つのはいやだと、口實をまうけてそれを辭退し、諸侯の聯合軍は解散した。そのうちに、楚は、蔡が陳を滅ぼしたとの理由で蔡を攻めかこむ。昭公は晉を見限つて吳に援助を頼む。吳王、闔閭は伍員と共に兵を進めて、柏舉の地で楚を徹底的にうち破り、郢(楚の國都)にまで進軍した。楚の昭王は危く郢を脱して揚子江の沿岸を逃げまはり、言語に絶した辛酸を重ね、秦の援助を受けて、やつと滅亡をまぬかれた。——三年、四年。

この時になつて、周の内亂がやつと鎮まつた。王族の朝が楚に亡命してゐて、周の人人に殺されたからである。周ではその後蠢動する殘黨狩りに成功し、一二年のうちに敬王の地位は不動のものとなつた。——五年、六年。

魯では、また新しく内亂が起りかけてゐた。季平子の家來の陽虎が主をしのいで魯の政權をほしいままにし、着着と謀叛を起す準備をしてゐたのである。わが應仁の亂時代に、政權が將軍から家老、陪臣に移つたと同様の現象がここにも見え、ただならぬ雲行が、魯の國の前途に暗い陰を投げかけてゐた。

卷之二十二

昭公

八年

卷之二十二

(經)八年の春に、陳の哀公の弟の招が、陳の太子の偃師を殺した。

〔傳〕石がものを言った。八年の春、晉の魏榆といふ土地の出来事である。晉の平公が子野(師曠)に向つて、「石がものを言ったのは何故か」と問ふ。子野が「石がものを申すはずはございませぬ。何かの祟りてございませうか。さもなければ人人の空耳でせう。しかし、國民に不平不満があれば、物いはぬものまでも聲を立てることがあると私は聞いてゐます。わが君が現に御建築中の御殿は善美をつくした結構づくめで、それと反對に國民は力をつかひはたし、諸方に不満の氣が満ちてをります。かうした時に石がものを言ったとて別に不思議はありません」と、やんわり諫言を申上げた。子野のいつたとほり、當時平公は鹿祁の地に御殿を建築中であつた。叔向がこれを聞いて、「子野といふ人はなかなかうまいことをいふ。鹿祁の御殿が落成したら、すぐさま諸侯が裏切らう。そしてわが君にも天罰が降らう。子野はかうしたことを十分承知してゐると見える」と評した。

陳の哀公の第一夫人が偃師を、第二夫人が留を、第三夫人が勝を生んだ。哀公は第二夫人を寵愛されたので、したがってその生んだ留をこの上もなく愛した。けれども第一夫人の生んだ太子の偃師に遠慮して、自分の弟にあたる招と過とに預け、その後見とさせた。哀公には不治の病気があつた。それに乗じて三月甲申の日、招と過とは太子の偃師を殺し、留を太子としてしまつた。「春秋」の記録に、哀公の弟の招が太子の偃師を殺したとあるのは、招の罪を明白にしたのである。

〔經〕夏四月辛丑の日に、陳の哀公がなくなつた。魯の叔弓が晉に行つた。楚の人人が、陳からの使者干徴師を捕へて殺した。陳の王族の留が鄭に出奔した。

〔傳〕わが子を弟のために殺された陳の哀公は、憤つたあまり、四月辛亥の日に縊れて死んだ。干徴師が使者となつて楚に向き、哀公の喪と、王族の留が太子となつたことを報知した。同時に哀公の第三夫人が生んだ勝は、招と過との二人が太子の偃師を殺した始終を楚に申立てた。そこで楚の人人は使者の干徴師を捕へて殺す。王族の留が太子の地位を棄てて鄭に逃出した。「春秋」に、楚の人人が使者の干徴師を捕へて殺したと記録したのは、罪もない使者を殺した楚の人人を罪したのである。

原祁の御殿がいよいよ落成した。魯からは叔弓が祝賀の辭を述べに行く。鄭では簡公が游吉をつれて、同じ目的から晉に來た。家老の史趙が游吉（子大叔）にむかつていふ。「われわれはこの御殿が落成したことを悲しんでをります。しかるにあなたは心にもない御世辭をわが君に

言上しました。少しも祝賀することではありません。」「悲しみの言葉など、どうして述べられませう。わが國だけが祝辭を言上するのではなく、天下の諸侯が皆祝賀するのです」

〔經〕秋に、紅の地で大演習を行つた。

〔傳〕だんだんに世の亂れる氣配がある。そこで秋になると、魯では紅の地で大演習を舉行した。大演習には戦車が千臺も出動し、根牟の地から商衛の地にかけて、今までに見ないほど壯烈に行はれた。

七月甲戌の日に、齊の家老子尾が死んだ。かねがね子尾の家が亂脈なのを心配してゐた子旗（樂施）は、この機會に惡人ばらを退けようとして、丁丑の日に執事の梁嬰を殺し、八月庚戌の日に同じく執事の子成、子工、子車の三人を追放した。この三人はすぐ魯に逃げた。

やがて子旗は、子尾の子の子良（高彊）のために新しく後見者を定めてやつた。すると子良の家來たちは、「若殿はもう一人前であるから、後見の必要などはない。子旗が御家を横領する下準備にちがひない」といひ、武装して子旗の家を押寄せようとする。子尾と仲のよかつた陳無宇（陳桓子）も、それに加勢をするために家來たちに武装を命じた。かうした様子が刻々と子旗の耳に入る。子旗はそれを耳にもせず子良の家を訪れようとする。またも注進が來て、「子良殿の家來たちが武装をして押寄せ仕度最中です」といふ。そこで子旗は豫定を變更して陳無宇を訪問することにした。

家來と共に自身も武装した陳無宇は、子旗の來訪を知つてぎよつとし、あわてて鎧の上に野

遊の衣をひつかけたまま出迎へた。何も氣のつかない子旗は、家來たちのものしい姿を不審がつて、「これはどうした次第です」と、尋ねる。「噂に聞けば、子良の家來が武裝してあなたを攻立てるとかいひますが、まだ御存知ありませんか」「初耳です。私はそれを信じません」「早く武裝してあなたも用意されるがよいですよ。私も御手傳いたします」「つまらぬことをいはいでください。子良はまだ子供です。私は彼が失敗しはせぬかと、そればかり心配してをります。子良にあやまちをさせては、子尾殿に申譯ありません。どうか私の心を子良に傳へてください」「そこで陳無宇も反省し、兩者の仲をとりもつたので、子良と子旗とは昔どほり交際ふことになつた。

〔傳〕陳の人人が家老である王族の過を殺した。魯では盛大な雨乞祭を行つた。

〔傳〕陳の王族の招が、凡ての責任を王族の過にきせて、それを殺してしまつた。

〔傳〕冬十月壬午の日に、楚の軍隊が陳を滅ぼした。陳の王族の招を捕へて越に追放し、また、陳の孔奐を殺した。陳の哀公を葬つた。

〔傳〕陳の太子の偃師のわすれ形見に孫吳（後の惠公）といふ人があつた。九月になると、楚の王族の弃疾が軍隊を指揮して孫吳にしたがつて陳をとり圍んだ。冬十一月壬午の日に、宋の家老の戴惡も加はつて、つひに陳を攻滅ぼしてしまつた。哀公の近臣の一人であつた袁克といふ男が、哀公の馬を殺し、常に愛用してゐた美玉を砕いて、楚の人人の目を忍んで葬式を出さうとした。が、發見されて捕へられ、隙をうかがつて逃げ去つた。

九年

〔傳〕九年の春、魯の叔弓が陳と會合した。

〔傳〕九年の春に、魯の叔弓、宋の華亥、鄭の游吉、衛の趙黶などが楚の靈王と陳で會合した。

〔傳〕許が夷といふ土地に國を移した。

〔傳〕二月甲庚の日に、楚の弃疾が許を夷といふ土地に遷した。夷は現在、城父と呼んでゐる地で、楚の東北面にある。けれども城父には田が少なく、許の人人を收めきれない。そこで州來と淮北の土地をさいて不足を補つた。

周の襄といふ男と晉の闞嘉といふ男とが、閻の土地を奪ひ合つた。晉の梁丙と張趯とが閻に味方をして、異種族を引きつれて潁といふ周の小都市を伐つた。周の景王が詹桓伯（大臣）

陳國を滅ぼした靈王は、それを楚の領土に加へて、穿封戌を城主にした。かつてこの男は靈王と功を争ひ、一步も退かなかつたからである。（襄公二十六年の條に見える）ある日、穿封戌が靈王の御前に出て、酒を賜はつた。席上で靈王が、「もしあの時、自分が楚の國王になると知つてゐたら、おまへは自分に功を讓つたらう」と、冗談をいつた。「いえ、そんなことはありません」と、穿封戌は少しも遠慮なしに言上した。「もし、私がそれを知つてをりましたならば、先君（鄭敖）の御爲に、一命を捨ててもわが君の御首を頂戴いたし、楚の國を正義で統一したでせう」

を使者として晉に抗議を申込む。晉では叔向が仲に立つて國の土地を周に進呈すると、周でも、もともと無理を通さうとした襄の首を刎ね、この一件は圓滿にかたづいた。

〔傳〕夏四月に、陳に大火災があつた。

〔傳〕陳の大火災を知つた鄭の裨鼈は、しばらく天文を案じてみたが、やがて、陳の國は五年後には復活し、さらに五十二年たつと滅びるだらう」と豫言した。

晉の荀盈が齊に向いて自身の妻を迎へた。その歸途、六月に、戲陽の地で死んでしまつたので、絳(晉の國都)に遺骸をはこび、日を改めて本葬を行はうとした。ある日、晉の平公が酒宴を催し、音樂を奏てさせてみた。料理係の屠剛が御前に進んで、「どうか私に御座敷のお取持をさせていただけたいさうございませう」と願つた。平公の許可を得て、彼はまづ樂師の師曠に酌をしながら、「あなたはわが君の御耳の御用をつとめる役ですから、何事でも聞き知らなければなりません。十二支のうち子卯にあたる日は、暴君として知られてゐる殷の紂王と夏の桀王とがなくなつた日ですから、後の人人はそれを忌んで音樂を禁止してをります。今、わが國に最も功勞ある荀盈殿が死なれたのを知りながら、あなたは平氣で音樂を奏し、面白をかしく笑つてゐられます。それで御用が勤まりませうか」と説き聞かせた。つぎに屠剛は平公の寵臣の女叔に酌をしながら、「あなたは目先がよく見えるといふので、わが君の御寵愛深い御方ですから、萬事にわたつて見えなければなりません。今、わが君は美しい模様の御召物を着てゐられますが、今日は吉日でせうか凶日でせうか。國家第一の功勞者が死んで間もないのに、わが

君にかうした派手な御召物をさせて平氣であるのは、あなたの責任でございませう」と、説き聞かせた。それから今度は手酌で酒をのみながら、「私は料理係で、わが君を御健康にするのがつとめであります。御健康なれば正しい氣が體內に満ち、したがつて正しい言葉が口から出なければなりません。しかるにわが君から荀盈殿を悼む御言葉を聞くことができぬのは、全く私に料理が下手だからであります」と、自身を罵りつつ嘆いた。平公はこれを聞いて道理ある諫言だと思ひ、すぐさま酒肴を下げさせ、音樂を中止させた。

晉の平公はあまり荀盈が氣に入つてゐなかつた。それでその死後、御氣に入りのものに荀盈の役目を授けようといふ腹であつたが、屠剛の諫言を聞いてからはすつかり氣が變つて、秋八月になる、その子の荀躒(知文子)を下軍の副將とした。

〔傳〕秋に、魯の仲孫纒が齊に行つた。

〔傳〕齊の景公が立つた時に、昭公は重丘の會合に出席して不在であつた。魯では齊の代替りの度毎に家老をつかはして祝賀するのが例となつてゐた。それ故、今年に景公の即位後十六年であつたにもかかはらず、家老の仲孫纒(孟僖子)が祝賀の辭を述べに出張したのであつた。

〔傳〕春秋にこれを特記してゐるのは、人の手の空いた時を利用した點を褒めたのである。

その折、命を受けた季平子が無暗に人夫をせき立てて仕事を急がせようとした。見かねた叔孫昭子が、「國民を使ふ仕事は、あまりせき立ててはいけません。せき立てれば無理をするやうに

なりませす。無理をすれば人人は君を恨みます。國民が君を恨んで、他處に逃げるやうになつたら、その國はもうおしまひです」といつて意見した。

十年

〔傳〕十年春、王曆の正月には、記録に價した事件はなかつた。

〔傳〕十年の正月に、妖しい星が北方に出た。鄭の裨龍が天文を案じてゐたが、やがて子産にむかつて「今年の七月戊子の日に、晉の平公がなくなるのでせう」と、豫言した。

〔經〕夏に、齊の子旗（樂施）が魯に亡命した。

〔傳〕齊の惠公の流をくむ子旗（樂施）と子良（高彊）とは、ともに大酒家であり、また婦人のいひなり次第になつて片手落な態度が多く、國民から嫌はれてゐた。またこの二家は陳桓子や鮑國などよりも勢力が強く、この人人からも嫉まれてゐた。夏になると、陳桓子のもとへ、子旗と子良とがあなたを攻滅ぼさうとしてゐます」と、知らせるものがあつた。鮑國の方にも同じやうなしらせがあつた。陳桓子はとにかく鮑國と相談して協同策戦を張りたいたと、家來たちには武装をさせて、鮑國の家に行く。その途中で酔つぱらつた子良が馬を急がして何處かに出かけるのを見た。鮑國の家に着いて見ると、此處でも家來は皆武装してゐる。一人は協議して、子良と子旗との様子をうかがふと、兩人は酒盛の最中である。それでは自分たちを攻めるといふのは噂に過ぎなかつたと知つたが、これを機會に逆にこちらからあの兩人を攻めようと、陳

桓子と鮑國とは一つになつて、子良と子旗とを攻め立てた。

酒の酔もさめた子良は「まづわが君を味方にしなくてはならぬ」といつて、その足で王宮に駈けつける。門が開かないので、いら立つて弓を射かけた。齊の家老の晏平仲が朝服姿もいかめしく、王宮の前に立つてゐる。四人はそれぞれ晏平仲に誘ひをかけるが、どちらにもしたがはなかつた。家老のものが「陳桓子や鮑國の方に御味方なさいますか」とたづねる。「一人はいつも酒に酔ひ、一人は國亂を起さうとしてゐる。そんなものの味方はせぬ」とそれでは子良や子旗の方に御味方なさいますか」「五十歩百歩だ。やはり味方などは思ひもよらぬ」とでは、御引上なさいますか」「わが君の一大事だ。それを見捨てて引上げては臣下の名がすたつてしまふ」かういつてゐるうちに王宮の門が開かれ、齊の景公は晏平仲と王黒とに命じて、子良と子旗とを伐たしめた。五月庚申の日に、稷の地で大勝し、さらに進んで、國民と諸共、國境の鹿門の地で子良と子旗との軍を撃破する。兩人は國境を越え、魯の國に亡命した。

陳桓子と鮑國とは、子良、子旗の領地や財産をすべて奪はうとした。晏平仲はそれを見て、「あなたがたの私有にしてはいけません。もともとわが君から賜はつたのですから、君に返上いたすのが本當です」と諫める。陳桓子もそこで反省して、それらを全部君に返上申上げ、自身は莒といふ土地に隠居した。

魯の襄公三十一年に齊の子尾に追はれた子山、子商、子周の三人も、昭公八年に子旗に追はれた子城、子公、公孫捷の三人も、陳桓子の盡力によつておのおの土地を賜はつて齊に呼びも

どされた。また國中の生活難に苦しむ人々へ、彼は粟を振舞つて人望を得、一方大輿に手を廻して、景公の生母穆孟姬（叔孫僑如の娘）の機嫌をとつた。かうして陳桓子の一家はだんだんに勢力を増したのである。

〔經〕秋七月になると、季孫意如を大將に、叔弓と仲孫疆を副將として、魯の軍隊は莒を伐つた。

〔傳〕秋七月に、魯では季孫意如を大將として莒を伐ち、鄭の地を手に入れた。この合戦の捕虜を昭公に獻じ、人の鼻血を絞つて土地祭を行ったのを臧武仲が齊の地で聞傳へ、周の景王は魯の祭をお悦びにはならぬであらう。今度の祭の方法はまつたく禮にはづれてゐる。人間を牛や羊と一つに見て、どうして幸福が来よう」と評した。

〔經〕戊子の日に、晉の平公がなくなつた。九月になると、魯では叔孫婁を代表として、平公の葬儀に参列させた。

〔傳〕今年の春に、鄭の裨黓が豫言したとほり、七月戊子の日、晉の平公がなくなつた。鄭の簡公が親しく弔問する目的で黄河のほとりまで出向くと、晉では早くもそれを辭退する使者をよこした。そこで鄭からは游吉が使者となり、晉に弔問に行つた。九月に魯の叔孫婁、齊の國弱、宋の華定、衛の北宮喜、鄭の罕虎および許、曹、莒、邾、滕、薛、杞、小邾の代表者が晉に出向いたのは、平公の葬儀に参列するためであつた。

晉では平公につづいて昭公が立つた。鄭の子皮が祝賀の辭を述べに、献上物を持つて行かう

とした。子産がそれをとどめて「喪に籠つてゐられる時には、献上物を持参しないのが本當です。また、献上物を披露する際には、君をはじめ妃の御方から家老の人人に、二百端づつの絹を差上げるのが例となつてゐます。晉には御家老が三人ゐられますから、都合五人の方に合計一千端を用意しなければなりません。今あなたが、千端の絹を持参しても喪中の昭公にお目通りはできず、できないといつて千端の絹を持つて歸國することは不可能です。さうして改めて出向く際には、また千端の絹が必要ですから、そんなことをしてゐれば、國が亡びてしまひます」と、説明した。それでも子皮は承知せず、無理に献上物を持つて出かけてしまつた。

やがて平公の葬儀も終る。諸國から集つた家老たちは、この序に、新しく立つた昭公に御挨拶申上げたいといひ出した。叔孫昭子が「現在昭公は喪に籠つてをられます。御挨拶申上げるのは禮にかなひません」と、とめようとしたが、家老たちは承知をしない。叔向が仲へ入つて「御家老がたのお役目は終りました。わが君に挨拶されようとするあなたがたのお氣持はわかりますが、御承知のとほり、わが君には御父君をなくされまして、喪の衣をまとうてをります。目出度い服と着かへてあなたがたを引見することはできません。といつて喪服のままお會ひすれば、弔問を二度受けることになりません。どうしたらよいでせうか」と、述べ立てた。この道理の立つた申し條に、家老たちも返事に窮して、強ひて挨拶をしようといひ出すものもなかつた。

鄭の子皮は祝賀の辭を言上できなかつたため、用意して來た千端の絹をつまらぬ事に使ひは

たして歸國した。歸國するとすぐに子羽を招き、「知ることはやさしいが、行ふことは難かしい。自分はまさかと疑ひながら、折角の子産殿の忠告を押し切つて行つたが、やはりあの人の言葉は正しかつた。今となつては曾はす顔がない」と、懺悔した。

叔孫昭子が晋から歸國した。家老たちに交つて子良（高壘）も挨拶に出て、一足さきに歸る。その後で昭子は家老たちに語つて「むかし慶封が追放された時、子尾殿は身にあまるほどの領地を賜はりながら、しばらくしてすべてを君に返上して、立派な評判をとつた。その臨終に當つては、君の御召車を拜借した程であるのに、その子の子良は他國に流浪してゐる。子良といふ男は父の名譽を汚し、一家をつぶして、はては浪人までしたあさましい人物だ」と、慨嘆した。

〔經〕十二月甲子の日に、宋の平公がなくなつた。

〔傳〕多十二月に宋の平公がなくなり、太子の佐が立つて元公となつた。元公は父の寵臣であつた柳といふ男を非常に嫌ひ、折を見て罰する心があつた。柳は早くもそれと察し、元公が籠る喪室に炭をおこして、朝夕位牌に向ふ席を煖めておいた。そして元公がその席に出る頃をみはからひ、そつと火鉢をとりのける。平公の葬儀が行はれるまでに、柳は元公の意をすつかり得てしまつた。

十一年

〔經〕十一年春、王曆の二月に、魯の叔弓が宋に行き、宋の平公の葬儀に参列した。

〔傳〕「今年は諸侯のうちで誰が吉であらう。また、凶にあたる諸侯は誰だらう」と、周の景王が萇弘（家老）に尋ねたので、萇弘はかう豫言を申上げた。「今年に蔡の靈公が君を弑してから十三年目にあたり、歳星の地位が十二年前と同じです。ふたたび蔡に凶事がありませう。多分蔡が蔡の國を手に入れるのではないかと思はれます。しかし、楚はあまりに愆張りすぎるので、現在の楚の君（靈王）が先君を弑してから十三年目、つまり明後年には楚に凶事が見舞ひ、蔡は復活いたします」と。

〔經〕夏四月丁巳の日に、楚の靈王が蔡の靈公をあざむいて、申といふ地で殺した。

〔傳〕楚の靈王が申の地から蔡の靈公を招いた。蔡の靈公はすぐさま出發しようとする。家老たち君の袖を控へて「楚の君はわが國を合併する機會をうかがつてをります。うっかり甘い言葉に乗るととんだ結果を招きますから御注意あそばせませう」と、諫止したが、それを聞入れずに出かけた。三月丙申の日に、楚の靈王は武装した家來を幕の蔭に忍ばせて、蔡の靈公を申の地でもてなし、酒宴を張つた。十分に酔はせておいてから搦めとり、夏四月丁巳の日に、從者約七十人と共に靈公を殺してしまつた。

〔經〕楚の王族の弃疾が軍隊を指揮して蔡の國を包圍した。

〔傳〕楚が強力な軍隊で蔡を攻めたと聞いた晋の韓起（韓宣子）は、叔向にむかつて、「楚は蔡を合併するだらうか」と尋ねた。「多分この戦争は楚が勝ちませう。蔡の靈公はその父君を弑

して立つたばかりでなく、租税を増加したので、國民から恨まれてをります。すから、今度の事は、天が楚の君の力をかりて蔡を討つたとも考へられます。しかも、楚の靈王はさきに陳の人人を騙してその國を併合し、今また卑怯な手段で蔡を手に入れようとしてゐるのですから、勝つたとしても長くは榮えません。一度は道にそむいた方法で成功しても、二度目はうまく行くものではないとありません。天が不善の人に手を借したのは、その人を幸福にするのではなくして、惡業のかぎりをつくさせ、その後には罰を下すためであります。かう叔向はこたへて、楚の運命を豫言した。

〔傳〕五月甲申の日に、魯の昭公の母君がなくなつた。魯では比蒲の地で最近の兵器を使用した大演習を行つた。

〔傳〕五月に、昭公の母君（齊歸）がなくなつた。國を擧げて哀悼の意を表さなければならぬ時期に、比蒲の地で大演習を行つたのは、禮にそむいてゐた。

〔經〕魯の仲孫疆が邾の君と會合し、祿祥の地で平和を盟つた。

〔傳〕魯の仲孫疆が邾の莊公と會合し、祿祥の地で平和を盟つた。喪の折に大演習を行ふのは禮にそむいてゐるが、國際間の親交を目的とする會合はこの限りではない。

魯の泉丘といふ土地に住むある人の娘が夢を見た。夢のなかで帷を幕の代りとして、自分が仲孫疆（孟僖子）の祖先代代の墓所の上に張つてゐた。帷を張るといふことは妾となるのを意味し、帷を幕の代りとして上に張ることは、妾となつて子を生むことを意味してゐる。そこで

この娘は親の承諾も受けず、義妹と一緒に「もしも御前の胤を宿したなら、おたがひに助け合ひませう」と、清丘の神に誓ひ、仲孫疆の家に押しかけた。彼はこの二人を愛妾の蕢氏のところへ召使ふやうに命じた。やがて彼が祿祥から歸つて蕢氏の家にとまる。二人はいづれも寵愛を受けたが、泉丘の娘の腹から懿子と南宮敬叔とが生れ、義妹の方には生れなかつた。娘は神前の誓をまもり、義妹に南宮敬叔を育てさせた。

〔經〕秋になると、魯の季孫意如が晉の韓起、齊の國弱、宋の華亥、衛の北宮佗、鄭の罕虎および曹、杞の代表者とともに厥愁の地で會合した。

〔傳〕楚軍は引續いて蔡の國を攻めてゐた。晉の荀吳が韓起にむかつて「さきに楚が陳を滅ぼしたとき、わが國はそれを救ふことができませんでした。現在また蔡を救へぬとしたならば、わが國の鼎の輕重を問はれることになります。諸侯の長としての資格がどこにありませんか」と、言葉をあげましていつた。韓起もそれには異存なく、秋になつて、諸侯を厥愁の地に會合して、蔡を救ふ相談にとりかかつた。

會合の通知を受けた鄭の子皮は出發しようとした。子産がその邸を訪れ、「今度の會合は成り立たせません。蔡は小國でありながら、楚と張合つて一步も譲らず、ますます楚の怒を深めてゐます。楚は楚で、大國をよいことにして、道に外れた行動をくり返して、これまた停まるところを知りません。私が考へますのに、これは天が蔡を見放して楚の惡業を募らせ、そのかぎりを盡したところで一時に罰を蒙らせようとするのではないでせうか。蔡はやがて亡びます。」

そして三年後には楚の靈王が災難にぶつかります。善悪のむくいは十三年目に來るといひますから、靈王が先君を弑したむくいは、きつと三年後にまゐります」と、豫言した。晉では孤父といふものを楚につかはして、蔡のために寛大な處置を申出たが、楚はまつたく耳をも傾けなかつた。

周の單成公(大臣)が晉の韓起と威の地で會合した。その際、單成公の目つきが下を向き、態度に緊張を缺いてゐたので、叔向は「周の大臣ともあらう人がどうも謹嚴を缺いてゐる。あんな方ではなかつたはずだが、この様子では、多分死期も遠くなからう」と、豫言した。はたしてこの豫言どほり、單成公は今年の冬に世を去つた。

(經)九月己亥の日に、魯の昭公の母君にあたる齊歸といふ方を葬つた。

〔傳〕九月に、昭公が母君にあたる齊歸といふ方を葬つた。葬儀にあつて、昭公の顔色に悲しみの色がまると見えなかつたのを、晉からこの葬儀に參列した人が歸國して、史趙に物語つた。「さうか、昭公はやがて國外を流浪されるであらう。永久に魯の政治を行はれる方とは思はれぬ」と、豫言めいたことを史趙はいひ、左右のものからその理由を問返されて「母方の姓でうらなつてみたのだ。昭公は歸といふ姓を名乗る人の腹から生れたにもかかはらず、その母君がなくなつてさへも憂ひ顔をなさらぬやうでは、自分の血縁に少しも同情のない證據だ。さうした方を魯の御先祖が加護されるわけはあるまい」とこたへた。

晉の叔向もまたこれを聞いて、次のやうに昭公の將來を豫言した。「魯の王室は衰微をきは

めるであらう。その君は母君の大喪にあたりながら、無用な調練さへ廢止なされぬ。三年間は喪に籠るといふ習慣を破つて、たつた一日さへ悲しみの色すらも見えぬ。喪中に大演習を行ふなどは以ての外で、國民が王室を尊敬せぬ證據だ。また、昭公が哀悼の色をまつたく見せぬのは、血縁に同情のない證據だ。國民の全部が君を君とも思はず、昭公がまた血縁に同情がないならば、その結果は、どうしても昭公は國政を行へなくなり、王室は衰微するのが當然であらう」と。この豫言はまたもの申し、二十五年に昭公が齊へ亡命するのである。

(經)冬十一月丁酉の日に、蔡を滅ぼした楚は、捕虜としたその太子をいけにへととして祭を行つた。

〔傳〕蔡を滅ぼした楚は、冬十一月にその太子をいけにへととして岡山の祭を行つた。申無宇がそれを評して「こんな不祥事はありません。神に供へるいけにへは、動物ですら勝手に代へられぬのに、ましてや諸侯の身をいけにへとするなどは、今まで聞いたこともありません。きつと後悔なさることがありませう」と、いつた。

十二月になると、周の單成公がこの世を去つた。さきに晉の叔向が、あの方は死神にとりつかれてゐると豫言したとほりだつた。

楚の靈王が陳と蔡との國境にある不羹といふ土地に城を築き、王族の弃疾を蔡の君とした。

「わが子の弃疾を蔡の君としたが、これは楚にとつて利益であらうか、なからうか」と、楚の靈王が申無宇にたづねた。「腹藏なく申上げますれば、私は賛成いたしかねます」と、申無宇はかう

言上して、その理由を述べ立てた。自分の子を見分けるのは父親が第一番であり、家來の性質を識るのは主君に越したものはないと承知してをります。むかし、鄭の莊公が櫟の地に城を築いて王族の元（人名）をおきましたために、昭公が位に登れなかつたことがあります。また、齊の桓公が穀の地に管仲をおいたため、今日もなほその餘慶を蒙つてをります。ただこれだけの例からも、王族を大城に封ずれば國の害となり、功臣を地方に封ずれば國の利となること考へられます。現在わが國では弃疾殿は王子の身でありながら都をはなれ、鄭丹といふ男は他國者でありながら君の御身近く、勢力を振つてをります。これは決してわが國のため良いことではございません。「一國のなかに、大きな城を、國都以外に構へることはどうだ。國にとつて善か悪かどちらであらう」「これも亦、私は感心いたしません。いろいろな例が證據立ててをります。枝や葉がしげつて幹の細い木を御想像ください。さうした木がどうなるかは、私から申上げるまでもなく、わが君におかれまして十分御承知のこととございませう」

十一年

〔經〕十二年の春に、齊の高偃が軍隊を指揮して、北燕の君を陽の地に入れた。

〔傳〕十二年の春に、齊の高偃が北燕の君の款といふ人を唐（陽）の地に入れた。北燕の君は以前齊に亡命し、齊ではそれを本國にもどさうとしながら、賄賂に目がくらんで果し得なかつたことがあつた。今年になつて、唐の人人がこの方を援けて本國にもどす計畫をたててゐるのを

知り、齊の高偃は、まづ第一歩として北燕の君を唐の地に入れたのである。

〔經〕三月壬申の日に、鄭の簡公がなくなつた。

〔傳〕三月、鄭の簡公がなくなり、葬儀を行ふこととなつた。その道筋に游吉（子大叔）の家の廟があたつてゐる。人人はそれを取りこはさうとした。游吉は道路係の人夫たちに「先祖の墓地を取りこはしてはならぬ」と命じ、さらに言葉を續けて「もしも子産殿が檢分に來られて、どうしてとりこはさぬのだと申されたなら、私情としてどうしてもこはせません。しかし君の御命令であれば承知いたしました、とかう申すがよい」といひふくめた。やがて子産が檢分に來て、その理由を問ふ。人夫たちは游吉に教へられたままに答へる。子産は游吉の心中を察し葬儀の道筋を變更した。

すると、新しい道筋には、葬儀委員の家老の下役の家がある。その家を取りこはして一直線に進めば、朝のうちに柩に土をかけることが出来るし、廻り道をすれば午後にならないと埋葬は出来ない。游吉が「これを取除かなければならぬ」といつて「遠い國國から來られた諸侯方の代表者に手間をとらせては恐縮です」と、子産にまで申出た。が、子産は「諸侯の代表者は、格別の思召で遠路はるばると會葬されたのですから、埋葬が午後になつても差支ありません。それだけの理由ならば、國民に迷惑となることを避けたいと思ひます」とこたへ、その家を廻つて行列は進み、午後簡公の柩を葬つた。傳へ聞いた人人で子産の行爲を褒めぬものは一人もなかつた。

(經)夏になると、宋の元公の命を受けた華定が魯を訪れた。

〔傳〕宋では平公につづいて去年元公が立つた。その披露のため、夏になると、宋から華定(家老)が魯に向向いた。昭公は酒宴を張り、祝賀の詩を賦した。しかし華定はそれが何の意味か理解できず、御返事の詩も唱はなかつた。かうした教養に缺けた態度をながめた叔孫昭子は、「この人はやがて流浪しよう」と、豫言した。昭公の二十年に彼が宋を出奔するのを、昭子は見透したのだつた。

(經)魯の昭公が晉に向向かうとした。その途中、黄河のほとりまで晉からの使者に遭ふ。使者は昭公の入國を辭退するといふ君命を傳へたので、そのまま歸國した。

〔傳〕晉では平公につづいて昭公が立つた。そこで齊、衛、鄭の君たちが祝賀の辭を申し述べに晉に向向いた。

魯の昭公もまた、晉の昭公に挨拶をするために黄河のほとりまで出かけた。そこで晉からの使者に遭つて、やがて歸國したのである。一昨年、莒の領土の鄭といふ土地を魯が奪ひ、莒から晉に訴へられてゐる。晉ではその時がちやうど平公の喪中で、調査を延期してゐた。それで使者は、「調査が終つてしまふまで、御遠慮くださいとの命令でございます」と、昭公の入國を辭退したのである。晉から入國を拒絶された昭公は、やむなく王族の愁を晉につかはし、自身は黄河のほとりから引返した。

晉の昭公が、祝辭を述べに來た諸侯を招待した。鄭の子産は主君定公のお供をして晉に來て

ゐたが、今度の招待を辭退して、「現在私の國では先君簡公の喪中でございます。御好意はあ
りがたくお受いたしますが、喪が終りましてから何分の御沙汰を拜したう存じます」といふ。
鄭は小國の悲しきで、主君の喪中でも大國の機嫌をとる必要があつた。それを察した晉の人人
は、こころよく子産の申出を聞きとどけた。双方共に禮を心得た行爲であつた。

晉の荀吳(中行穆子)を接待役にして、齊の景公と晉の昭公とは酒宴を張る。宴がたけなは
になると投壺の遊が催された。投壺の遊といふのは、壺をおいて矢をその中に投入し、そこで
勝負を争ふ遊戯である。まづ、晉の昭公が矢を持って席を立つと、荀吳は、「清い酒は淮とい
ふ河の水ほどもあり、うまい肉はその河のなかの小鳥ほどもたくさんあります。どうか上手に投
入れられて、諸侯の長となつてくださいませ」と、後援する。首尾よく昭公は矢を壺の内に投
入れた。つぎに齊の景公が矢を持って立ち上り、「酒は澗といふ河の水ほどもあり、肉は小高い
丘ほどもたくさんあります。私がかうまく投入しましたら、交替に諸侯の長となりますぞ」と、冗
談をいひながら投げる。これも見事に壺の内に入った。

今まで黙つて控へてゐた晉の士匄(士文伯)は、もう我慢ができないといつた顔つきで荀吳
につめより、「あなたはとんでもないことを申されました。わが國は名實ともに諸侯の長では
ありませんか。投壺に當てたからといつて、諸侯の長になる、ならぬと、何の關係がありませ
う。あれはその場かぎりの遊戯です。わが君の御若年をよいことにして、齊の景公は交替に長
とならうなどと、聞捨にならぬことをいつて恥をかかせました。晉の尊嚴はこれで失はれ、景

公は二度とわが國にはまゐりませぬまい」と、言葉をあららげた。荀吳も負けてはゐるに、わが將兵は天下無双で、常に強敵の出現を望んでゐます。わが國につかへないで、齊のつかへる國はありません」と言ひ返す。險惡な雲行になつたのを感じた齊の公孫僂は、次の間から趨り出て、「日暮も近くなりました。君におかせられても御疲れかと存上げますから、これ中座させていただきます」と挨拶し、景公を促して早々に退座してしまつた。

〔傳〕五月に、鄭の簡公を葬つた。楚ではその家老の成虎を殺した。

〔傳〕楚の靈王は讒言を信じ、家老の成虎を若敖氏の殘黨といふ名目で死刑に處してしまつた。若敖氏が滅ぼされたのは、今年から七十餘年前である。(宣公四年の條に見える)成虎は自分を讒言するものがあるのを知つても、敢へて他國に奔らうとしなかつた。「春秋」に、楚がその家老の成虎を殺したとあるのは、家老といふ地位に未練を残して災難にあつたことを示してゐる。

齊の景公の前で、わが國は強大無比であると誇つた晉の荀吳は、齊に對してその威武を示す必要を感じ出した。それで彼は、齊の軍隊と會合するとの口實をつくつて鮮虞(異種族)の國に道をかり、突如として肥の國都である昔陽を攻め、秋八月壬午の日に、肥の國を滅ぼし、その國王を捕虜とした。

〔傳〕冬十月に、魯の王族の愨が齊に亡命した。

〔傳〕冬になると、周と魯との兩國に内亂が起つた。

周王から原の地に封ぜられた絞といふ男は無慈悲ものであつた。家來たちが相談して、その仲間の二三人を他國に亡命させて、世間のそしりを絞にむけ、それを追放しようといふ計畫をたてた。この計畫が圖にあつて、冬十月壬申の日に、原の人人は絞を追出し、その弟の跪を尋立てた。絞は領土を追放せられ、周の國都に逃げ出した。

周の甘簡公は自身の子がなかつたので、弟の過を跡目になほした。過は自分が今後勢力をふるふためには、成公や景公の一族が邪魔になると考へて、それらを除かうとした。早くもその陰謀を知つた成公や景公の一族は、劉獻公(周の大吏)に賄賂を贈つて、過を殺していただきたいと頼みこむ。劉獻公は承諾して、つひに過を殺し、成公の孫にあたる鱣(平公)を跡目に定めた。鱣は過に一味した人人をことごとく殺し、やつとその地位を安定させた。

魯では季平子が季氏を相續してからは、とかく南蒯と仲良く行かなかつた。南蒯は南遺の子を追出して、一切の家財をお上に返上いたしませう。あなたは、季平子の領地をおとりなさい。私は今までどほり費の土地を護り、あなたの家來になりませう」と、誘つて承知させ、また叔仲穆子をも味方につけた。そのうちに季平子は、叔孫昭子(叔孫婁)と訴訟問題を起す。南蒯はこれで叔孫昭子も味方になつたと安心して、いよいよ季平子を追出す手段にとりかかつた。

けれども季平子の勢力は非常なもので、昭公すら如何ともなし難い。それで子仲はことの様

子を昭公の耳に入れ、晉に援助を願ふ目的で、そのお供をして晉に行つた。南甌はそれでも勝てなからうと心細がり、費の人人をしたがへて叛き、齊にたよつた。子仲は晉からの歸途、衛の國まで来て南甌のそむいたことを知つた。それで魯に歸れなくなつてしまひ、そのまま齊にとどまつた。

(經)楚の靈王が徐を伐つた。

〔傳〕楚の靈王は州來といふ土地で冬の狩獵を行ひ、河の上流に陣した。もともとこの狩獵は動物を獲るのが目的でなく、將卒の士氣をさかんにして吳の國を征伐したい腹から出たのであるから、陣を張るとともに靈王は蕩侯、潘子、司馬督、鬬尹午、陵尹喜の五家老に命じて、吳の屬國となつてゐた徐の國をかこませ、吳を威壓した。雪がふつたので靈王は皮の冠をかむり、秦から贈られた羽根の衣を着て、豹の皮で作つた履物をはき、軍を指揮するために鞭を持つて出た。第二陣として乾谿に陣してゐたので、お供には家老の僕析父がしたがつてゐた。

日暮時になると、家老の子革が謁見を願ひ出た。靈王は冠や鞭をさし置いて、「むかし、わが先王の熊繹が、齊の太公の子の呂伋、衛の康叔の子の王孫牟、晉の唐叔の子の燮父、周の子の伯禽などと共に周の康王に事へたが、他の齊、晉、魯、衛の四國は、みな王から珍寶の器物を分け與へられたのに、わが楚の國だけは與へられなかつた。今、自分は使者を周につかはし鼎をもらつて楚の寶物としようと思ふが、王ははたして與へるであらうか」と尋ねた。周の景王はわが君に與へられるに相違ございませんと、子革は靈王に言上し、なほもつづけて

かういつた。「むかし、わが先君の熊繹様におかせられては、荆山のやうな片ほとりの地にあらせられ、柴の車に乗り、つづれの着物を着て、草深いところに住ませられ、ただ桃の弓と棘の矢とを以て不祥を禦いて御奉公いたされたばかりで、特にこれといふ産物を周王に献上したことはありませんでした。齊は周王の舅にあたり、晉、魯、衛の三國は王と同姓の國でございます。それで楚だけに珍寶の分器がなく、他の四國には分器があるのです。しかも、現在では周は衰へて、他の四國と共にわが君に服従してをります。わが君の申出を拒絶するやうなことは決してありません」

「では、この問題はどうかだ。わが先祖にあたる昆吾殿は、もとの許といふ土地に住んでをられた。その地は今も鄭の所有となつて、わが國に與へない。もしそれを求めたら、鄭はわが國に與へるであらうか」「それもまた、君の御希望どほりになるに相違ありません。周でさへ寶物を惜しまないのですから、鄭がどうして土地を惜しみませうか」「第三に、これも自分を惱ましてゐる問題であるが、むかしはわが楚國が、中央から遠かつたため、天下の諸侯はわが國よりも晉を畏れてゐた。現在楚は大いに勢力を張り、陳と蔡とを合併して、その地方からの租税も頗る多い。これはおまへたちの努力であると自分は常常感謝してゐるが、自分は今一步進めて、天下の諸侯がわが國を畏れなければならぬやうにしたいと思ふが、その見とほしがつてであらうか」「はい、見とほしは十分につきます。陳と蔡と、それからわが君が城を築きました不憂、この三國だけでも諸侯を畏れさせることができます。まして楚の國人は今までどほりわ

が君に忠節を誓つてゐるのですから、近い將來に天下の諸侯はことごとく君の御前にひれ伏すやうになりませう。

靈王と子革との會話がここまで進んだ時、細工を掌る路といふものが御前に出て、「わが君には圭玉で斧の柄を飾ることを御命令になりましたが、その作り方はいか致したものでせうか、恐れながら伺ひ上げます」と、言上した。それで靈王は斧を視に別間に入る。後に残つた家老の僕析父は、聲をひそめて子革にささやいた。「あなたはわが國で第一に人望を持つ方です。今のお話を聞いてゐますと、私にはあなたがわが君の御機嫌を損じまいと、心にもないことを申し上げてゐるとしか思はれません。それでは國のためになりません。何とかお考へください。」御心配くださるな。私は存分に双を磨ぎすましてゐます。やがて王が出て來られたら、この双でその悪心を斷ち切ります。

しばらくすると靈王は別室から歸り、ふたたび子革と語つた。折から記録係の倚相が御前を一禮して通りすぎる。子革は鄭の人で、楚に仕へて間もないので、「あれは立派な史官だ。よく目をかけてやるがよい。古書といふ古書を全部讀んでゐよう」と、靈王は自慢らしい顔でいふ。「私はあの方に質問したことがございます。むかし、周の穆王は天下中のあらゆる場所を知つて、心を晴したいと考へ、その用意をしてをりました。すると大臣の謀父といふ人が祈招の詩を作つて王の心を止めましたので、王はそのために大難にもあはれず、無事に祇宮といふ御殿でこの世を去ることができました。私は謀父の作つた祈招の詩を、あの男に問うたのです。

が、彼は知りませんでした。この程度の知識もないのに、遠いむかしのことを問ひましたとて、知つてゐるはずがございせん。」その詩を、おまへは知つてゐるのか。「知つてをります。——周の祈招將軍は心の和らいだ人である。わが君の評判をよくするかどうかはあなたの責任だ。徳を守る心を金石のやうに堅くさせ、國民を適度に用ひ、君の悪心を去らせてくれ。

——これがその大意であります。

何か深く感じたらしく、靈王は子革に目禮したまま別室に入り、數日のあひだは食事を出さずとも手をつけず、床に入つても熟睡がでなかつた。かうして煩悶の日を暮したものの、もともと貪慾な人であつたから、つひに大難にあつたのである。孔子がこれを評して、「古書に、私慾に克ち、禮儀に立ちかへるを仁といふと見える。これは實によい言葉である。楚の靈王がもしこの態度であつたならば、乾谿で弑されるやうな恥辱を受けなかつたであらう。惜しいことである」と、いつた。

(經)晉が鮮虞を伐つた。

〔傳〕晉の荀吳は八月に肥を攻め滅ぼした。肥の君を捕虜にして歸國する途中、事のついでに鮮虞(異種族)を伐つたのである。

〔傳〕十三年の春に、魯の叔弓が軍隊を指揮して費といふ小都市をかこんだ。

〔傳〕楚の叔弓が十三年の春に、費といふ小都市をかこんで、却つて大敗した。そこで平子が怒り「費の人人を見つげ次第、その全部を捕虜とせよ」と嚴命する。當時、費の地には南淵がゐる。平子は南淵に對して魯に反抗してゐたのであつた。平子の嚴命を傍て聞いてゐた冶區夫はこの時おもむろに口を開いて「それは宜しくありません。それよりはむしろ、費の人と見たら、凍えたものには着物を與へ、餓えたものには食物を與へてよい主人となつたならば、やがては一兵をも損じないで費を手に入れられませう」と、諫言した。平子もその言葉にしたがつたが、はたして明年、費の人人は魯のやり方に喜びなつて南淵にそむいた。

〔經〕夏四月になると、晉から歸國した楚の王族の比といふものが、靈王を乾谿で弑した。間もなくやはり楚の王族の弃疾が比を殺した。

〔傳〕楚の靈王がまだ執政であつたころ、家老の蕞掩を殺してその家財を取り、位に即いてから

はその一族の蕞居の領地を奪つた。また、許の地を他に遷して、その家老の圍といふものを人質とした。蔡の國の洧といふものは靈王の寵愛を受けてゐたが、楚が蔡を滅ぼしたときに、蔡の國にゐたその父は殺された。靈王は洧を留守役のなかに加へて乾谿に出かけた。申の地の會合にあつて（昭公四年の條に見える）越の家老は靈王にはづかしめられた。（昭公五年の條に見える）さらに靈王は鬬韋龜の領地の中轡を奪ひ、その子の蔓成然の領地をも奪つて、國境守護に左遷した。鬬韋龜が、やがて蔡の君の弃疾が楚の君となるかも知れないと考へ、わが子の蔓成然を弃疾に事へさせてゐたからであつた。かうした事情から蕞氏の家老、蕞居、許の圍、蔡の洧、蔓成然などは、みな靈王を恨んでゐた。そこでこの人人は、靈王が乾谿に出かけた留守をうかがひ、楚で職を失つた多くの人人を味方に引入れ、かつて辱しめられた越の家老の常壽過を手引して叛亂を起し、堅固な楚の城城をかこみ、そのなかで最も堅固であつた息舟城を陥入れ、それを増築してたて籠つた。

このほかにもまだ楚の靈王を恨んでゐる人があつた。それは觀從といつて、楚の觀起の子であつた。父の觀起は楚の上席家老の子南に氣に入られ、そのために國民から憎まれて殺されたのだが、その子の觀從は蔡の朝吳（家老聲子の子）に事へ、父の死はまつたく靈王の指圖だと考へてゐた。今や觀從にとつて楚は二重の敵である。父も楚に殺され、國もまた楚に奪はれた。そこで彼は父の仇を復し、同時に故國を復興させる計畫を立て、現在の蔡の君である楚の弃疾の命といつはつて、以前に楚から晉に奔つた子干（靈王の弟）と鄭に奔つた子首（靈王の

弟の二人を招いた。昭公元年に楚から亡命した二人は、何事かと思つて、おのおの蔡に近づいて来る。觀従は二人を郊外で迎へ、自分の計畫をうちあけて無理に一味に引入れて蔡の都に入り、不意に弃疾を攻めた。弃疾は食事をしたるが、暴徒が押入つたと聞いて、箸を持つたまま逃げ出す。觀従は今まで弃疾がゐる席に子干をつかせ、その食べかけの膳をとらせ、土地を掘つていけにへを用ひ、連判狀をその上につけて弃疾と盟つたやうに見せかけ、害にあはぬやうに子干をその場から去らしめた。

かうして準備ができあがると、觀従は蔡の國中にふれまはして、現在蔡の君であらせられる弃疾殿は、今回楚の靈王の弟君にあたる子干、子皙の御兩人を召し、楚に納れようとされて、即ち御兩人は楚にむかつて出發された。弃疾殿もすぐさま軍隊を率ゐて後援に行かれることとなつた」と、いつた。蔡の人人は楚に謀叛をたくらむ觀従を捕へようとする。彼は辯解して、「私はただ御兩人にしたがつたまでで、楚に謀叛をたくらむ賊はあの御兩人です。けれどもお二人ともこの地にはゐませんし、蔡の君ももう出陣されました上は、私を殺しても何の役にも立ちますまい。私を殺しても殺さないでも、靈王があなたがたを憤る心は同じです」といつたため、蔡の人人はどうすることもできず、觀従の言葉にしたがふ外はなかつた。

一方、故の蔡の家老であつた朝吳は、蔡の人人にむかつて「諸君たちがもし楚の靈王のために死ぬつもりならば、蔡の君の命令に反對して、成敗の結果を待たれるがよい。もし自分の地位の安定を望まれるならば、蔡の君に加勢してその御希望を遂げさせるのがよいでせう。直系

の上官の命にそむけば、何處へ行つても悪い結果しか生れません」と、煽動した。一同のものは「それでは蔡の君に御味方申上げませう」といつて、弃疾を中心し、子干と子皙とを招いて鄧の地で盟ひ、陳や蔡の人人には祖國を復活させてやるとの口實で兵を集めた。そして息舟城に籠つてゐる人人と連絡をとり、一舉に楚をくつがへさうとする豫定を立てた。

さて、豫定が立つと、楚の子干(比)、子皙(黑肱)、弃疾(蔡の君)、蔓成然、朝吳(蔡の家老)などは、陳、蔡、不羹、許、葉の軍隊を率ゐ、蕢氏、許、圍、蔡の浦およびその一黨とともに楚に攻め入つた。一同が楚の國都へ近づくと、陳と蔡との人人は、復讐の美名を後世に残さうと思つて「ここまでわれわれが攻めて来たことを後世に示したいから、壘壁を築かせてい

ただきたうございませう」と、願出た。弃疾も陳や蔡の人人の心を察して「速かに楚に入らねばならぬし、人人も疲れてゐるから、それでは簡単に垣を作らう」といつて、垣を作つて後世に残した。

楚に入つた弃疾は、以前から味方であつた須務牟と史彌といふ二人の楚の家老に命じて一足さきとその國都を攻め、太子の近臣を利を以て誘ひ、太子の祿と王族の罷敵とを殺させた。

かうして子干は楚王となり、子皙は執政となつて、靈王に對するために魚陵の地に陣を張る。弃疾は兵馬の權を握つて王宮の内外を掃除してのち、乾谿に人をやつてこの事を告げさせ、かつ「今すぐに靈王を見すてて歸るものは從來どほりの領地を與へる。後れて来るものは鼻を截るぞ」といはせた。この時、靈王は乾谿から兵を引上げて訾梁の地まで歸つてゐるが、弃疾の

宣言を聞くと、大部分は靈王を見すててしまった。

楚の靈王は、わが子が暴徒のために殺されたと聞いて、悲しみのあまり、思はず乗車から墮ち、「ああ、世の中に自分ほど子を愛したものは無いのに」といつて嘆いた。傍にゐる家來たちは「いいえ、わが君などはまだ幸福でございます。地位や身分の賤しいものは、年老いてから子がなければ、自分の屍を葬つてくれるものがありますので、往來や深山の間に屍を棄てられる覺悟をしなければなりません」と、慰める。靈王は身近くにゐる子革に尋ねた。「自分はあまりに多く人の子を殺しすぎた。それでこんな悲しい結果になつたのであらう」とにかく楚の國都附近までまゐりませう。そして、國民がどちらに味方をするか探らなければなりませんまい」「國民は自分に對して憤つてゐる。どちらに味方をするかは、探らなくても明白であらう」「それでは、陳、蔡などの地方に入り、諸侯の援軍を待つことにいたませう」「だめだ。その地方も全部叛いてゐる」「最後の手段として、他國に亡命し、晉の援助を請うたらいかでございます」「晉の援助を得てまで、自分は命をなからへようとは思はない。首尾よく楚を手に入れて、自分ほど幸福なものはないと思つてゐるが、その幸福はもう逃げてしまった。大國の世話になるのは、ただ恥辱を招くばかりだ」子革は、もう靈王は助かる見込がないと考へ、王を棄てて楚に歸つてしまつた。

頼みに思ふ子革にまで見すてられた靈王は、漢水の流にそうて南に進み、郢の地に入らうとした。申無宇の子の申亥は、「自分の父は靈王の命令を二度も犯したけれども、王は誅せられ

なかつた。これほどまゐりがたい御恩はない。その御恩をあくまで忘れず、自分はただ一人になつても王のお供をしよう」と、靈王の行先をさがし、棘といふ村の入口で遇ひ、自分の家に連れかへつた。夏五月癸亥の日に、楚の靈王はつひに申亥の家で縊死した。やむなく申亥は、自分の二人の娘を殉死させ、人知れず靈王を葬つた。

觀從が楚の君となつた子干にむかつて「あなたは楚の君となられました、弃疾殿が生きてゐる間は安心してきません。今の地位を利用してあの方を殺し、御自身を護られるのがよいかと愚考します」と、すすめたが、子干は「自分にはさうした薄情なことはできない」と、拒絶した。「さういふことを仰せられても、聽て人があなたに薄情なことをいたしませう。私はそれを待つてはゐられません」かう觀從はこたへ、子干を見すてて立去つてしまつた。

楚の國都では、毎夜人人が騒ぎ立つて、誰いふとなく「楚の靈王が押しよせて来る」との評判が立つた。これは弃疾の計略で、彼は第二段として、かうして子干を殺さうと考へたのである。乙卯の夜に、弃疾は多數の人人をつかつて、楚の國都の到るところを走りまはらせ、口口に「靈王が攻めて來たぞ」と、ふれさせた。國民は非常に騒いで右往左往と奔りまはる。弃疾は、また蔓成然を子干と子皙とのもとに走らせ、靈王が大軍を率ゐて押しよせました。國民は弃疾殿を殺し、靈王と内應して、今夜にも攻めよせてまゐります。どうか御覺悟ください。躊躇して恥辱を受けてはなりません。國民は非常に憤つてをりまして、われわれも百計つきてしまひました」と、本當らしくいはせた。子干と子皙とは、心頼みとしてゐる弃疾が殺されては

もう駄目だと、蔓成然の報告をすつかり眞に受けて自殺してしまつた。丙辰の日に、弃疾は楚王の位に即いた。名を熊居(平王)といふ。子干を誓の地に葬つた。これが誓赦のことである。楚の平王は囚人を殺して王の衣服をつけさせて漢水に流し、靈王だといつてそれを葬り、國民の心を安堵させた。平王が立つと、蔓成然(子旗)は執政となつた。

さきに吳の屬國の徐を伐ちに行つた楚軍が引上げて來た。吳軍がそれを豫章の地で破り、五人の大將を捕虜としてしまつた。

楚の平王は約束どほり陳と蔡との二國を復興させ、他國に遷した人人をもとの地にかへした。はじめ國政を行ふに當つて諸方に贈り物をする事になつてゐたので、その習慣どほり諸方面にいろいろな物品を贈り、人人に物を施して、ゆるやかな方針をとつた。ひととほり國內の秩序が立つと、平王は觀從を召し、自分が楚の君となれたのも、おまへの功績である。何か希望があればいふがよい。自分にてゐることならば、何事でもしておまへの功に報いたい」といつた。觀從は平王にこたへて「ありがたうございます。私の先祖はうらなひの役でしたから、どうか私も先祖と同じ役目を勤めさせていたきたいと存じます」といふ。それだけの希望ならば易いことだ」と、平王はその場で彼をうらなひの長官とした。

さらに平王は、枝如子躬を鄭につかはし、以前に楚が鄭から奪つた轅と櫟との地を贈物として、今後は親交を結ぼうとした。子躬が、平王の命を受けて鄭に出向いて様子をかがふと、鄭はまつたく楚に服従してゐるらしかつた。それで贈物の必要はないと考へ、その話を出さな

い。鄭ではいつまで待つても土地の話が出ないので、「噂では、私どもの主人に轅と櫟との地を返されるさうですが、いかがなものでございませうか」とたづねる。子躬は平氣な顔で「さうした話は少しも聞いてをりません。何かの間違ひではないでせうか」かうこたへて、楚に歸つて復命した。「土地のことはどうしたか」「とんでもないことをいたしました。その一件をすつかり忘れて、何も申さずに歸國いたしました」「おまへは自分の心の底まで知つてゐる。よく取りはからつた。感心する。家に歸つて休息するがよい。自分に何か事が起つたら、かならずおまへに相談しよう」

數年たつて、靈王の柩をかくしておいたと、申亥が訴へ出た。平王はそこで改めて靈王を葬り、楚の内亂はここに一段落をつげた。

楚の靈王や平王についてはいろいろな挿話がある。靈王がまだ楚の君とならない前に、どうかして天下を得たいものだと考へ、その成否をうらなつて見た。ところが二度うらなつてもすべて凶と出る。靈王はそこで非常に憤つて天をうらみ、「天が自分の希望をかなへてくれぬならば、自力で取つてやらう」とさげんだ。いよいよ楚の君となると、例を見ぬほどの暴君である。今度の内亂にあつて楚の國民は、一人として靈王に同情したものはない。これは五人のうちど

靈王の父の共王は、正夫人に嫡子がなく、妾腹に五人の愛子があつた。これら五人のうちどれを世繼としようかと悩んだ末、王廷にある先祖の廟の前に璧を埋め、その上に立つて神を拜したものを太子にしたいと考へた。愛妾とともに共王は美璧を埋め、五人の子に身を潔めさせ

て、年長順に庭に入つて禮拜することを命ずる。第一に入つて来た康王は、埋めてある璧を通り越して禮拜した。第二の靈王は璧からわづか外れてとどまり、第三の子干と第四の子哲は璧のところまで行かないうちに禮拜してしまつた。最後に弃疾(平王)が人に抱かれて庭に入つたが、璧の上につきちんと坐つて最敬禮を行つた。共王はそれを見て、この子こそ神意を得て楚を大きくするものであると、すこぶる喜んだ。かうした平王の運命を早くも知つた鬬韋龜はわが子の成然を平王に仕へさせて時機の至るのを待つてゐた。しかも共王の後には靈王が繼いで弃疾(平王)はわづかに蔡の君となつたにすぎなかつた。彼はそこで「幼い時から天は弃疾殿を助けられてゐる。この天意にそむいて靈王が立つたのであるから、楚の國には間もなく大亂が起るであらう」と、豫言した。

また、子干が晉から楚に歸つて靈王を滅ぼさうとした頃のことだつた。晉の韓起(韓宣子)が叔向にむかつて「子干はあるひは靈王を滅ぼして楚の君となるかとも思ふが、あなたの御意見はどうでせうか」と尋ねた。「いや、それはむづかしいでせう」かう叔向は反對する。楚の國人がことごとく靈王を悪んでゐるといひますから、子干と一緒に暴動を起し、子干を楚の君とするのではないでせうか。「むかしから五難といつて、國を取るには五つの難事があります。地位身分が高くとも、輔佐してくれる賢人がないのは一つの難であります。賢人の輔はあつても、親身になつてくれる大人物がなく二つの難であります。よしや親身になつてくれる人物があつたとしても、肝腎の本人が頭が鋭く、謀計に富んでゐなければなりません。

これが三つの難です。これだけの難事を克服したのちに、さらに民心を得ることが四つの難、人望を得ることが五つの難となります。今、この五難を子干にあてはめて考へてみませう。さうすればおのづからあなたの御質問に答へることになります。子干は前後十三年間晉にゐましたが、晉や楚と彼と交際したのは、世の評判があまりかんばしくない人ばかりです。つまり彼を輔佐する賢人がゐないことになりまます。また親身になつて彼の將來を忠告してくれる人は、あるひは死亡し、または他國に流浪してゐるといつた具合で、第二の難も克服はできません。つぎに、現在楚には隙がありません。乗ずる機會が到來してをりません。この際、無理に事を起すのは無謀であります。楚から亡命して一生涯晉に流浪してゐるやうでは民心を得たといへませんし、楚を亡命した時、誰も同情しなかつたのは、人望がなかつた證據であります。暴虐な楚の靈王は、やがて亡びるでせうが、その後子干が君となるとは、私にはどうしても考へられません。

「では、誰が君となると思ひますか」「弃疾といふ人にその資格があります。第一に彼は幼い時に神意を得ました。第二に陳と蔡との君となつてすこぶる人望があります。第三に人徳も十分に備はつてをります。第四に身分の高い人の腹から生れました。そして最後に楚では末の男が君になるといふ習慣にも該當してゐます。子干にないこの五條を身につけてゐますから、私は弃疾こそ靈王を滅ぼして楚の君となる人物に相違ないと断定いたします」

(經)秋になると、魯の昭公は劉、晉、齊、宋、衛、鄭、曹、莒、邾、滕、薛、杞、小邾の君

たちと平丘の地に會合した。

〔傳〕豪奢をきはめた虎祁の御殿が落成した。晉の御機嫌をうかがひに出た諸侯は、すべてそのあまりにも贅澤な様子を憎んで、心のなかに晉を裏切るやうになつた。

魯が鄭の土地を奪つたといふ訴を莒から受けた晉が、諸侯を率ゐて、魯を伐たうとしたことがあつた。けれども晉を心から尊敬しないのは、魯ばかりではないと知つてゐた家老の叔向は、「これを機會として諸侯に威を示さなければなりません」と、昭公に諫言した。昭公もそれにしたがつて、晉に服屬する諸侯をすべて一場所に會合させる用意をととのへた。今年になつて晉から吳の國に會合の通告を發し、昭公と吳の君とは良といふ土地で會合する豫定となつてゐた。ところが吳の國から良の地に到る水路に故障を生じたとの理由で、吳の君は會見を斷つた。昭公はやむを得ず、出かけてゐた良の地から引き還して平丘に向つた。

七月丙寅の日に、鄭の南方で閔兵を行つたが、約三十萬の晉兵が聚つた。かうして諸侯に晉の威武を示したのち、叔鮒（羊舌鮒）が軍司令官を兼ねて、平丘の地に諸侯を會合させた。この時、鄭の子産と子大叔とは例によつて定公のお供をして會に出かけたが、國を出發する際に子産が軍用の天幕を九張携へたのに反し、子大叔は四十張も持つて行つた。やがて子大叔はあまりに數多く持出したのを後悔しはじめ、途中で宿營するたびに天幕の數を減らして、平丘に着いた頃には子産と同數になつた。

晉の昭公は平丘に出かける途中で衛の地にとどまつた。軍司令官の叔鮒は衛に賄賂をつかは

せようと思つて、人夫をやたらに山林に入れて、見當り次第の樹木を勝手に伐採させる。衛では非常にこれを心配して、家老の屠伯を使者として、叔鮒の兄にあたる叔向を訪問させた。たくさんの錦と立派な料理を持參して屠伯はいふ。「わが國は貴國に對して裏切つた事實なく、したがつて貴國の御機嫌を損じた覚えもございません。しかるに今回、貴國の方方がわが山林に入つて、いつもと違ふ行動をされたさうですが、どうしたわけでございますか。叔向は料理だけを受けて錦を返しながら、「わが國に叔鮒といふ心の汚れた男がゐて、賄賂をむさぼらうとした仕業に相違ありません。ですから、御主君の命だといつてこの錦を彼に與へたなら、かならず御心配の種は消滅させよう」と、智慧を借した。屠伯はその言にしたがつて使者の者に錦を持たせると、その使者がまだ歸らぬうちに、叔鮒は人夫たちが山に入るのを禁止した。晉の人人は平丘で諸侯と盟はうとしたが、齊の人人が心中晉を裏切つてゐるので、それを承知しなかつた。それで晉の昭公は叔向を使者にして周の劉獻公に訴へ出た。「私の方から齊にむかつて同盟したいと申込んでも、齊では承知いたしません。どうしたらよいでせうか」と。劉獻公はそれに對へて、「同盟の約束は信を中心とする。昭公が信を守られれば、裏切る諸侯はないと思ひます。齊が約束に應じなくとも別に心配はいりません。十分に理を説いてきかせ、それでも承知しなければ武力で伐つまでのことです。その際は私も御援助申し上げませう」といつた。

周の援助を得ることになつた晉の叔向は、直接齊に出向いて、「諸侯がたは晉の命令に服

して平丘に聚つてゐられます。しかるに貴國だけが同盟を承知されないのは、何か理由がありませう。私は主人の命を受けて、その理由を承りに参りました」と、談判した。「晉を裏切る諸侯をすぐさま征伐されるといふならば、改めて盟を重ねる必要もありません。諸侯が、すべて貴國に服従してゐるといふならば、これもまた盟を重ねるのは無用でせう」「わが國が諸侯の長である以上は、時々諸侯を一定の地に會合させて、盟を重ねるのはむかしからの習慣で、何も裏切るとか裏切らないとかの問題ではありません。謂はばこれは禮儀であります。あなた國だけがこの禮儀を守らないのは、わが國を輕蔑してゐるからだと申しても辯解の餘地がないでせう。御再考あつたうへ、確とした御返事を承りたいものです」叔向は正論をばいて齊の人人を屈服させたのち、「諸侯のうちには間隙がある。わが威武を示さないと大騒動にならう」といつて八月辛未の日に、大演習を行つた。さらに壬申の日にふたたび模擬戰鬪を行ひ、軍旗に吹流しをつけて何時でも出陣するぞといふ様子を示したため、諸侯はすべて晉の威武に畏れをなした。

「魯の國が朝に晩にわれわれの國を攻めますので、われわれはやがて滅亡してしまひます。強大な貴國に貢物を献上しないのも、魯に攻められるためでございます」と、邾と莒の代表者が晉に泣きついた。晉の昭公はこれを信じて、平丘の會合には魯の昭公の出席を許さず、例によつて叔向を使者につかはし、「諸侯は甲戌の日に盟はうとしてゐますが、わが君は貴國と盟ふのを好みません。その日の御出席は御無用に願ひます」と、傳へさせた。これを聞いた魯

の子服惠伯は憤懣にたへず、「晉の昭公は、邾とか莒とかいふ未開國の讒訴を信じられて、同姓兄弟の交りを絶ち、聖人として仰がれる周公の子孫であるわが魯國を棄ててしまはれました。われわれはその心事を了解できませんが、出席無用とあればいたしかたがありません。承知しました」と、語尾を荒くして答へた。けれども叔向がつづいて、「わが君は三十萬の大軍を持つてをります。たとへ無理非道な原因からでも、三十萬の大軍が出動すれば、天下の諸侯は膽を冷しませう。まして正義と人道とのつとつて出陣したならば、敵對できるものはをりません。瘠せた牛が肥えた豚の上に倒れば、豚は死ぬといはれてゐます。わが三十萬の大軍が諸侯の軍隊と聯合し、さらに貴國に怨を抱いてゐる邾、莒、杞、鄆の人人をも加へて戰鬪の間に見えたならば、はたして貴國はどうなるでせうか。その結果は火を視るよりも明らかでありませう」と説いたため、魯では非常に懼れ、晉の命令にしたがつてしまつた。

〔傳〕八月甲戌の日に、諸侯は平丘の地で同盟した。八月甲戌の日に、諸侯は平丘の地で同盟したと記してあるのは、齊の國が服したからである。

この時、晉では、「陽のあるうちに平丘に集れ」と、諸侯に命令した。邾の子産はその前日に晉の昭公の御機嫌うかがひを終ると、近習にむかつて、「今日のうちに盟の場所に幕を張つておけ」と、嚴命した。子大叔は明日でも間に合ふと考へてか、別に氣にもとめない。夕方になつて子産が心配して、子大叔のもとに使者を出し、少しも早く幕を張らせるやうにしたけれ

ども、既に他の國國が場所を取り、適當な空地は見當らなかつた。いよいよ平丘の同盟式が始まり、鄭が晉に献上物を差上げる段となつた。子産は鄭の負擔があまりに重いことを晉に訴へてやまず、「強大國が弱小國へ同情し、保護をたれる目的でこの種の同盟が行はれるのであります。われわれ弱小國は強大國の保護のもとに、はじめて獨立を保つのでありますから、毎年一定の貢物を差上げる次第でございます。しかるにわが國に課せられた貢物はその額がすこぶる大きく、到底われわれ弱小國は負擔に應じきれません。また國によつては貢物の不公平もあり、われわれとしましては心から悦んで持参いたしかねるのでございませう。今日のやうに過大な負擔をわが國に課せられますならば、鄭は間もなく亡びてしまひませう。それではなんのために會合に出席するのか判らなくなつてしまひませう」と、日中から日暮まで争ひ、つひに晉の人人を論破して、貢物の額を減じさせた。やがて同盟が終ると、冷汗をかいた子大叔は、「あなたの辯論はあまりに調子が激しすぎました。萬一晉が怒つて、諸侯とともにわが國を攻めて來たらどうなさるつもりですか」と、子産を咎めた。が、子産は口許に笑さへ浮べて、「そんなに心配することはありません。現在晉は國論が統一せず、人心が一致してをりません。他國を征伐する餘裕など、薬にしたくともないのであります。こんな具合ですから、やがて晉は諸侯の長の地位からすべり墮ちませう」と、平氣で答へた。

(經)魯の昭公は平丘の會合に出席を禁じられた。晉の人人は魯の季孫意如を捕へて本國へ行した。やがて魯の昭公が平丘から歸國した。

(傳)魯の昭公は平丘の會合に出席を禁じられた。そののみでなく、晉の人人は魯の家老の平子(季孫意如)を捕へ、異種族に見張り番をさせた。同じく魯の家老の司鐸射は、錦を懷中にし、壺に入れた飲物を持つて、腹這ひになつて、平子に近づかうとして番人に發見された。發見されると、用意の錦を番人に與へ、無事に平子と會つて飲物を飲ませる。しかし結局、魯では平子を釋放させることができず、平子は捕虜の形式で晉に連行されてしまつた。平子の家來の子服漱もそれにしたがつて晉に行つた。

「ああ、もう駄目だ。自分を本當に知つてくれる人はこの世にゐない。善を行つても張合がなくなつてしまつた。かういつて鄭の子産は天を仰いで嘆息した。平丘の會合からの歸途で、子皮が死んだ通知を受取つたからである。孔子が子産を評して謂ふのに、「この同盟で、子産は國家の基礎を十分に固くした。立派な君子は國家の礎石である」と詩にいふとほり、子産は同盟の席上で國家を威權づけ、また、國民の負擔を軽くした感心な人物である」と。さらにかうもいつた。「諸侯が會合した場合に貢物の法則を定めるのは禮にかなつてゐる」と。

晉の軍隊が總動員されて平丘におもむいたので、鮮虞(異種族)はすつかり安心し、國境の警戒も怠り、守備も修めなかつた。晉の荀吳はそれを探つて、著雍(晉の地)から上軍を指揮して鮮虞に侵入し、中人(鮮虞の地)まで進んで戰車を以て大いに敵を撃破した。荀吳の策戦は見事効を奏して、晉はたくさんの戦利品を獲て引上げたのである。

(經)蔡の君や陳の君がおのおの本國に歸つて君位に復した。

〔傳〕さきに楚が蔡を滅ぼしたとき、靈王は許、胡、沈など群小國の君を楚に遷したが、平王が立つに及んでまづ陳と蔡とを復興し、それから許、胡、沈などの君たちも舊本土に復した。これは禮になつたことであつた。

〔經〕冬十月に、蔡の靈公を葬つた。

〔傳〕冬十月に、蔡の靈公を國君として葬つた。蔡は楚が復興してやつた國であるから、諸侯のなかに數へられぬとの意見もあつたが、平王はそれを排して諸侯の禮での葬儀を許したのである。これもまた禮になつてゐた。

〔經〕魯の昭公が晉に向かうとして黄河の畔まで行つた。それを晉の使者が斷つたため、昭公はそのまま歸國してしまつた。

〔傳〕晉の荀吳は、魯の昭公が晉に来ると聞いて韓起（韓宣子）にいつた。「諸侯がおたがひに親交するのは好ましいこととあります。けれども現在わが國は魯の家老をとらへてゐます。魯の家老をかへすならとなく、それになかつたならば、斷つた方がよくありませんか」韓起もその言葉にしたがつて彌牟（子文伯の子の士景伯）を黄河まで派遣して、昭公の來朝を辭退した。

〔經〕吳が州來の地を滅ぼしてしまつた。

〔傳〕州來は楚に近い小國で、吳と楚の間の要害の土地であつた。今年になつて吳がその州來を滅ぼしてしまふ。楚の執政の子旗は、わが國にとつて一大事だと、平王の御前に出て吳を征伐

したいと願出た。しかし平王はそれを許さず、「自分はまだ楚の君となつて日が淺く、國內の秩序をととのへる暇がない。さうした際に國民の力を戰場に向け、萬一敗れたならば後悔しても及ばない。なにも急ぐことはない。州來は吳の手に握られても、必要があればいつでもわが手に移すことができる」と、諭した。

魯の平子（季孫意如）はまだ晉にとどめられてゐる。それを心配した魯の子服惠伯は、内内中行穆子にむかつて、「あなたがたは邾や莒の口車に乗つてわが國の家老をとらへてゐられますが、魯とこれらの小國と、貴國にとつてどちらが價值多いてせうか。この點をよく御考慮あつていただきたいと思ひます。もし魯より小國の方が價值多いといふならば、魯としては大いに考へなければなりません。今日、貴國のほかにも、魯の事へる大國はあるのです」と、おどかした。穆子は魯の抗議を無理もないと、この旨を韓起に告げ、「さきに楚が陳や蔡を滅ぼした時に、わが國はそれを救ひませんでした。今また魯は、わが國の態度一つで晉に叛かうとしてゐます。小國のために同姓の國を棄ててもよいものでせうか」と、口添へした。

そこで晉では、平子を魯に歸すことになつた。惠伯はほくそ笑んで、さらにこんな要求を出した。「なぜ魯が貴國に憎まれてゐるかを、わが君は存じません。貴國は諸侯が聚つた席上で、突如理由も示さずにわが家老をとらへ、わが國に非常な恥辱を與へました。實際、われわれに罪があるならば、わが家老は殺されても構ひません。罪がないのに列國會議の席上で家老を奪はれ、今度は諸侯には聞えないやうに放免されたのは、まるでこそそと逃げ歸つたや

うてわが國の面子が立ちません。どうか公然と諸侯の目の前でお引渡しを願ひます。惠伯の言葉どほりにすれば、今度は晉の面目がまるつぶれになる。韓起はこの問題に頭を悩まして智者の叔向に相談する。叔向もしばらく考へてゐたが、「實に難問題で、私の手には負へません。愚弟の叔鮒ならばうまくやるでせう」と、答へた。すぐさま韓起は叔鮒を平子のところに使に出す。叔鮒は平子にむかつて事情を説明したのち、「わが國ではあなたを何時でも放免する用意をしてゐます。あなたが本國に歸られるのを嫌がられれば致し方ありません。わが國ではあなたを西河の館におつれて、永久にお留めする手配をもしてをります」と、半ばはおどし、半ばは口説いた。西河は晉の國境にあり、魯からは非常に隔つた田舎である。平子は一生涯そんな場所にとどめられては大變と、一足先に逃げ歸つてしまつた。惠伯は、そんなことと知らず、晉が諸侯を聚め、その席上で平子を放免する日を今か今かと待つてゐた。

十四年

〔傳〕十四年の春に、魯の季孫意如が晉から歸つた。三月には曹の武公がなくなつた。〔傳〕十四年の春に、魯の平子（意如）が晉から歸つたと「春秋」にあるのは、晉を尊んだ書方で禮になつてゐる。

魯の季孫氏の家來であつた南蒯が、主人の領地である費を根據地として叛かうとした時のことであつた。費の人人は既に南蒯の味方となつてゐる。同じく季孫氏の家來であつた司徒老と

祁慮突とは「私たちもあなたの御味方をいたしたいのですが、生憎病氣で思ふままになりません。恢復次第御味方に参じます」と、病氣を口實として態度を曖昧にしておいた。

そのうちに費の人人が南蒯に叛かうとする氣配を示した。二人は南蒯にむかつて「私たち二人の長い病氣もお蔭様で全快いたしました。大勢の者を集めた上で御味方の約束をしませう」といひ、費の人人を集めておいてかういつた。「自分たちは決して主君の御恩を忘れてはゐなかつた。ただ時機をうかがふために三年間も汝に服従してゐたのである。今や費の人人も汝を憎み、追出さうとしてゐる。太陽はこの地ばかりを照らさぬから、何處へなりとも立退きなさい」と。仕方なく南蒯は五日間の猶豫を請ひ、その間にいろいろと工作をした。しかし費の人人は南蒯の工作に應じなかつたので、五日の後、彼は遂に齊に出奔した。

齊に出奔した南蒯は、景公に招待されて酒宴の席に臨んだ。酔つた景公は彼を指さし「ここに謀叛人がある」と、戯れる。「いえ、私は自分が贅澤をしたさにやつたのではありません。魯の王室の勢力を張らうとして、國政を左右してゐた季孫氏に反抗したのです」と一生懸命に辯解するのを、傍にゐた齊の家老の子韓皙がさへぎつて「陪臣の身分でありながら魯の王室のためだなどと、この男は僭越至極のことをいふ」と遠慮なく面罵した。

さて、南蒯を齊に追つた司徒老と祁慮突とは、費の土地を魯に返上した。齊の景公もまた家老を使者として魯につかはし、南蒯が同行した費の人人を引渡した。

〔經〕夏には特記事項がなかつた。

〔傳〕夏になると、楚の平王は家老の然丹に命じ、西部の國軍を閱兵させた。それを機會にこの地方の國民に善政を施してすつかり從來の面目を改めた。やがて今度は家老の屈罷を東部につかはし、前と同じく閱兵を行ひ、善政を施した。かうして楚では國內を治め、隣國と親交を結び、五年の間軍兵を動かさなかつた。五年間民力を休養させたのは、禮にかなつた態度であつた。

〔經〕秋に、曹の武公を葬つた。八月になると、莒の君がなくなつた。

〔傳〕八月に莒の著丘公がなくなつた。その子の郊公は少しも悲しきやうな顔をしなかつたので、莒の國民は愛想をつかし、著丘公の弟にあたる庚與を立てようとした。莒の家老の蒲餘侯は王族の意恢を嫌つて庚與と仲がよかつた。また、郊公は王族の鐸を嫌つて、意恢と親しく交つてゐた。そこで王族の鐸は家老の蒲餘侯と相談し、「おまへは意恢を殺す。自分は君（郊公）を追ひ出して庚與を立てよう」と、示し合はせた。

楚の平王を輔佐した功勞を楯にして、執政の子旗はさまざまな要求をつぎつぎにと待ち出して際限がなかつた。平王はつひに決意し、九月甲午の日に、子旗（鬪成然）とその一味を殺してしまふ。しかし子旗の功を忘れず、その子の鬪辛に鄆の土地を與へた。

〔經〕莒では王族の意恢を殺した。これは十二月の出来事である。

〔傳〕八月に約束したとおり、莒の蒲餘侯は十二月に入つて王族の意恢を殺した。郊公は身の危険を感じて齊に奔る。王族の鐸はすぐに齊から庚與を迎へて君とした。この時、齊の隰黨と公

子鉏との二人が庚與を送りとどけたため、莒はその返禮に齊へ土地を贈つた。
 晉の邢侯が雍子と鄆（地名）の土地の所有權を争つてゐた。裁判官の士景伯が楚に出向いた。留守中、叔向の弟の叔鮒が代理となつて審判した。罪はどうしても雍子の方にある。旗色が悪くなつたと知つた雍子は、わが娘を叔鮒の妾とする。叔鮒はその色香に迷つて邢侯に罪があると斷じてしまつた。邢侯は大いに怒り、晉の王廷で叔鮒と雍子とを殺すといふ騒ぎになつた。
 「この騒動をどう裁いたらいいでせうか」と、韓起はまたもや叔向に尋ねた。「三人は同罪です。處罰に不公平があつてはなりません」と、彼は答へ、その理由を説明した。「雍子は犯した罪を知りながら賄賂を用ひて裁判に勝ちました。叔鮒は瀆職の罪を犯しました。そして邢侯は國法を無視して殺人を行つたのです。ですから生きてゐる邢侯には死刑を施し、死んだ雍子と叔鮒は死屍を街にさらすのが妥當かと思ひます」と。彼は感心して、その意見どほりにした。孔子がこれを許して「叔向は今時に珍しい人物である。國法の前には、肉身の弟とてもまつたく遠慮をしなかつた」と、褒めたたへた。

十五年

〔經〕十五年春、王曆の正月に、吳の君がなくなつた。二月癸酉の日に、魯の武公の廟で祭を行つてゐる最中に叔弓が死んだ。そこで音樂だけは中止したが、祭祀は進行させた。

〔傳〕十五年の春に、魯では、武公の廟で大祭を行つた。その期日を群臣に布告した席上で、梓

慎といふ人が、「大祭當日には不祥事があるかも知れませんが、武公の廟に赤黒色の悪氣の騰るのを見たからです」と、豫言した。二月癸酉の日に大祭が行はれ、その最中に席に臨んでゐた叔弓が突然死んでしまつた。人人は協議の結果、音楽だけを中止して大祭を續行したが、この處置は禮に合つてゐた。

〔傳〕夏に、蔡の朝吳が鄭に出奔した。六月丁巳の日に、日蝕があつた。

〔傳〕楚の平王が蔡を復興して、朝吳はふたたびその君となつた。楚の費無極は朝吳が平王からすこぶる信用されてゐるのを嫉み、それを除き去らうと考へた。彼は朝吳に對つて、「わが君はあなたをこの上もなく信用されてをられます。それにしても私がいつも不思議に思ふのは、あなたのお年の割に位が低いことです。なぜわが君に、もつと高い位を請はぬのですか。あなたが願出られれば、わが君はすぐにも許されるでせう」と、甘言で誘ひをかけ、一方朝吳よりも位が上にある人人には、「蔡の君の朝吳殿はわが君の御寵愛があついの増長して、あなたがたを追出さうと計つてゐます。あなたの地位を嫉んでに相違ありません。今のうちに何とか御處置されぬと大變なことになるませう」と、煽動した。夏になると、煽動された人人は結束して朝吳を蔡から追ふ。朝吳はやむなく鄭に逃げてしまつた。

詳細を聞いた平王は憤り、「自分は朝吳の人物を信用して蔡の君とした。彼がなければ自分楚の君とはなれなかつたであらう。(昭公十三年の條に見える)それほどの功勞者をなぜ追出したのか」と、なじる。費無極はそれにこたへてかう申上げた。「あの男を絶対に信用するのは

わが君だけで、一般の評判は決してよくはありません。朝吳がもし蔡にをりますならば、蔡は間もなく楚に叛きませう。われわれはわが君に代つて、僭越ながら蔡の翼を剪つたのであります。

六月乙丑の日に、周の景王の太子壽がなくなつた。

〔傳〕秋に、晉の荀吳が軍隊を指揮して鮮虞といふ異種族を伐つた。

〔傳〕秋八月戊寅の日に、周の太子壽の母君(穆后)がなくなつた。

晉の荀吳が大軍を率ゐて鮮虞(異種族)を伐ち、その屬國の鼓を圍んだ。鼓の家來たちが主君を裏切つて荀吳に内應したいと請うたが、荀吳は許さない。左右のものが不思議がつて「われわれに内應したいといふものをなぜ許さないのですか。味方に損害が少なく、敵城を手に入れられませうものを」といふ。人間は善を好み、惡を憎む心が大切だ。自分がかねがね叔向殿から承つてゐるが、敵の内應者を利用するなどは、武士の風上にも置けぬ卑怯な態度ではあるまいか。いやしくも義を知るならば内應者に賞を與へることはできまい。賞を與へなければ信を失ふことになる。故に力のあらん限り鼓の城を攻め、落城させればよし、させられなければ退くより仕方がない。武人は信義を何よりも尊重する。かう答へた荀吳は、内應者の姓名を鼓に通知して、改めて正堂堂と攻め立てた。

三月の間城を攻めてゐると、鼓のある人が降參を願出た。荀吳はその使者に對面し「まだまだあなたに元氣がある。守れるだけ守りなさい」と諭して、それを拒絶してしまつた。降

參を願ひ出たものを拒絶するとはどうしたことですか。軍兵と兵器とをこれ以上無駄に使ふのは忠義とはいへないでせう」と、部隊長の一人がなじる。荀吳（穆子）は「忠義な心では、自分はおまへたちに負けはしない。城一つ陥れたとて、國民に怠惰の氣を起させては何にもならないだらう。裏切者を獎勵するやうなことは絶対に慎みたい。國民に美風を守らせるのが、城の一つや二つを得るより餘程大事だ」といしめ、ふたたび堂堂と攻め立てる。やがて鼓の人人は「兵糧もなくなり、力も盡きはてました。降參するより外の手段はありません」と告げて来た。今度は鼓の人人全部の願なので荀吳ははじめて敵城を陥れ、凱旋した。歸國するとき、鼓の君の馘だけを引き連れ、他は一人も殺さなかつた。

〔經〕冬に、魯の昭公が晉に向いた。

〔傳〕平丘の會合で捕へられた魯の平子（季孫）が放免された。そのお禮を述べる目的で、冬になると、魯の昭公が晉に向いた。

十二月に入ると、周では穆后（太子壽の母君）の葬儀を行つた。晉の荀躒（士文伯）が正使籍談が副使となつて、その葬儀に參列する。葬儀が終ると喪服を脱ぎ、周の景王は二人を招待して酒宴を張る。酒宴の樽には魯から献上した壺を用ひてゐた。景王はそれに目をとめて荀躒にむかひ「諸侯はみな周に献上物をいたすのに、晉だけは何もしない。晉は周を慰安するのを忘れたと見える」といつた。荀躒にはその返答ができず、もちもぢしてゐる。見かねた副使の籍談が御前に進み「周王の御稜威で安穩に暮せますので、諸侯はあらそつて献上物をいたしま

す。しかしわが晉は深山のなかにあり、異種族と隣あつてゐてその征伐に追はれてをります。謂はば周王の御威光はわが國までとどかないともいへるので、寶物を献上いたすのを遠慮してをります」と、言上した。

景王はそれを聞かれて、舊くからの周と晉との關係をいろいろに物語り「おまへは記録係でありながら、かうした大事を忘れたのか」と、反駁する。籍談は一言の返答もできかねて、荀躒とともにすごす御前を退出した。その姿を見送つた景王は「あの男の子孫は絶えよう。祖先の業を忘れて記録係がつとまるはずはない」と、豫言した。

さて、歸國した籍談は、周の景王との會話を叔向に語つた。叔向はそれを聞き終つて、またもやかう豫言をした。「景王様はよい御最期をとげられまい。太子とその母君とを亡はれたにもかかはらず、酒宴を催すとは禮に缺けてゐよう。御自分で禮を缺いてゐながら、舊事を忘れたといつて人を非難するのは、非難する方が間違つてゐる」と。

十六年

〔經〕十六年の春に、齊の景公が徐を伐つた。

〔傳〕十六年春、王曆の正月に、魯の昭公は晉にゐた。魯がさきに莒を伐つて鄭の地を奪つた事件（昭公十年の條に見える）が解決してゐなく、そのため昭公は晉に幽閉されたのである。これは魯にとつての恥辱だから「春秋」の記録に載せなかつた。

突如として、齊の景公が、罪もない徐の國へ軍兵をさしむけた。

(經)楚の平王が、南方の異種族の君を誘つて殺した。
〔傳〕蠻氏(南方の異種族)の國に内亂があり、人人がその君を尊敬しなくなつたとの噂が楚に聞えた。平王はすぐさま家老の然丹に命じて、蠻氏の君をあざむいて殺し、一時その國を奪つた。が、やがてその子を跡目に直し蠻氏の國をつがせた。あざむいて他國の君を殺したのは禮

でないが、その子を跡目に立てたのは禮に合つてゐた。
正月に出發した齊の軍隊は、二月丙申の日に蒲隧(徐の地)に達した。徐の人人は一戦も行はずに降参し、郟や莒の代表者とともに齊の景公と蒲隧で講和條約を結んだ。その際、徐から景公に國寶の鼎を贈つた。

齊が徐を侵略した事件について、魯の叔孫昭子がかういつて嘆息した。「諸侯の長としての實力ある國がないのは、弱小國にこの上もなく不利である。齊の景公は罪もない徐を侵略して、勝手な條件で講和を結んだ。本来ならば諸侯の長がその無道を責め、齊を征伐するのが當然であるけれども、現在その實力ある國はなくなつてしまつた。天下のためにこれは悲しい事實である」

三月に、晉の韓起が使者となつて鄭に向いた。鄭の定公は、この大國からの使者をねぎらふ酒宴を催すことになつたが、その準備のとき、子産は役人たちに注意して、「大國の使者を襄應する場合はよくよく慎重にしなければならぬ。特にわが國の家老は氣をつけて、失禮があ

つてはいけない」といつた。ところが、孔張といふ家老が酒宴の時間に遅刻して、まごまごして招待席に入つた。整理係がそれを制めると、晉の使者の一行の後をこのこ尾いて行く。またそれを制めると、ますますあわてて、今度は演奏席に入つて坐つてしまつた。韓起たちはそれを見て、思はず吹き出して笑つた。

酒宴が終ると、家老の富子は子産を諫めて「彼は入國の人ですから、氣をつけて禮にはづれないやうにせねばなりません。かうたびたび笑はれました以上は、わが國を侮つて侵略する氣になるかも知れません。こちらに禮が具はつてゐても、大國はわれわれを輕蔑します。孔張が自分の席を忘れたのは、あなたの恥です」といつた。子産は怒つて「さういふ理窟は成立しません。もし不當な命令を下したり、言行が不一致であつたり、不公平な刑罰を行つたり、諸侯の會合に無禮であつたり、また、下が上の命にしたがはなかつたり、國防を怠つたりしたら、それは私の責任であります。しかるに孔張は前の執政(子孔)の世繼であり、わが國の使者となつて各國に向いた人です。地位といひ經驗といひ、立派にそなはつた申し分のない人物です。かうした人が自分の席を忘れたといつて、その責任を私にまで持つて來るのは心外です」と、こたへた。

韓起は寶玉を所有してゐた。これは一對の細工で、その片方は鄭の商人が持つてゐた。そこで韓起は使者として來た序に、片方の寶玉をも手に入れたいと鄭の定公に願出た。執政の子産は承知せず、「あなたの求められたく思ふ寶玉の一片は商人の私有物で、國庫に藏つてある官物

ではありませんから、折角ながら私共の手ではどうにもできません」といつた。子大叔と子羽とはその傍から子産に注意していふ、「わが國の現状では、晉に叛くといふことは國の滅亡を意味します。それに韓起殿の要求はそれほど大きくはありません。こんな事から兩國が國交斷絶になどなつたならば、後悔しても及ばぬでせう。あなたはなぜそれを惜しまれますか。求めて大國から憎しみを受ける必要はないでせう。商人から買上げて譲つたらどうですか。」私は晉を輕蔑するどころか、敬禮するからこそ與へないのです。また、韓起殿に眞心をつくしたと思つて拒絶するのです。君子は財物のないのを心配せず、位に立つて、世評の悪いのを思ふとか聞いてゐます。これは韓起殿にあてはまります。さらに、國を治めるには禮を中心とするといふ古語もあります。これは今のわが國にあてはまります。大國の要求を小國が應じてゐたらば、次第にその要求が大きくなり、結局は應じきれなくなつてしまひます。應じきれなくなつて拒絶したならば大國の憤りを買ひます。憤りを買ふのが恐しくて無理な要求に應じてゐれば、わが國は大國の領地同様となり、滅亡の一步手前に陥ります。さらに今回韓起殿はわが國と親戚關係を結ぶ目的で使者となつて來られたのに、自分の要求を遂げられたならば、君命にもそむくことになりません。これも罪ではありませんか。一片の寶玉を與へるか與へないで、わが國が滅亡し、韓起殿の名譽を汚すやうにもなりません。この點を考へれば、私が決して寶玉を惜しんでゐるないといふ理由がおわかりでせう。しかし韓起はあきらめきれず、自身でその商人と交渉して値段を安く定めてしまつた。商人

は韓起が晉の威をかりてあまりに無理な値段をつけたので、わが國では他國の方に物を賣る場合、御家老様の許可を受けなければなりません」と、いひ張つた。そこで韓起は子産に對面して、「先日片方の寶玉を賜はりたいとお願ひ上げましたが、あなたが御承知ないと知つて遠慮いたしました。今度自身で商人と交渉して値段も定めますと、あなたの許可がなければ賣れぬと申します。どうか届け出ましたときは、許可していただきたいと存じます」と、頼み込んだ。子産は早くも韓起が不當な値段で買はうとしてゐるのを察し、「わが御先祖が周の國から東方に遷つてこの國を開かれたときから、商人たちはわが御先祖とともに艱難辛苦をなめました。それでわが御先祖は商人たちの功勞を喜ばれて——商人たちは上に叛いてはならぬ。上の方では無理に商品を買上げるやうなことはしない。商品を強奪することもしない。どれほど利益ある品があつても、われわれは少しも文句はいはぬから、思ふやうに利益を擧げてよい——との約束を結びました。今日まで双方でこの約束を破つたことは一度もありません。今、あなたは二國の修交のために御光來下さいましたが、私の國との約束にそむく行爲をとられます。賢明なあなたは、かうした約束のあるのを知られましたら、無理に寶玉を手に入れようとはなさいませぬ。無理を無理と知つて押しとほせば、鄭は晉の領土同然となりませう。私共は職掌から極力それを防がねばならぬ立場にあります。一般には秘めてゐることを敢へて申上げました。御賢察ください」と、條理正しく申述べた。韓起もこれを聞いて寶玉のことは斷念し、「私は愚ものでとんでもないことを申上げてしまひました。一片の寶玉のために鄭の國を陥

れ、また自身を罪する結果にならうなどは夢にも考へ及びませんでした」と、鄭重に頭を下げて謝つた。

(經)夏になつて、魯の昭公は晉から歸つてきた。

〔傳〕四月に、鄭の六人の家老は、韓起を招いて送別の宴を張つた。その席上で韓起は、「どうぞどなたも詩を賦してください。私も承つて、あなたがたの御心持を知りたく存じます」と請ふ。子盞(子皮の子の嬰齊)がまづ野有蔓草の詩を唱つた。思ひもよらず御面會てきて愉快だとの意をのべたのである。韓起はそれが終るとにつこりして、「私の方こそ實に愉快です」と、答禮した。

つぎに子産が鄭の羔裘を賦した。善道を守るものこそ忠臣であるとの意が含めてあつた。韓起は「詩のなかの人物とくらべれば、私などはとるに足らぬ男です」と、謙遜した。子大叔がすぐさま褰裳の詩を唱ひ出した。鄭國に同情をたれてくださらぬと、鄭は晉以外の國を頼るやうになるかも知れぬとの意である。私の眼の黒い間は御安心ください。晉以外の國に御足勞を願ふことは絶對にありません」と、韓起はこたへる。子大叔が「ありがたうございます」と、禮をいふと、韓起は重ねて「あなたがこの詩を唱はれた御心持はよくわかります。やはりさうした心は誰もが持たいたいものです」と、褒めたてた。つぎに子游は風雨の詩を唱つた。これは君子に會つて悦ばしいといふ意である。子旗は有女同車を賦した。これは韓起の志を喜んだのである。子柳は褰裳を賦した。これは韓起が歌へば、自分たちも和してうたはうとの意を述

べなものであつた。韓起は喜んで、「鄭の國はますます盛大となるであります。あなたがたは君命を受けて送別の宴に出席してください。唱はれた詩はみな鄭のもので、晉と鄭との親交の意をあらはしました。かうした立派な人人が上に立つてゐれば、貴國の前途に御心配はありません」と、いつた。

韓起が鄭に好意を持つたのを知つて、子産は非常によろこび、他の五人の家老とともに最敬禮をして、「あなたはわが國に御好意をよせてくださいます。われわれ一同、改めて御禮申上げます」と、いつた。諛別するにあつて韓起はひそかに子産に寶石と馬とを贈つて厚く禮をのべた。一片の寶玉に迷つて不善を行はうとした私を、あなたはよくも諫めてくれました。これは私に貴重な美玉を賜はつたと同じです。あなたのお蔭で私は死をまぬかれました。僅少ですが御禮を受けてください」と、韓起は別に六人の家老にそれぞれ馬を贈り、無事君命をはたして歸國した。

晉にとらへられてゐた魯の昭公は、夏になると歸國を許されて魯に歸つた。昭公に隨行した子服昭伯(惠伯の子)が歸國して、「晉の王室は衰微しませう。昭公はまだ若く、六人の家老が實權を握つて贅澤三昧に耽つてゐます。やがて昭公がそれを見習ふやうになれば、晉の國もおしまひです」と、平子に語つた。ところが平子は昭伯の年が若いのをあなどつて、「おまへはまだ若い。そんな年齢で、國の存亡などわかるものか」と一笑に附し、さらに信ずる色がなかつた。

〔經〕秋八月己亥の日に、晉の昭公がなくなつた。九月に魯の國では盛大な雨乞祭を行つた。〔傳〕秋八月に、晉の昭公がなくなつた。夏のあひだ少しも雨が降らなかつたので、秋になると、魯では盛大な雨乞祭を行つた。

鄭の國でも大旱魃があつた。そこで屠擊、祝款、豎柎といふ三人の家老に命じ、桑山といふ山を祭つて雨乞をさせた。三人の家老は山の樹木を伐り倒してしまふ。雨はちつとも降らない。子産がこれを聞いて、「山を祭るのは樹木を育て上げるのが目的である。それなのに樹木を伐り倒してしまふとはとんでもない間違ひで、三人の罪は大きい」と、憤り、三家老の職と土地とを取上げてしまつた。

〔經〕魯の季孫意如が晉に出向いた。冬十月になると、晉の昭公を葬つた。

〔傳〕十月に魯の季孫意如（平子）が晉に出かけて、昭公の葬儀に参列した。晉に滞在中、彼はその國情を注意して、「やはり子服昭伯の言葉は當つてゐた。年が若いといつて一概にしりぞけた自分の方が誤つてゐたのだ」と、後悔した。

十七年

〔經〕十七年の春に、小邾國の君が魯に御機嫌うかがひに来た。

〔傳〕十七年の春に、小邾の穆公が魯に来朝した。魯の昭公が例によつて酒宴を張る。席上で平子が采叔といふ詩を賦した。これは君子が來られたが、何を贈呈したらよからうかとの意であ

る。穆公は歡迎の詩を受けて、菁菁者莪といふ詩を和した。これは平子を君子に喩へ、君子に會つてすこぶる愉快だとの意を含めてゐた。宴が終ると叔孫昭子は、「あれだけ謙遜でまた禮儀が厚いから、よく國を治められるのであらう」と、穆公を褒めたたへた。

〔經〕夏六月甲戌の朔にあたる日に、日蝕があつた。

〔傳〕夏六月に日蝕があつたので、叔孫昭子が史官の願ひを承知し、先祖の廟で祭を行はうとした。ところが平子は屁理窟をいひ出し、上役の威光が無理に中止させてしまつた。昭子は平子の前を退いてから、「多分あの人は君を追出すやうにならう。日蝕に對する禮をおろそかにするのは、君を輕蔑してゐる證據である」と、非難した。

〔經〕秋になると、鄭の君が魯に御機嫌うかがひに来た。

〔傳〕鄭の君が魯に御機嫌うかがひに来た。魯の昭公は例によつて酒宴を催し、その席上で「あなたの祖先の少皞氏は、官吏の役にすべて鳥の名をつけたとか聞いてゐますが、どういふ理由ですか」と質問した。その當時は、かうした例はよくあつたもので、別に珍しいともいへません。お尋ねで「から説明いたしませう」と、鄭の君はこたへ、その理由をかう説明した。少皞氏の父の黄帝時代には雲に瑞祥があつたといふので、官吏の役に雲の名をついた。また、炎帝氏の時代には火に、大皞氏の時代には龍に、共工氏の時代には水に瑞祥があつたので、それぞれのものにちなんだ官名をつけました。私の先祖の少皞撃が立つと、鳳凰といふ鳥が飛んで來ました。それで鳥を萬事の基準とし、官吏の役も鳥の名をつけた次第です。曆を正す官を

鳳鳥氏、春分秋分を司る官を支鳥氏、夏至冬至を司る官を伯趙氏、立春立夏を司る官を青鳥氏、立秋立冬を司る官を丹鳥氏、兵事を司る官を鳴鳩氏、法制を司る官を爽鳩氏といった類で、少皞氏のつぎに立つた顓頊の時から、かうした瑞祥がなくなつたために、官吏の役に特別な稱號をつけることもやんでしまひました」と。孔子はこのことを聞き、鄭の君を師として、いろいろな故實を學んだと傳へられてゐる。

晉の頃公は屠剛を使者として周に行き、雒水と三塗山とて土地祭を執行したいと願出た。屠剛から事情を知つた周の襄王は大臣の劉子にむかつて、「晉の使者は殺氣に満ちてゐます。土地祭のためにはありません。多分、楚と仲のよい陸渾(異種族)を伐つ目的でせう。その際わが國は晉に味方をするのが何かにつけて御便利だと思ひます」と、進言した。そこで周では異種族に對する兵備をととのへた。

(經)八月に入ると、晉の荀吳が軍隊を指揮して陸渾(異種族)を滅ぼした。

〔傳〕九月丁卯の日に、晉の荀吳(穆子)が大軍と共に雒水に着き、いけへの牛を水神に捧げて戦捷を祈つた。陸渾の人人はそれを知つたが、別に氣にもとめなかつた。晉ではその油斷を見すまして突撃し、楚と通じてゐるとの理由で、庚午の日に、陸渾(異種族)を滅ぼしてしまつた。陸渾の君は楚に亡命し、國民たちはなだれを打ちながら周に逃げる。周ではあらかじめそれに備へてゐたので、晉を援けて捕虜と戦利品とをたくさんに獲た。

晉はなぜ急に陸渾を攻めたのであらうか。晉の韓起がある夜夢を見た。夢のなかで、文公が

荀吳の手をとり、「おまへに陸渾の地を授ける」といつた。韓起はそれにしたがつて荀吳を大將として陸渾を滅ぼし、捕虜を文公の墓に供へた。

(經)多になつてからのある夜、火星の西に一つの彗星があらはれた。

〔傳〕一つの彗星が大火星の西方にあらはれたのを眺めた魯の申須(家老)は、「諸國に來年は大火が起らう」と、豫言した。昭公はさらに詳しく梓慎に觀察させた。梓慎は「申須殿が諸國と申されたのは宋、衛、陳、鄭の國國で、私も明年この國國に大火があらうと信じます」と、言上した。

鄭の裨竈もまたこの彗星をながめ、「宋、衛、陳、鄭の四國は、間もなく同日に火災が起りませう。もし私が寶玉の杯と玉で飾つた酒器とて祈禱をすれば、鄭の國から火災を追出せますと、子産に言上した。子産はあまりその言が突飛なため信用せず、それらの品品を與へなかつた。

(經)楚と吳とが長岸で戦ひ、互に勝敗があつた。

〔傳〕楚では陽匄が執政、子魚が兵馬の權を握つてゐた。今年の冬に、吳が楚を攻めた。陽匄はその復讐戦をはかつて吉凶をうらなふと凶と出た。子魚は「味方は河の上流にゐる。流れにしたがつて攻めれば何程のことがありませう。それにわが國では戦争のうらなひは兵馬の權を握る私がやることになつてゐます。私が今一度あらためてうらなひませう」と、心のなかで戦死を覺悟してうらなふ。今度は吉と出た。

楚軍は反撃して長岸（楚の地）で戦ひ、子魚は第一に戦死する。大將の討死に勵まされて必死となり、吳の大軍をさんざんにうち破り、その君の乗舟である餘皇といふ舟を捕獲した。味方の敗戦を口惜しがった吳の王族の光（闔閭）は「わが國寶の舟を敵に奪はれては、君に會はず顔がない。おまへたちの力を借りて、是非とも取返したいものである」と、嚴命に及んだ。そこで吳では策戦計畫を練つた結果、楚の人人は髮の毛を長くしてゐるといふので、髮の毛の長い吳の人を三人選んで分捕られた舟の側に隠れさせ、もし味方の軍が大聲で餘皇と舟の名を呼んだならば、かならず返事をせよ」といひ聞かせ、夜の闇にまぎれて楚の軍中に入りこませた。

夜の明けぬ間に、吳の軍勢は舟に近よつた。眞暗いなかで「餘皇！」と大聲でよぶ「おお、味方のなかから大聲で返事をするものがあるので、楚軍はぎよつとした。餘皇！」「おお、楚軍は呆れて顔を見合はす。三度目に「餘皇！」と呼び、「おお」と答へると、楚軍はもう浮腰になりながら、三人を發見して殺さうとした。吳の人人はこの機に乗じて大いに楚軍を破り、餘皇を取返して引上げた。

卷之二十四

昭公

十八年

卷之二十四

（經）十八年春、王曆の四月に、曹の平公がなくなつた。

〔傳〕周の毛得は悪心を起し、一族の毛伯過を殺して、家老の職を奪つた。これは十八年七月乙卯の日の出来事であつた。この事件を評した周の萇弘が「乙卯の日はむかしから悪日だといはれてゐる。この日に大罪を犯した毛得が永く榮えるはずはない」と、豫言した。はたしてその豫言どほり、昭公の二十六年に彼は楚に亡命した。

三月に、曹の平公がなくなつた。

（經）夏五月壬午の日に、宋、衛、陳、鄭の四國に火災があつた。

〔傳〕五月に入ると、夕方に火星が見えるやうになつた。丙子の日に強風が吹いた。魯の梓慎は「これが大火のはじまりだ。七日後にはかならず大火災があらう」といつた。戊寅の日はさらに風が強く、壬午の日には一層甚だしくなつて、宋、衛、陳、鄭の四國から發火した。この四國に火災があると豫言した梓慎は、高臺に登つて烟を見て、「自分がいつた四つの國に今大火

が起つてゐる」と、告げたが、數日たつとこの四國からそれぞれ魯に大火の通告があつた。鄭の國都の大部分が灰と化してしまつた。「去年私は子産殿に酒器と杯とをかりて祈禱したいと願つて許されませんでした。私の言をまだ用ひようとしなければ、わが國にはまたまた大火が起りますぞ」と、裨竈が鼻をうごめかせていふ。鄭の人人は、子産に寶物を借してやつてくださいと願つたが、依然として子産は許さない。子大叔は子産をなじつていふ。「國民を安堵させる力があつてこそ寶物の價値も現れるのです。今度ふたたび大火があれば、わが國は亡びませう。あなたは寶物をあまりに惜しみ過ぎます。大火があるかないかは天の思召で、人智では豫測できません。あの男が豫言者をきどつても駄目です。多くのことを豫言すれば、一つや二つはまぐれあたりにあたるでせう。そんなことは信用できません。子産はかう答へて、あくまで寶物を借さなかつた。子産の確信どほり、その後鄭には大火はなかつた。鄭に大火の起らぬ以前、家老の里析が子産に忠告した。「わが國には近いうちに大災厄があります。國民はそのために秩序を失ひ、國が亡びようとするほどの災難が起ります。私はそれより前に死ぬことになつてゐますから關係はありませんが、とにかく何處かへ遷都なさるのが安全でせう。」「御説ごもつともですが、遷都といふやうな大事業は私には荷が勝ちすぎて實行できません。」「火災が起つたときに里析は死んでゐた。子産はそこで忠告してくれた恩に報いるため、三十人の家來をつかはしてその棺を安全な場所に避難させた。」

(經)鄭の人人が鄭の國を攻めたのは六月のことであつた。

(傳)鄭の君が稻の出來高を調べに國內を巡行してゐた。その留守をうかがつて、鄭の莊公は突然鄭を攻める。留守をあづかつてゐた鄭の人人はいそいで城門の入口を閉ぢようとする。鄭の羊羅といふ大力無双の男が、その男の首筋をおさへて閉ぢさせず、鄭の軍隊を城門内に入れた。

城門の内部に入つた鄭の軍隊は、鄭の人人をことごとく捕虜として引上げた。國內を巡視してゐた鄭の君は、妻子や國民がすべて鄭の捕虜となつたと聞き、「自分には落ちつき場所がなくなつた」と、その場から妻子の後をしたつて鄭におもむいた。しかし鄭の莊公は、鄭の夫人だけをかへし、王女は留めてかへさなかつた。

(經)秋に、曹の平公を葬つた。

(傳)曹では秋になつて平公を葬つた。魯から會葬に向いたものが、周の家老の原伯魯の無學なことを、歸國して閔子馬(家老)に語つた。すると閔子馬は「周はやがて亂れよう。國民一般の風俗が紊れたのを家老が眞似をし、學問を重んじなくなつたから」と、周の將來について嘆息した。

火災の厄を祓ひ除かうとして、七月になると、鄭の子産は大火的に四方の神を祀つた。これは禮になつてゐた。

そこで鄭では觀兵式を行ふことになつた。子大叔の先祖を祭つた場所が道の北にあり、邸宅が道の南にあつてその間が狭く、君の通行の邪魔となる。子産は目を限つて、祖先を祭る場所

をこはすことを命じた。ところがその日限を三日も過ぎても子大叔は命を實行せず、人夫を道の南にならべて、「子産が怒るまで手を出さな。怒つたら先祖を祭る場所をこはせ」といひつけた。子産が出仕する途中でこれを見て怒る。人夫たちははじめて先祖を祭る場所をこはしにかかる。四辻の場所まで行つたとき、やつと子産は子大叔の意中を察し、從者をつかはして、改めて邸宅の方をこはせと命じた。

鄭に大火が起つたとき、子産は兵卒に武器を持たせて城壁の上に登らせた。子大叔が心配して、「實に大膽なやり方です。そんなことをすれば晉から疑はれて伐たれはしませんか」といふ。子産はにっこり笑つて、「大丈夫、心配はいりません。小國が武備を怠つたらおしまひです。かうした非常時になほさら油断は禁物でせう。小國が大國から侮られないのは、小國に分軍備がある場合に限りません。それだから私は敢へて兵卒に武器を持たせました」と、その理由を説明した。

やがて晉の國境守備隊長が抗議を申込んで来た。「貴國に大火が起つたとき、わが國の上下はこの上もなく同情申上げの出来るだけの御援助を惜しまぬ氣持でをりました。さうした氣持を察せず、貴國の御家老方が兵卒に武器を持たせて城壁に登らせましたのは、そもそも何の必要からでせうか」これに對して子産は、「わが國の災難に、御同情を賜はつたことについて御禮申上げます。もしあの際に國防を忘れてをりましたならば、わが國は何處から攻められてるかわかりません。わが國が無事であつたからお咎めだけですむので、萬一滅亡しましたなら

十九年

ば、折角の御同情も効果がなくなりません。それにわが國の國境は、ただ貴國だけではありません。他の國とも接してをります。けれどもわれわれが心から頼みとするのは貴國だけではありません。それをよく御承知でありながら疑はれますのは、はなはだ殘念に存じます」と、あざやかに答辯し、國境守備隊長に二の句をつがせなかつた。

〔經〕冬になると、許の國は白羽といふ土地に遷つた。

〔傳〕當時、許と鄭とは仲が悪かつた。許は楚の國境附近の葉といふ土地にあつたので、やがて許と鄭とが戦争状態となり、晉が鄭に味方をすれば、楚にとつて都合が悪くなる。楚の家老の王子勝はこれを心配して、楚の平王に許の國を遷すことを進言した。冬になると、平王はその言を受入れて、許を白羽といふ土地にうつした。

〔經〕十九年の春に、宋の元公が郟の國を討つた。

〔傳〕十九年の春に、楚の子瑕（家老）は國都の郟に城を築いた。魯の叔孫昭子は、楚の状態をつぶさに觀察して、「現在の楚は、諸侯を服従させて中央に進出したい大志はない。自國を治めるのだけで力いっぱい」と、評した。

楚の平王が蔡の君であつたとき、郟陽といふ土地のある娘と私通して太子の建（人名）を生んだ。やがて楚王の位につくと、伍奢（伍舉の子、伍員の父）を太子の師傅とした。費無極は

その副となつたが、太子の信任がない。そこで費無極は太子に怨を持つて、「太子はもう夫人を迎へられてもよい御年です」と、平王にすすめ、自分が使者となつて秦に向向いた。秦では喜んでその申出を承諾する。秦から来た夫人の候補者が絶世の美人であつたため、平王の心が動く。待つてゐましたと費無極は、太子に無断でその女を平王に差し上げてしまつた。十九年の正月に、秦から平王夫人の嬴氏が楚に迎へられたのは、かうした事情による。

鄆の君の夫人は、宋の向戌の娘であつた。この關係から向戌の子の向寧は、軍隊を出動させて、鄆のために鄆を討ちたいと願ひ、元公の許可を得た。二月に宋軍は鄆の都の蟲をかこみ、三月にそれを陥れた。鄆の人人は大いに恐れ、去年連れ歸つた捕虜を歸すことにした。

〔傳〕夏五月戊辰の日に、許の世繼の止といふものが、その君の悼公を弑した。己卯の日に、魯では相當な地震が感じられた。

〔傳〕夏に、許の悼公が瘧に罹つた。五月戊辰の日に、太子の止が手づから調合した薬を服用すると、その日のうちに突然なくなつてしまつた。そこで太子は恐れて晋に出奔した。春秋には太子が君を弑したと記録されてゐる。それについて世の人人は、「真心をつくして事へればそれでいいのである。薬の調合などは醫者に委せておけばよかつた。だからこそ君を弑したなどといふ悪名を後世にのこしたのだ」と、評した。

宋に攻められた鄆は完全に敗北してしまつた。その結果、乙亥の日に、蟲といふ鄆國の都會で、宋の元公は鄆、兗、徐の代表者と同盟した。

海軍を利用した楚の平王は、南に進んで濮といふ異種族を伐つた。かねて太子の建を怨んでゐた費無極は御前に進み、「晋が諸侯の長となれたのは、中央に進出したからでございませう。かかるにわが國は片ほとりであり、晋と勢力を争へない立場となつてゐます。北方の城父に城を築いて太子を置かれ、わが君はどしどし南方に進まれたならば、天下を得ることができませう」と、申上げた。平王はすつかり悦んで、太子の建を城父に住ましめた。

楚の執政の子瑕が秦に向向いた。秦の婦人があらたに楚におもむき、平王の夫人となつた御禮のためであつた。

〔傳〕秋風が吹くやうになると、齊の高發が軍隊を指揮して莒を伐つた。莒の悼公を葬つたのは冬になつてからであつた。

紀鄆をとりかこませた。最愛の夫を莒の君のために殺された一人の婦人があつた。未亡人となり、年をとつてから紀鄆に住んでゐたが、どうかして夫の仇を報いようと思つて、城の高さを計つたり、長い麻繩を作つたりして、秘密に自分の家に隠しておいた。城門の外には齊の軍兵がつかめかけてゐる。今こそ宿望をとげる時機だと、この老婦人は用意の麻繩を城外に投げた。齊の兵卒が拾つて孫書に差出す。孫書は夜の間にこれを利用して部下を城に登らせる。六十人ほど登つたとき、莒の人人のために繩は断ち切られてしまつた。しかも城外の齊軍は進軍の太鼓をうち鳴らしてわ

めき立て、城に登つた六十人も同時に大聲をあげて攻めかけた。莒の共公はすつかり恐れて西門から逃げ、七月丙子の日に、齊軍は紀郛を陥れてしまつた。

今年になつて鄭の子游(駟偃)が子絲といふ幼兒をのこして死んだため、親戚の人人が相談して子絲の叔父にあたる子瑕に跡目を相續させた。ところが上席家老の子産は平素子瑕の人格の低いのを嫌つてゐたばかりでなく、子絲といふ相續者をさしおいたのを立腹し、子瑕を立てることを許さなかつた。けれども別にそれを罰しようともしないので、子絲は母方の親戚である晋の家老に事の旨を告げた。

冬になると、贈り物を持つた晋の使者が来て、子瑕を立てた理由をうけたまはりたといふと談判した。子瑕はすつかり驚いて他國に亡命しようとしたが、子産がそれをも許さない。「ては、龜てうらなひませう。そのうらなひに私はしたがつひます」かう子瑕は弱音をふく。子産は聞えない振をして黙つてゐた。

鄭の家老たちは額を聚めて、晋に何と返事をしたものかと協議最中である。その結果をも待たず、子産は獨斷でかう答へた。「わが國は天の慈悲を得ませず、家老たちは病氣その他の原因で早世いたすものが多くあります。今回の子游も、子絲といふ幼兒をのこしてみまかりました。親戚の者が相談して跡目を定めただけで、これは子游一家の私事であり、わが國の興亡に關係したことはありません。ましてや貴國と何の交渉を持ちませう。子絲の母が貴國の御家老の肉親だとの理由で、他國の家老の跡目にまで異議をさしはさまれては迷惑千萬です。それ

ではわが鄭の國は獨立國とはいへなくなりませう」かういつて子産は贈物をも辭退したので、晋の使者もそのまま立ち歸つてしまつた。

楚の人人は州來を取つてそこに城を築いた。家老の沈尹戌はそれを見て、家老とこんな問答を交した。「楚はきつと敗れるであらう。むかし、吳の國が州來を亡ぼしたとき、楚の執政の子旗が吳を討ちたいと願ふと、まだ國民を撫育してゐないから戦争には早いと、その君は答へられた。國民を撫育してゐないのはそのときも今日も同じである。それにもかかはらず楚は州來に城を築いて吳に戦争を挑んでゐる。楚の勝てる道理がないではないか」「平王は五年間も租税を軽くさせ、政治に精を出しました。それでもまだ戦争は早いでせうか」「國家の秩序が正しくなり、國內が平和で、國民に不平がまつたく去らなければ民を撫育したとはいへない。平王はどしどし王宮を造營し、國民は日日に疲れ、他國に逃げ出すものが多い。こんな有様では租税を少しくらゐる軽くしたとて、何のたしにならう」

鄭に大洪水があり、時門といふ城門の外の淵で龍が鬪つてゐた。國民はそれを水神の祟りだと考へて祓ひのための祭を行はうと子産に願出た。が、子産は、「龍とわれわれと何の關係があらう。それよりも洪水の後始末をする方が肝腎だ」と、許さなかつた。

魯の昭公の五年に、楚の靈王が吳の君の弟の馮由を捕虜とした。馮由は今もなほ楚にとどめられて苦しめられてゐる。見兼ねた執政の子瑕が平王にむかつて、「あの馮由に何の罪がありますか。むかしの事は水に流してしまはれた方がよいと思ひます」と、諫言した。平王もそ

二十一年

二十一年春、王暦の正月には、特記することがなかつた。夏になると、曹の公孫會が鄭といふ都市から逃げ出して宋に亡命した。

〔傳〕二十一年正月己丑の日は冬至であつた。魯の梓慎はこの日に妖氣が天に騰るのを氣にして

「今年宋の國には三年も續く大飢が起り、蔡の君はなくなるであらう」と、豫言した。

楚の費無極はもう太子を讒言してもよい時だと思つて、「太子と伍奢とは方城山から北にある土地に據つて謀叛しようとしてゐます。御自身は宋や鄭あたりの國の主君になつたつもりでゐられますし、齊と晉との援助を得てわが國を犯さうとして、準備ができてをります」と、言上した。平王はそれを信じて、伍奢を召して問ふ。伍奢はこたへて、「わが君が太子の夫人と定まつたお方を納れられたのがそもその御過失でした。今またとるにもたらぬ人物の讒言を信じて、御過失を重ねようとされますか」と遠慮なく申述べた。平王は怒つて伍奢を捕へてしまつた。

讒言に迷つた平王は、城父の軍司令官の奮揚に命じて太子を殺させようとした。太子に罪のないことを信じてゐた奮揚は、急使を太子のもとにつかはして、自分の歸らぬうちに太子を立ちのかせた。三月になると太子の建は宋に亡命する。平王はそれと知つて、時を移さず奮揚を

召した。奮揚は部下の手で自分に繩をかけさせ、罪人の姿となつて、平王の御前にあらはれた。太子を殺せといふ言葉を自分はおまへに出したばかりなのに、もう太子は他國に亡命した。誰が告げたのか、「私がお知らせ申しました。わが君は、自分に事へるやうに太子の建に忠義をつくせ、と仰せられました。私は生一本な男で、それをまもることしか知りません。いまでは悪かつたと悔いてゐますが、もう及びません。それならば、なぜ此處に來たのか」「私は使者となつて君命にさからひました。その上、御命令にそむいて來ませんでした。二度まで大罪を重ねることになります。何處へ逃げたとて、身の置きどころがありません。平王は感心して「よろしい。おまへの辯解が氣に入つた。歸つて今までの職を忠實に行へ」と、奮揚をゆるした。

費無極はまたまた平王に悪計をすすめて「現に捕虜としてゐる伍奢の子たちは才物そろひであります。今のまま、呉にとどまつてゐましたならば、必ずや楚國の害となりませう。父を許すからといつて召し、父と共に殺したら如何でございますか。人並はづれて人情に厚い者ですか。きつと參るに相違ありません」と、いつた。平王はその計略を採用して「すぐに參れば父を許す。來なければ父の伍奢を殺すぞ」と、その子たちを召した。

伍奢には伍尙と伍員との二人の子があつた。棠の家老をしてゐた兄の伍尙は弟の伍員にむかひ「父を許すといふ命令を聞いては、子たるものはどんなことがあつても行かねばなるまい。自分は一潔く行つて死なう。おまへは呉に残つてゐてくれ。父のために自分は悦んで命を棄て

る。おまへは自分よりも頭が鋭いから、見事に仇を討つてくれるだらう。一緒に死ぬのは犬死だ」と、いましめた。伍尙だけが楚に出向いて、弟の伍員は来なかつた。聞いた伍奢は「楚の平王も家老たちも、伍員が生きてゐる間は、落ちついて夕方の食事もできまい」と嘲つた。楚では伍奢と伍尙とを殺してしまつた。伍員は呉に仕へて、楚を早く討てばそれだけ呉にとつて利益が多い、と呉の君に説き立てる。王族の光は「その伍員といふ男は、父と兄とが楚に殺されたからさういふので、呉の國の繁榮を考へてゐるのではありません」と、反對した。光殿は大野心を持つてゐる。呉の君を弑さうといふ陰謀をくはだててゐるから戦争に反對した。しばらく時を待つ方が賢明であらう、かう伍員は思案して、片田舎に引つこんで農業をいとなみながら、傳設諸といふ勇士を光に推挙した。宋の元公は理不盡な行動が多く、家老の華定や向寧を憎んだ。華定、華亥、向寧などの人人は「どうせ殺されるなら先手を打つて亂を起さう」と相談し、華亥が病氣だと偽つて、王族の人人を招き寄せる計畫をたてた。それとも知らぬ王族の人人は、華亥が病氣といふことを聞いて續々と見舞に来る。華亥はそれを片はしから捕へてしまつた。夏六月丙申の日に、この一味の者どもは公子寅、公子御戎、公子朱、公子固、公孫援、公孫丁といつた人人を殺し、向勝と向行を米倉のなかに押し込めた。一族の殺されたの知らぬ元公は、華亥の邸に出向き、捕へられた王族たちを放免してくれないかと頼みこむ。が、華定や華亥は承知せず、つひに元公をも捕へ、癸卯の日に、太子の樂と元公の義弟の辰とを人質とし

た。やつと許された元公は華亥の子の無感、向寧の子の子羅、華定の子の子啓をとらへ、人質をとつて華定などと一時和した。
 (經) 秋になると、衛の靈公の兄にあたる縶といふ人を盜賊が殺した。
 (傳) 衛の公孟縶(靈公の兄)は、軍事をつかさどつてゐる家老の齊豹を輕蔑し切つて、官と領地とを奪つてしまつたけれども、公孟縶は足が不自由であつたから、出陣は不可能である。そこで出兵する機会があるときだけ官と領土とを齊豹にかへしてゐた。公孟縶はまた、北宮喜と褚師圃とを憎んで、わが地位を利用してこの二人を追出さうとした。かうして齊豹と北宮喜、褚師圃の三人は共同の利害に立ち、折を見て亂を起さうと考へるやうになつた。ここに王族の朝といふ人が靈公の母にあたる宣姜と私通してゐるのあらはれて罰せられることになつた。三人は朝と一緒にいよいよ齊の靈公に叛亂した。
 はじめ齊豹は、宗魯といふ勇士を公孟縶に推挙して、その護衛の役とさせた。やがて亂を起すことになる。と、齊豹は宗魯にむかつて「公子縶といふ人の性質はあなたも十分御承知です。われわれはそれを殺さうと計畫してゐるから、護衛をやめなさい。さうでないとなあなたも命も危い場合がありませう」と、注意した。私はあなたの御推舉によつて公孟縶殿の護衛となりました。その際あなたは公孟縶殿はよい人であるから忠節をつくすやうにといはれました。仰せのとほゝあの方の不善なことは、私もよく承知してをります。けれども主人の身が危険にせまつたのを知りつつ、その傍を去る藝當は私にはできません。あなたは御計畫どほり實行な

さい。私は喜んで死にます。私は双方に御恩がありますから、あなた對しては秘密をあくまで守り、主人に對しては命を差上げます。私にはそれ以外に何も考へられませんが、衛の靈公は國都をはなれて平壽といふ小都市に出かけた。留守を護つてゐた公孟縶は、國都の郊外に出て土地祭を行つた。齊豹はかねての計畫を實行するのは今だと、祭場の周圍に幕を張つて武装した兵卒を伏せておき、戈をかくした一臺の車に祈禱する人に乗せ、それを公孟縶のそばに置いた。祭の時刻になると、公孟縶の車が近づいて来る。華齊が御者となり、宗魯が護衛役となつて同乗してゐた。齊豹の部下がづらりと整列して頭を下げる。つづいて祈禱する人に乗せた車を通る。部下の者どもはひらりとそれに飛乗り、隠してあつた戈を取り出すが早いか、公孟縶めがけて一撃を加へる。もうその時は宗魯が背で公孟縶を蔽ひ守つてゐたので、戈は宗魯の脇を斷ち、公孟縶の肩にあたつた。亂闘の結果、齊豹はつひに二人を殺してしまつた。

國都に大騒動が勃發したと聞いた衛の靈公は、左右を四人に護らせて王宮にとつてかへし、寶物を車に載せると疾風の早さで死鳥（衛の國境の地）へ行く途中で齊豹が公の乗車を目掛けて強弓を引絞る。矢は公にはあたらず、御供をしてゐた南楚の背をつらぬいた。靈公の逃げるのを見て、齊豹の一味が追はうとする。華寅といふ男が城門を閉ぢて敵を一步も近寄らせず、悠悠と靈公にしたがつて逃げた。また、城中に残つてゐた析朱鉏は、宵のうち水門からぬけ出し、歩行して公に従つた。

この亂が起つたとき、齊の景公は公孫青に命じて靈公の御機嫌をうかがはせた。公孫青は途中で衛の國亂を聞き、それでも敢へて行つたらよいかどうかを景公に伺つた。景公は、「衛の靈公が國境内にゐられる間は衛の君であるから、最初の豫定どほり御機嫌をうかがひ申せ」と回訓する。公孫青はその言にしたがつた死鳥の地に向き、御機嫌をうかがひたいと申出た。「自分は不才で國家を守れず、こんな場所に放浪してゐます。あなたは君命を受けて來られたのであらうけれども、自分は衛の君の資格を失つてしまつたから御遠慮いたしますし、御資格を失つたなどと御冗談をいはれては恐入ります。私は君命にしたがつて衛の君であられる方の御機嫌を奉仕するのであります。あなたを差置いて、衛の君は存在いたしません」「現に衛の國には大亂が起つてをります。もしも貴國が軍隊を派遣されて叛臣を討つてくださるならば國都は私の手に入り、そこで正式に御使者のおもむきを拜聴することができます。が、目下は御覽のとほり、私は衛の主人でありながら流浪してゐますので、正式にはお目にかかれませんが、そこで公孫青も御機嫌うかがひをあきらめてしまつた。

しかし衛の靈公は個人の資格では非とも公孫青と對面したいといひ出した。一度は辭退したけれども及ばず、止むなく公孫青もまた個人の資格で、良馬を獻じて謁見した。靈公は贈られた良馬を大切にして自分の乘馬とした。公孫青は感激して、靈公のために夜番の役を勤めたいと申出た。「あなたにまで御迷惑をかけてはすみません。それは固く辭退いたします」と、靈公は遠慮する。「いえ、私は齊の家來で、衛の君たるあなたにとつて夜番程度の男でございます。

どうか御存分に御命令ください。公孫青はかういひながら、終夜かがり火を焚いて夜番をした。

齊豹の執事に渠子といふ者があつた。北宮喜と協議して叛亂の計畫を進めてゐる。ところが北宮喜の家老たちはどうしても承知せず、齊豹が靈公を射たのを見て、大義の上から主人の北宮喜を責め、その心を離へさせた。そこで北宮喜は家老たちと改めて謀議をして、つひに渠子を殺し、その主人の齊豹をも攻め滅ぼしてしまつた。

六月の最終の日、つまり丁巳の日に、衛の靈公は國都にかへり、北宮喜と盟つた。秋七月戊午の日、つまり朔日に靈公は國民と盟つた。それで八月辛亥の日となると、公子朝、堵師圃、子玉霄、子高魴など齊豹の一味は、打ちそろつて晉に出奔した。閏月の戊辰の日になると、靈公は公子朝と密通した母の宣姜を殺し、北宮喜と析朱鉏にはそれぞれ褒美を賜はつた。

衛の靈公は、國內の秩序が恢復したことを齊の景公に報告し、ついでに公孫青(子石)のあつばれな態度をほめたたへた。景公は酒宴の最中にこの報告を受け、盃を高くかかげて「公孫青に禮のあつたのは、おまへがたの教訓による」と、非常な上機嫌で、家老の一人一人に盃を賜はつた。しかし苑何忌だけはそれを辭退して、「公孫青殿の御功勞を喜ぶ氣持は人後に落ちません。といつてその賞を私たちが受けたならば、萬一あの方が罪をかうむつた場合にはわれわれも罰せられなければなりません。罪は親兄弟には及ばぬといふ古語があります。私はむかしの賢人の教訓にそむいてまでも、御盃を頂戴したいとは思ひません」と、いひ張つた。

宗魯が死んだことを聞いた琴張(孔子の弟子)が、弔問しようとした。孔子はそれをいまして「あの男は齊豹が養つた盗人で、公孟縶の賊である。主人を殺す計畫を知りつつも告げることなく、性質の曲つてゐるのを諫言もしなかつた者の死を弔ふ必要などは絶対にない」と許さなかつた。

華定、華亥、向寧などが宋で亂を起した時に、公子城、公孫忌、樂舍(樂喜の孫)司馬疆、向宜(向戌の子)向鄭、楚の建(費無極の諱言によつて亡命した人)鄭の甲(小邾の穆公の子)などの八人は全部鄭の國に避難した。やがて鄭の援助を受けて鬼闔といふ土地で華定と戦ひ、そのために敗れたので、公子城はすぐに晉に亡命した。

華亥は人質としてある元公の太子の樂、王族の辰と地との三人を大切にしてい、妻と共に身を潔めたのちに食事をさせ、それから自分たちが食事をするのが常であつた。ところが元公は夫人と一緒に毎日華亥の邸におもむき、太子や王族の人たちに食事をさせて歸館する。華亥はこれを心苦しく思つて人質を元公のもとに歸さうと考へた。向寧はこれを聞いて反對し「あなたは元公に信望がないから、王族たちを人質としたのでせう。その人人を元公に歸した日は、われわれの最後の日です」と、いひしめた。一方、元公は折を見て華亥たちを亡ぼさうとして、家老の華費遂と相談する。「私は無論、わが君のために一命を投出すのを何とも思つてをりません。しかし、華亥を殺すためには、人質となつてゐる方を犠牲としなければなりません。その御覺悟はよろしいですか」「わが子が死ぬのは天命で致し方がない。自分はこれ以上華亥

から受ける恥辱を我慢できないのだし、(經)多十月になると、宋の華亥、向寧、および華定の三人が陳に亡命した。蔡の君がなくな

つたのは、十一月のことであつた。
〔傳〕宋の元公は手許に人質となつてゐる無惑(華亥の子)羅(向寧の子)および啓(華定の子)の三人を殺し、十月になると、その親たちを攻めた。そのため華亥、華定、向寧の三人は早くも陳に出奔し、その一味の華登は呉に逃げてしまつた。

向寧は宋から陳に落ちのびるとき、華亥のところへ人質となつてゐる元公の太子の樂を殺さうとはかつたけれども、華亥はそれをとどめて「われわれは君に反旗をひるがへして出奔するものであるのに、行きがけに太子を殺したならば、陳の國でわれわれを殺すであらう。それよりもこの人質を全部歸せば、事が有利に展開するかも知れぬ」と、親戚の華登にそれを頼み、「あなたは御老年だから、他國へ逃げて二君に事へることもできないでせう。この三人の人質を元公のところに御歸し申上げ、われわれと一味でない證據にすれば、かならずあなたの罪は許されます」と、智慧を授けた。華登はその言葉にしたがつて、三人の人質を送りとどける。人質の太子や王族たちは城の正門から入つた。華登はこれで自分の責任が終つたと、立去らうとする。元公はあわてて華登を引きとめ、その手をとつて「おまへに罪のないのは、自分がよく知つてゐる。城中に入り、もとの地位に就いたらよい」と、感謝の意をこめていつた。疥癬といふ皮膚病が原因で、つひに瘡を病むやうになつた齊の景公は、一年を経ても平癒し

なかつた。諸國からの病氣見舞の使者がたたくさん齊に滞在してゐる。梁丘據と裔款といふ二人の家老が景公の御前に進み、「神神に對して、わが國では十分に祭を行つてをりますのに、わが君の御病氣は重く、諸侯の方向にまで御心配をかけてをります。これは祭祀をつかさどる役人と記録係との罪でありませう。この二人を殺して諸侯からの使者に言譯をなされたら如何ですか。さうでないといふと、わが國が神神を疎かしてゐると宣傳される恐れがございます」と、こもこも言上した。

景公はなるほどと思つて家老の晏子を召し、二人を殺すやうに命令する。晏子が驚いて理由を問ふと、「家老たちが諸侯の使者に言譯をするために二人を殺してほしいと申出た」と、景公は説明した。「それは大變な間違でございます。二人を殺すことと、わが君の御病氣とは何の關係もありません。『では、どうしたらよからうか』と私が考へますのに、わが君の御病氣の原因は、畏れ多くも君に怨を持つものの仕業でございます。『だれだ。自分を怨んでゐるのは』「國民全體でございます。現にこの齊の國では國民に同情するものは一人もをりません。地方官吏は自身の懐を肥やすことのみ考へ、王宮に奉仕する人人は君の御機嫌ばかりうかがつていづれも國民を虐げてゐます。わが君は御存知ないことですが、國民はそれをわが君の御命令だと誤解して、密かに君をのろつてゐる次第でございます。かうした状態では、祭祀の役人がどれだけ懸命に祈つたとて、神明の加護はありません。どうか國の惡政を除き、徳を治めて立派な政に心をお向けください。さうすれば、祈らなくとも神神はわが國を護りたまひ、君

の御病氣はたちどころに御平癒あられるてせう。景公は晏子の直言をことごとく悦び、役人に命じて寛大な政治を行ひ、關所を取り毀ち、租税を軽くした。

十二月に、齊の景公は沛といふ土地の狩獵から歸つた。晏子は景公の傍に侍して、遊臺といふ高臺に上つて酒宴を催してゐた。酒宴なかばに家老の梁丘據(子猶)が馬を走らせて臺に來た。それを見て景公はいつた。「あの男だけが自分とよく心が合つてゐる。」梁丘據はわが君の御機嫌をとるために御世辭をいふばかりです。どうして和とか同じうするとか云へませうかと、晏子はこたへた。

景公はなほ晏子に問ふ。「和と同一とはちがつてゐるのか。」ちがつてをります。和は吸物のやうなものであります。水や火や酢や肉醬や鹽や果實の酸味などで魚肉を煮ますが、薪をつかつて炊いたのち、料理係が調和させまして味を調べ、足りない部分を増し、過ぎた部分を減します。それからのちに上の人が口に入れ、心を和平にいたします。君臣の間もこれと同じで、君が善いといはれることもその實善くなかつたならば、家來はその善くない理由を申上げて諫めます。また、君が善くないといはれてもその實善いことであるならば、家來はそれが善い理由を申上げて御政治に過失のないやうにいたします。むかしの賢王は五種の味を調和されて食事を行ひ、五種の音を調整されて音楽を聴いた、と傳へられてゐますのは、その心を平かにとのへて、その政治を立派に行ひたいと思ふからであります。善い料理を口にし、善い音楽を聴けば、心が満足して朗かとなり、それだけ明朗な政治が施されます。しかるにわが君の信

頼される梁丘據はどうでありますか。善くても悪くても君が善いといへば彼も善いと答へ、君が悪いといへば彼も悪いと申します。水氣の多い料理に更に水を加へましたならば、誰が食べようとせまうか。琴や瑟が一種類の音だけ出しましたならば、誰も聴かうとはいはしません。御機嫌をとるために御世辭ばかりをいふものを、わが君は御信頼あつてはなりません。かうして酒宴がたけなはとなつたときに、景公は「昔から死ぬといふことがなかつたならば、どんなにか楽しからう」と、いつた。晏子はふたたびこたへて、その輕率な説をいまして「昔から死ぬといふことがありませんでしたならば、昔の人の楽しみは何時までも續いてゐることとせう。最初この齊の地には爽鳩氏が住み、つぎに季荊(夏の諸侯)がそれに代り、つぎに逢伯陵(殷の諸侯)がそれに代り、蒲姑氏(周の初期の諸侯)がまた代つて、そののちわが君の御先祖が繼がれました。昔にもし死ぬことがありませんでしたならば、今日の君の御歡樂はその昔の爽鳩氏のものであつて、わが君には得られなかつたてせう」と。

鄭の子産が病にかかつたとき、子大叔に告げて、「私が死んだならば、あなたが執政となりませう。ただ徳ある人だけが、寛やかな政治で國民を服せしめませう。身に徳がないと知つたならば、手荒い政治をする方がよろしい。火はその勢が猛烈でありますから、人人は見ただけて恐れます。水はその勢が弱いやうに見えますから、輕んじて死ぬものが多くあります。寛やかな政治は水に似てゐるので、非常にむづかしいものと、注意した。病氣になつてから四五ヶ月して子産が死んで、子大叔は執政になると、手荒い政治を避けて寛やかな政治を

行つた。ところが鄭の國には盜賊が多く出るやうになり、萑苻といふ沼地を中心にして通行人を脅した。彼は今更のやうに後悔して、「自分は徳もないくせにして子産殿を真似て寛やかな政治を行つた。あの方が死ぬ前にそれとなく自分をいましめた言葉を忘れたのは、一代の不覺であつた」といひ、軍隊を出動させて萑苻の盜賊をみなごろしとした。諸方の盜賊どもも、その噂を聞いて少しは鎮まつたかと思はれた。

孔子が子産を評してかういつた。「子産はよいことをいましめた。政治が寛やかであると國民は慢る。慢れば手荒い政治を行つてひきしめ、國民にその害が及んだ頃にふたたび寛やかにすればよい。寛やかな政治で手荒い政治の悪いところを補ひ、手荒い政治で寛やかな政治の悪いところを補へば、國はよく治まるものである」と。また、子産の死を聞いた孔子は涙を流して、「子産は人から愛された。古人の遺風がある。實に惜しい人物を失つたものだ」といつた。

二十一年

(經)二十一年春、王曆の正月に、蔡の平公を葬つた。

〔傳〕二十一年の正月に、周の景王が無射といふ大鐘を造らうとした。それについて樂官の州鳩は、「景王はきつと病氣でなくなるならぬだらう。音樂は國民の風俗を調和して、悪い習慣を直すために尊ばれるのである。鐘もまた音樂の一つであるから、あまり大きな音もいけなく、といつて小さすぎてもならない。樂器に合つて人の心を樂しませる程度が適當なのである。しか

るに今度造られる無射の鐘は、音がむやみに大きく、聞くものの耳を破り、心に響くほどであるから、景王は氣が轉倒して病となり、天壽を保ち得なからう」と、豫言した。

蔡の平公の葬儀が行はれると、世繼の朱(人名)は太子の席次につかず、年が若いといふので他の王子たちの末席に坐した。會葬した魯の家老が歸國してこの旨を叔孫昭子に物語る。蔡はやがて滅亡しよう。滅亡しないとしても、今度の君は無事に國王の地位にはゐられまい。年は若くとも太子であれば當然上席につかなくてはならぬのに、自分から末席に坐るとは、物の道理に暗い人だ」と、昭子はかういつて嘆息した。

(經)夏になると、晉の頃公の命を受けて士鞅が魯に使者に立つた。

〔傳〕魯では叔孫氏の人人が賓客を接待する役目となつてゐた。季孫氏の人人は叔孫氏が自分達より地位が上であるのを心憎く思ひ、晉の士鞅が使者となつて來たのを幸として、叔孫氏の人人を失敗させ、晉から悪く思はせたいと考へた。そこで季孫は接待役のものに命じ、小國なみのもてなしをさせる。士鞅が怒つて、「これは禮にはづれてゐる。わが君を輕蔑した證據であるから、すぐさま歸國してわが君に言上しよう」と、席を立ち上つた。魯の人人は士鞅をなだめ、料理を大國なみに改めさせて、やつとその機嫌をなほさせた。

宋の華費遂には華羈、華多僚、華登といふ三人の子があつた。そのなかで華羈は軍部の相當な地位を占め、華多僚は君の近臣となつた。ところが華多僚は兄の華羈をきらひ、元公にむかつて「私の兄は、現に他國に亡命してゐる華亥などと連絡をとり、謀叛を企ててをります」と、

たびたび讒言した。元公は「おまへの父の華費遂は、自分の爲に大切な子供の華登を他國に亡命させてまで忠義をつくしてゐる。その忠義な心を思ふと、二度とそれを繰返させて、嘆きをかきたくはない」と、反對した。けれども華多僚がなほも、「それほどわが君が父を愛されるならば、御自身が他國に亡命され、國を棄てられるのが一番でございませう」と、なかば強迫したため、元公もそれにしたがはざるを得なくなつた。

華多僚に強迫された元公は、華費遂の家來の宜僚を召し、華羆（子皮）には謀叛のうたがひがあるから追放せよと嚴命した。宜僚は御前を退いて主人の華費遂に事を報告する。華費遂は、「これは華多僚の讒言にちがひない。自分は兄の無罪を信じてゐるが、君命となれば致しかたない」と、嘆息し、元公と相談の結果、近く孟諸といふ土地で狩獵を行ひ、それを機會として追放させることに定めた。

元公はそこで華羆を召して酒宴を催し、さらにその家來にまでたくさん贈り物をした。父の華費遂もまた、多くの贈り物をする。華羆の家來の張句はこの様子を非常にあやしみ、「わが君ばかりでなく、華費遂様まで主人にいろいろの物を賜はるとは、どうも變だ。何か理由があるにちがひない」と、華羆をうながし、劍を抜き、宜僚の喉にさしあてて脅した。震へ上つた宜僚は全部を白狀する。張句が憤つて華多僚を殺さうとはやるのを華羆はとどめ、「父は老年である。弟の華登が亡命したのでさへ、すつかり心を傷めてゐられる。いま自分が兄を殺したならば、父は病氣になるかも知れない。忠と孝のためには義を捨てるのも、この場合はやむを得まい」と、いましめた。

五月丙申の日となつた。もう用意のできあがつた華羆は、父に暇乞をして宋を立退かうと考へて、その邸宅に出かけると、途中で華多僚が父の乗車のなかで威張つてゐる姿を見た。張句は我慢ができなくなり、華羆とその家來である白任、鄭翩などともに華多僚を殺し、父の華費遂を無理に仲間に入れて君に叛くことにし、陳に亡命してゐた華亥などを招きよせた。壬寅の日に、華亥、向寧、華定などが、一味を引連れて宋に入つて來た。樂大心、豐愆、華慳などの忠臣たちは、横といふ土地で防ぎとめる。華亥たちの軍がじりじりと押し、虛門（宋の東城の南門）を占據して、附近の人人を率ゐて公然と謀叛した。六月庚午の日に、宋では國都を嚴重に守備して賊の侵入に備へた。

（經）秋七月壬午の朔日に、日蝕があつた。八月乙亥の日に、魯の叔輒が死んだ。

（傳）秋七月に、日蝕があつた。魯の昭公は梓慎を召し、「何か災害でもある前兆かも知れぬ」と云ふ。そこで梓慎は「夏至や冬至、春分や秋分の時に日蝕が起つても、心配はございませぬが、その他の月にこれが起れば災難の前兆でございませぬ。たぶん水害が起るのではないでせうか」と、申上げた。また、魯の叔輒（子叔）がそれを心配して、日蝕にむかつて聲をあげて泣いた。叔孫昭子は、「叔輒は間もなく死ぬであらう。人は日蝕にむかつて泣いてはいけぬものだ」と、豫言した。はたして八月になると、叔輒はこの世を去つてしまつた。

（經）蔡の君が楚に亡命したのは、冬に入つてからのことだつた。

〔傳〕多十月になると、吳に亡命してゐた華登（華費遂の子）が、吳の軍隊を指揮して華亥の一味を救援しようとして宋の國に押寄せた。宋では齊に應援を求め、齊の烏枝鳴（家老）が齊軍の大將となつて宋を守つてゐた。いよいよ華登の軍が近づいたとの報に接すると、宋の元公の料理係長であつた濮といふ男が烏枝鳴の陣地に出張して、機先を制した方が戦争に有利であるのは、むかしからの定説です。吳軍は華登に率ゐられてわが國を攻めに來ましたが、遠路を行軍したためにはなだしく疲勞して、軍の備ができてをりません。彼等を國內に入れないやう御手配を御願ひいたします」といひ、その承諾を得て、宋と齊との聯合軍は鴻口といふ土地で丙寅の日に吳軍を破り、部隊長の吳の王族の苦雫と家老の偃州員とを捕虜にした。

鴻口で敗れた華登は、吳の殘兵を率ゐて宋軍を撃破した。宋の元公は形勢がかんばしくないと知ると、他國に亡命する準備にとりかかつた。料理係長の濮は、「わが君がさうした御態度では味方の士氣が鈍ります。私は自分の卑しい者ですが一命を國に捧げ、戦死する覺悟は以前から持つてをります。まだ味方には十分戦はうとする元氣がございますから、どうかわが君御自身第一線に立ち、味方の軍隊を剛ましてください」と、申出た。元公もその言葉に元氣づき、軍陣の間を巡視して、「自分も決死の覺悟で指揮するから、おまへたちも國難に殉ずる氣持で懸命となつてほしい」と、人人を勵ました。

今まで亡命の準備をしてゐた宋の元公は、料理係長の濮の言葉にしたがつて、積極的に進軍しようといふ心を定めた。齊の烏枝鳴もまた、「少數の味方で多數の敵を破らうとするには、決死の

覺悟で進むよりほかはない。それには陣を棄てて短兵急に攻めるのが一番よい。敵は多數である。すぐに劍を持つて戦へ」と、命令した。華亥の軍はこの勢に押されて逃出すと、宋と齊との聯合軍は新里といふ土地まで追ひ、兩軍は激戦となつた。料理係長の濮は一計を案じ、着物のすそを破つて一つの首をつつみ、敵の大將華登の首級をあげたぞ」と、走りまはつて觸れた。それで聯合軍は一時に力づき、華亥の軍をさんざんにうち破つてしまつた。うち破つたとはいふものの、この合戦は非常な混戦で、敵と味方との區別がわからなかつたからであつた。新里に住んでゐた翟偃新といふ男は、合戦にあつて宋の味方となつて働いたが、やがて戦が終ると甲冑を元公のところへ脱いで歸つた。またその附近にゐた華姪といふ男は戰場では華亥の味方となり、終ると元公のところへ來て甲冑を脱いだ。

十一月癸未の日に、晉に亡命してゐた公子城が晉の軍隊を指揮して宋の元公に加勢をした。宋の國に内亂の起つたのを知つた諸侯は、つぎつぎにと救援隊を宋に派遣することになつた。曹の翰胡、晉の荀吳（中行穆子）、齊の苑何忌、衛の公子朝といった家老たちが宋軍と合し、丙戌の日に諸丘（宋の地）で華亥たちと決戦した。

諸侯の軍と戰場に見えることになつた華亥たちは、議論百出して一定の戦法をとることができなかつた。兩軍が諸丘の地を中心として兵を進める。公子城の戦車には向宜（子祿）が御者となり、莊董が同乗の參謀となつてゐた。敵方の華亥の方では一つの戦車に華豹が乗り、千鑿が御者となり、張勾が同乗の參謀となつてゐる。公子城が軍を迂回させる途中で、二つの戦車

がすれ合つた。城だ」と、華豹は相手の戦車を望んでいふ。公子城は自分の名を呼び捨てにされたので立腹して戦車をとどめ、弓に矢をつがへようとする。見ればもう華豹が弓を引きしぼつて射ようとしてゐる。公子城は思はず眼を瞑つて、父上（平公）の神靈、願はくば私を助けてください」と、祈念した。華豹がさつと射た。矢は中らずに公子城と向宜との間を遙か後方に飛んで行く。公子城はすぐさま弓を射らうとすると、また華豹が二の矢を引きしぼつてゐる。矢を射るのに交代しないのは卑怯だぞ」と、大聲をあげ、華豹がひるむ隙に素早く射てそれを斃した。同乗の張匄は満面に朱をそそいで、車の脇にあつた一丈二尺の矛をぬき取つて飛び下りる。公子城は張匄を射つて、その股を挫いた。傷手に屈せず、張匄は腹這となつて進み、公子城目がけて矛をうちおろす。僅に車の横木を折つただけだつた。公子城はふたたび張匄を射つて、これも斃してしまふ。残つた御者の干嬾は、どうか一矢で殺してくれと願ふ。おまへの一命を、自分は君に言上して助けてやらう。いや、三人同じ車に乗りながら、他の二人が死んだのに、自分だけがおめおめと生残ることはできません。軍法を犯してまで私は生きたいと思ひませんから、どうか射殺してください。やむを得ず公子城はまたも干嬾を射殺した。かうして宋を中心とした聯合軍は、華亥の軍を撃破し、南里といふ土地で攻圍してしまつた。これが——緒丘の合戦——の顛末である。

味方の惨敗を目のあたり見た華亥は、胸をたたいて大聲で歎きながら華彊にいつた。「むかし、晉の欒盈はひとたび他國に亡命したが、やがて晉にかへつて亂を起し、失敗してみじめな

死をとげた。(襄公十一年の條その他に見える) 自分もやがてはさうなるだらう。「あなたは總帥でありながら、そんな心細いことをいつてはなりません。不幸にも事が成就しなかつたならば、ふたたび他國へ逃げて時機を待てばよいのです。そこで兩人は華登にいひつけて、楚の援助を得ようとした。華彊は十五臺の戦車と七十人の軍兵とを引きつれて宋軍の圍を破り、睢水のほとりて華登と一緒に食事をとり、泣き泣き別れを惜しんで見送つたのち、またもや包圍線を侵して南里に歸つた。

華亥の申出を聞入れた楚の平王は、家老の薳越に命じて宋に軍隊を出さうとした。同じく家老の犯といふ者が、「宋は今まで平和な國として知られてゐましたが、やはり内亂が起つてしまひました。それについてわが君が謀叛人に味方をされるのはどうでせうか。私にはその理由がわかりません」と、諫言する。けれども平王は、「もう時が遅い。華亥の願を承諾したあとだからしかたがない」とこたへた。

(經) 魯の昭公が晉に出向かうとした。しかし黄河まで行つて、ある事情のために歸國した。(傳) 魯の昭公が晉に行かうとして、黄河に到着した。そのとき、今まで晉にしたがつてゐた鼓の國が晉を裏切つて鮮虞(異種族)に屬した。晉では鮮虞を伐たうとする準備最中であつたので、昭公の入國をことわつた。

〔經〕二十二年の春に、齊の景公が莒を伐つた。

〔傳〕二十二年春、王曆の二月甲子の日に、齊の北郭啓が軍隊を指揮して莒を征伐した。莒の君はいさぎよくこれと一戦しようとして、準備を重ねる。家老の苑羊牧之は諫言をして、「今度の齊の大將は身分が低いものですから、大した要求はいたしません。降参する方がよいと存じます。大國を立腹させると、後の祟りが大變てございます」と、いつた。しかも莒の君は聽き入れず、齊軍を壽餘といふ土地でうち破つた。

齊の景公は憤つて、自身出馬することとなつた。莒では驚いて和睦を結んだから、勢ひ非常な悪條件で降参してしまつた。莒の國民はこの事件以來君を憎むやうになり、二十三年の秋に、その君を魯に追放した。

〔經〕宋の華亥、向寧、華定などの一味は、南里を逃出して楚に亡命した。魯では昌閔の地で大演習を行つた。

〔傳〕楚の薳越が宋の元公にむかつていふ。「君には不善の家來があつて叛亂を起し、君に御心配をかけてゐる旨を私は主人に聞きました。名譽ある貴國のために、私の主人はその不善の家來を請ひ受けて殺したいと考へてゐますが、どうぞごさいませう」と。元公は「御申込を感謝いたします。しかし、わが國に内亂が起つたのを御承知あつて、貴國の君は華亥を助けようと仰せられたさうですが、それが眞實だとすれば、われわれも黙つてはゐられません。どうかお手を引いてください。謀叛人は間もなく諸侯からの御援助によつて亡びることになつてをりま

すから」と、華亥一味を引渡すのを拒んだ。宋の申し分が理に合つてゐるので、楚の人人もどうしたものと心をなやました。

諸侯の家老たちは、「もし華亥一味が決死の覺悟で抵抗し、楚が引渡しを拒絶されたのを憤つて、公然とそれを助ける軍兵を派遣したならば、こちらの不利とならう。今のうちに南里の包圍を解き、華亥一味を楚に渡して楚に手柄にさせてやるのが良策だと思ふ。華亥を出してやつたとて、大したことはないならぬだらう」と、相談一決して、元公に事の旨を願出た。元公も結局はそれにしたがつたので、己巳の日に、宋の華亥、向寧、華定、華貳、華登、皇奄、傷省、臧子平などは、南里を出て楚に亡命した。元公は内亂が鎮定したのち、公孫忌、邊印、樂祁、仲幾、樂大心、樂輓などを採用して、それぞれ華費遂、華定、向寧、華亥などの空位をみたした。魯の梓慎が、「宋の亂は三年つづいて停む」と豫言したのが、ここにその證據を見せたのであつた。

宋の内亂が鎮まるのを待つてゐたかのやうにして、周にも騒動が勃發した。周の景王は妾腹の朝とその師傅の賓起とを愛し、朝を太子にしたく考へた。ところが大臣の劉獻公の妾腹の伯

盂（劉狄）は、單穆公（單旗）に仕へてゐるが、賓起を殺し、朝を逐ひ出さうと思つてゐた。賓起はたまたま郊外で、自身で尾を喰ひきつてゐる雞を見た。「どうしてあんな態度をするのだらう」と雞はやがていけにへとなるのを知つて、その前に自分で命を絶たうとしてゐるのです」と、從者がこたへた。賓起は何を感じたか、すぐに歸つて景王に雞の物語を申上げ、な

ほも加へて、「雞はどれほど大切に養はれても、麩てはいけにへとなつて殺される運命にあり
ます。人間はしかしながら雞とはちがひ、永久に犠牲となると知つたならば、悪い心も起すて
せう」と、暗に一日も早く朝を太子にしていただきたいことを願つた。景王はじつと考へたな
り、その場では一言も發しなかつた。

(經)夏四月乙丑の日に、周の景王が崩せられた。

〔傳〕賓起から説かれなくても、景王は妾腹の朝を太子にしたい意志があつた。けれども單穆公
と伯益とがそれには絶対に反對であるのを知つてゐたので、夏四月に北山に狩獵した機會に、
この二人を殺さうと、深く心に定めてゐた。

北山の狩獵は大がかりで行はれた。大臣、家老の面々はことごとく御供をする。が、景王は
乙丑の日に、突如榮錡の邸宅で病氣のため崩せられてしまつた。つづいて戊辰の日に、劉獻公
(劉子攀)がなくなつた。劉獻公には正妻の子がなかつたため、單穆公は自分に事へてゐた伯
益を取り立てて跡目を相續させた。五月庚辰の日に、單穆公は新しく立つた悼王(王猛)に謁
見し、朝を立てようとしてゐた賓起を攻め殺して諸王子と盟つた。

晉では鼓の國を奪つて、その君(鳶鞮)を捕虜とした。が、鼓の君が深く前非を悔いた様子
が見えたため、それを放免した。放免されると鼓の君はまたもや晉に叛いて鮮虞(異種族)に
したがつた。六月になると、晉の荀吳が計略を以て鼓を攻め、ふたたびその君を捕虜とした。
晉では家老の涉佗に命じて、鼓の地を守護させた。

丁巳の日に、周では景王の葬儀を行つた。王族の朝は職祿をはなれたものや不平を持つた王
族たちと語らつて、かねて恨のある伯益(現在の劉獻公)を追出さうとして内亂を起し、伯益
を揚(周の都會)に追つた。單穆公は悼王の身を心配して、密にわが邸宅にむかへた。それを
朝の一味の還といふ王族に夜の間に奪はれ、やむなく單穆公も出奔した。

悼王を夜にまぎれて奪つた王族の還は、大臣の召莊公と協議して、「單穆公が生きてゐる間
はわれわれに勝ち味はない。和睦するといつはつて呼びよせてから殺さう」と、一決した。單
穆公の方ではこの謀計を知り、人を欺瞞して勝たうなどとは以てのほかだ」と、一笑に附して
取合はなかつた。

けれども肝腎の單穆公は、まさか周の王族ともあらうものが、さうした卑劣な手段はとら
ぬと考へ、王族の還と領(周の地)で和睦を結んだ。その際、還は悼王を奪つたのは家來の擊
荒だつたと言譯して、擊荒を殺してしまつた。さて、和睦が終ると、單穆公も伯益(劉獻公)
も周の國都に歸ることになつた。が、伯益は領地の劉に行き、單穆公は還の詐謀を知つて亡命
し、乙丑の日に、平時(周の地)といふ土地に出奔した。諸王子がそれを追ひかける。單穆公
は王子たちと戦つて八王子を殺してしまつた。王族の朝は味方が敗れたので京といふ土地に奔
つた。

京の地に據つた王子の朝を、單穆公は征伐して、丙寅の日に大勝した。朝の一味は山の間
ちりちりとなる。間もなく朝は勢力を恢復し、辛未の日に鞏簡公を、乙亥の日に甘平公をそれ

それ破つた。

周の景王の葬儀に参列した魯の叔鞅（叔弓の子）は、歸國してから周の騒動についての詳細を昭公に言上した。傍て聽いてゐた家老の閔子馬はそれを評して、「王族の朝は、職を失つた人人などを味方としたのでは、勝てるはずがない」といつた。

〔傳〕周の劉獻公と單穆公とが王猛（悼王）の御供をして皇といふ土地に行つた。

〔傳〕周の單穆公（大臣）は晉の援助を得たいと、秋七月戊寅の日に、悼王の御供をして皇（周の地）まで出向いた。辛卯の日になると、王族の朝の徒黨である鄒睞は、悼王の逗留してゐる皇の地を攻めて大敗して捕虜となり、壬辰の日に火烙りの刑に處せられた。

〔經〕秋になると、劉獻公と單穆公とが王猛（悼王）を奉じて王城に入つた。

〔傳〕八月辛酉の日に、悼王の軍師である醜といふ男が軍隊を指揮し、前城といふ王族の朝の領地を伐つて大敗した。そこで周の官吏の大部分は叛き、己巳の日に暴動を起して單穆公の居城に押しよせたが敗れた。しかしその翌日にふたたび攻めて勝ち、辛未の日には東園といふ土地の城を攻め立てた。

〔經〕冬十月に子猛（悼王）がなくなつた。十二月癸酉の朔に日蝕があつた。

〔傳〕冬になると、晉の籍談と荀躒とが軍隊を率ゐて悼王を守護しながら王城に入つた。單穆公と伯益（劉獻公）とは、庚辛の日に郊といふ土地で、王族の朝と戦つて敗北した。朝の一味は陸渾（異種族）を社（周の地）でうち破つた。

十一月乙酉の日に、悼王が崩ぜられた、景王の喪がまだ終らないので、「春秋」には王子の王猛がなくなつたと記してある。己丑の日に、周では敬王が即位され、子旅といふ家老の家を假御所とした。

かうして周では新しい國王が即位したので、いよいよ本格的に、賊軍を征伐することになつた。十二月庚戌の日に、晉の籍談、荀躒、賈辛、司馬督の四家老が軍隊を率ゐて出陣し、籍談は陰といふ地に、荀躒は侯氏といふ地に、賈辛は谿泉といふ地に、司馬督は社といふ地にそれぞれ陣を張つた。また、周の軍隊は三手に分れて、おのおの汜、解、任人といふ場所に陣を取る。閏十二月に、晉の箕遺、樂微、右行詭の三人は伊洛といふ河を渡つて進撃し、王族の朝の領地である前城を奪取してその東南に進み、周軍も同じく進んで京楚といふ場所に軍營を置いた。周と晉との軍はここで力を協せ、辛丑の日には京の地を伐ち、西南に陣を張つてゐた朝の軍勢をうち破つた。

二十三年

(經)二十三年春、王曆の正月に、魯の叔孫婁が晉に向いた。癸丑の日に、叔鞅が死んだ。晉の人人が郊といふ土地を圍んだ。

〔傳〕二十三年春、王曆の正月の壬寅朔日に、周と晉との軍勢が郊(周の都會)をとりかこんだ。癸卯の日に、郊と邾との二都が陥落した。やがて晉軍は平陰といふ場所、周軍は澤といふ土地にそれぞれ陣を取った。それは丁未の日のことであつた。間もなく、周王の方から、王族の朝が敗れたから戦は終つたとの通知が来た。晉軍はそこで庚戌の日に陣を引上げた。

(經)晉の人人が、魯國の使者の叔孫婁を捕虜とした。

〔傳〕邾の人人が翼(邾の地)に城を築いた。築き終ると、離姑(邾の地)を通つてその城下に歸らうとした。しかしその道をとほつて歸るには、魯の武城を通過しなければならなかつた。「魯はきつとわれわれの通るのを妨害しませう。ですから武城附近で道を轉じ、山の麓を南に進んで歸國すれば、さうした心配はなくなりませう」と、邾の家老の公孫鉏がいつた。が、同じ

く家老の徐鉏、丘弱、茅地の三人が反對して、「山の麓は濕氣が多く、雨でも降れば通れなくなりませう」と主張し、三人の言ひ分が通つて武城を通過することになつた。

はたして、武城を守備してゐた魯の軍兵は、邾の人人が通つた後に木木を伐り倒して道路を塞ぎ、前方から攻め立てて、三人の家老を捕虜にした。邾の國民は事の旨を晉に報告する。晉では魯の不都合を責め、言譯に來た魯の叔孫婁を召捕つてしまつた。使者を召捕るのは不法であるから、「春秋」の記録に「晉の人人が、魯國の使者の叔孫婁を捕虜とした」と書き、晉の態度を譏つたのである。

晉の人人は、邾國の家老と叔孫婁とを對決させようとした。ところが叔孫婁は、「周の制度では、大國の家老は小國の君主と同格とされてゐます。邾は未開國で、その家老ならば、私の副使の子服回と對決させるのがよいと思ひます」と、どうしても承知しなかつた。

晉の韓起(韓宣子)は邾の人人に命じて、仲間を集めさせて叔孫婁を捕へさせようと思つた。これを聞いた叔孫婁は、共に晉に來た人人や護衛兵を付けて、自分だけが死を覺悟した上で宮廷に向つた。この時、晉の士彌牟(景伯)は韓起の前に進み出て、「あなたは前後を考へずに叔孫婁を邾の人人の手に渡さうとされますが、さうすれば彼はきつと殺されます。魯にそれが聞えたならば、魯は邾を滅ぼすに相違ありません。ところが、邾の君は現在晉にゐます。本國を失へば歸るところがありませんから、わが國で面倒を見ることになるでせう。さうなつたら、いくら後悔しても追ひつきませぬ」と、諫言した。晉ではそこで、叔孫婁を邾に

は渡さず、彼と子服回とを別別に一つの館に置いた。
 叔孫婁と子服回とは強硬に、魯が決して鄭から恨まれる筋合でないことを主張した。士彌牟は、なほも二人の處置について韓起と相談した結果、ひとまづ二人を召捕つて鄭の君の滯留してゐる屋敷の前を通り、それから一時獄に入れた。鄭の君は二人が捕はれたのを見て、機嫌を直して歸國する。士彌牟は鄭の君の歸國を見送つた後、叔孫婁を箕といふ場所に、子服回(昭伯)を他の町に移して、それぞれ邸宅を興へた。
 「あなたの持つてゐる冠を私に譲つて下さい」と、晉の士鞅(范獻子)が叔孫婁に申出た。これは冠を賄賂に得て、叔孫婁の釋放に努力しようといふ腹だつたのである。叔孫婁は士鞅の腹の中を知らぬふりをして、士鞅から冠の寸法を取り寄せて、その寸法に合つた二つの冠を興へ、「私は冠をこれだけしか持つてゐません」と、答辯した。
 魯の國では叔孫鞅を救はねばならぬといふので、家老の申豊が賄賂の進物を持つて晉に出向いた。すると叔孫婁は「賄賂を誰に贈つてよいかお傳へするから、私の處にいらつしやい」と招き、申豊を手許に留めたまま、一步も外へ出さなかつた。また、叔孫婁を監視して箕に出張してゐた獄吏が、彼の飼つてゐる番犬を貰ひたいと願つた。けれども彼は承知しないでやがて放免されて歸國するときがくると、その番犬を殺して獄吏に與へ、肉を食へさせた。彼は晉にゐる間、一日でも宿つた家はすつかり立去る前に掃除し、破損した部分は修繕して、惡名を得ないやうに心がけた。

(經)夏六月に、蔡の悼公が楚の國でなくなつた。
 (傳)夏四月乙酉の日に、周の單子(單浮餘)が魯といふ土地を、劉子(劉突)が牆人と直人といふ土地を、それぞれ攻め取つた。この三ヶ所共に王族の朝に屬してゐたものである。六月壬午の日にになると、王族の朝は、周の首都から尹といふ地に入り込んだ。癸未の日に尹を守つてゐた圉といふ男が、敬王の一味の劉佗をいざなひ、欺いて殺した。丙戌の日に、單子は阪道から、劉子は直接に進んで、尹の土地を攻めた。けれども單子が敗北したのを見て、劉子は戦はずに引返した。
 己丑の日に、召伯奭と南宮極とが、成周の人人を引きつれて尹の地を守り、王族の朝に味方をした。庚寅の日に、單子、劉子、樊齊(樊頃子)の三人は、周の敬王の御供をして劉子の領地に立退いた。甲午の日にになると、王族の朝が王城に入り込み、左巷(地名)に滯留した。秋七月戊申の日に、鄆羅(周の家老)が王族の朝を莊王の廟に迎へ入れ、尹氏の一族の尹辛といふ男が、劉子の軍を唐といふ土地で打ち破つた。丙辰の日には、ふたたび鄆といふ土地でそれを破り、甲子の日に、尹辛は西闔(周の地)を攻め取り、さらに丙寅の日には蒯といふ土地を攻めて捷つた。
 (經)莒の君の庚輿が魯に出奔した。
 (傳)殘酷なうへに刀劍が好きであつた莒の君の庚輿は、新しい刀劍が手に入ると、きつと人を斬つて切れ味を試さなければ承知しなかつた。それのみでなく、一度従つた齊の國に叛かうとしてゐたため、家老の烏存は國人を引き連れて、庚輿を追ひ出さうとした。庚輿は宮殿から逃

げ出さうと思つた時、烏存が刀を手に、逃げようとする道の左に立つてゐると聞いて、すつかり悲観して自殺する覺悟を定めた。けれども、やはり家老の苑羊牧之が、「別に御心配はいりません。烏存は力強いので評判な男ですが、まさか、わが君を殺して名譽を得ようなどは考へてゐますまい。その前を通つて平氣で行かれれば大丈夫です」と、申上げたので、そのとほりにして、莒の國から魯に亡命した。そこで齊の人人は、十四年に齊に奔つて來た郊公（著丘公の子）を入れて、莒の君とした。

（經）戊辰の日に、吳が、頓、胡、沈、蔡、陳、許の軍隊を雞父といふ地で撃破した。この合戦で、胡と沈との君が滅び、陳の家老の夏鬮は捕虜となつた。周の敬王は當時狄泉といふ地に居られ、大臣の尹氏が王族の朝を擁立した。世間では敬王を東王、朝を西王と稱してゐた。〔傳〕吳が州來の國を攻めたので、楚の薳越が君命を受け、諸侯の軍勢と共に救援した。鐘離といふ土地で兩軍が激しく戦つた。病氣を推して出陣した楚の家老の子瑕が、陣中で死んでしまつた。そのため楚の軍隊は、意氣銷沈してまるで火の消えたやうに、その勢がなくなつてしまつた。

吳では、光といふ王子が君の御前に進み、作戰計畫をかう申上げた。「現在、楚に従ふ諸侯は大分ありますが、皆小國であり、楚の威力を畏れて心ならずも出陣してゐます。今回楚の味方となつた胡と沈との二國の君は、年も若く、心もおごつてゐます。また、陳の家老の鬮といふ男は理窟がわからず、頓と許と蔡との三國は、楚の政治を憎んでをります。楚では家老の子

瑕が死んで、勢が衰へ、總大將の薳越は身分が低いので、命令が徹底いたしません。われわれはこの二つの缺點を衝いて上手に作戰すれば、十分に勝利を得られませう。まづ、わが軍を分けて、最初に胡、沈、陳の三國を攻撃します。この三國が敗北すれば、諸侯の軍はきつと動揺し、楚に叛くやうになりませう。さうすれば楚は必然的に大敗しませう。これが味方の損傷を出来るだけ少なく、しかも大勝利を得る秘訣です」と。吳の君はその言に従つて周到な作戰を練つた。

戊辰の晦日に、吳軍は雞父（楚の地）で、楚の不意を襲つた。吳の君の壽夢は三千人の罪人を引き連れて、胡、沈、陳の三國の軍を攻撃した。三國の軍が先を争つて三千人を打ち破らうとする。機を窺つて吳は、急に軍を三部に分けて猛撃した結果、さんざんに三國の軍隊を撃破した。

そこで吳は、胡と沈との君たち、および陳の家老の夏鬮とを捕虜として、胡と沈との捕虜に命じて許、蔡、頓の三國の陣に赴かせ、「わが主君は討死されました」といはせた。それを聞いて三國の陣は騒ぎ立てる。騒いでゐる時に吳軍が後から喊聲をあげて攻立てたから、三國の軍は敗走し、楚軍も總崩になつて大敗した。

（經）八月乙未の日に、魯の國に地震があつた。

〔傳〕八月丁酉の日に、王族の朝に味方をしてゐた南宮極（周の大臣）が、震災に遇つて死んだ。それで、周の史官の襄弘は、敬王の味方をしてゐる劉文公（劉釜）にむかつて「あなたは父君

獻公の御遺志を繼いで、あくまで敬王のために奮發されねばなりません。南宮極が震災で死んだのは、天が西王(朝)を見棄てたのであります。現在、狄泉の地に居られる東王(敬王)は、きつと大勝利を得られませう」と、いつた。

楚の平王の夫人は、建といふ太子を生みながらも、平王の寵を失つて、蔡の國の鄧陽といふ土地に引き籠つてゐた。吳ではそれを知つて、冬十月甲申の日に、太子の諸樊が鄧陽に入り込み、楚の夫人と寶物とを奪つて歸國した。楚の家老となつた薳越が急報を得て追撃したが追いつくことができなかった。面目ないといつて薳越は自殺しようとする。傍の人が「自殺した氣になつて、今一度吳と決戦したらどうですか」と意見したが「自分は難父の合戦で、吳に敗北してゐる。今度戦つてふたたび敗れたならば、死んだとて罪が消えるものではない。君の夫人を失つた責任は全く自分にある」とこたへ、遂に薳越(楚の地)で首を縊つて死んだ。

(經)冬になると、魯の昭公が晉に出向かうとして黄河のほとりに到つた。けれども病氣が起つたために、そこから本國に引返してしまつた。

〔傳〕魯の昭公は、晉に捕へられてゐる叔孫婁を救ひ出さうと、みづから黄河のほとりまで出向いた。しかし、病氣が起つたので、そこから歸國した。

新しく楚の上官家老となつた子常は、吳にそなへるために、郢(楚の都會)に城を築いた。それを見た沈尹戌は「子常はきつと郢を亡ぼして終ふだらう。自國の軍隊に自信がなければ、いくら城を築いたところで何の益もない。國が十分に治まつてゐれば、國民は君のために常に

一命を捧げる覺悟をしてゐるから、城を築く必要など毫もない。吳の國を怖れて郢に城を築くことは、近隣の諸侯を味方とする自信のない證據であり、楚の衰へを示すものだ。これでは吳はおろか、どの國から攻められても勝味はなからう」と、批評した。

二十四年

(經)二十四年春、王曆二月丙戌の日に、魯の仲孫纘が死んだ。また、叔孫婁が釋放されて晉から歸國したのも春のことであつた。

〔傳〕二十四年春、王曆の正月辛丑の日に、周の召簡公(召莊公の子)と南宮極(南宮極の子)とが、甘桓公(甘平公の子)を王族の朝に推舉した。劉文公はこれを聞いて、「西王の味方がまた一人増加した」と嘆くと、襄弘は「不義を行つてゐる西王に、どれほど味方が増したとて、少しも御心配はいりません。周の國が盛大となつたのは、御先祖の武王が徳を行つたからで、『書經』の大誓といふところに——殷の紂王は多數の人民を従へてゐたのであるが、君臣の間に徳と心とを一つに出来なかつたから滅亡した。自分には、亂を治める臣が僅に十人しかいないが、自分と徳も心も全く一致してゐる。それだから自分は敵に勝つたのである——と、記録してあります。これが周の興隆した原因でありますから、徳を修めるのが第一で、味方の多いとか少ないとかいふことは、第二、第三の問題となります。決して御心配などは御無用です」と力をつけた。戊午の日に、王族の朝(西王)は郢といふ土地に侵入した。

魯の叔孫婁が晉から釋放されることになつた。晉では禮を盡して歸さうと考へ、士景伯（士彌牟）に命じて、箕（地名）まで迎へに行つた。ところが、叔孫婁は、士景伯が迎へるのは自分を殺害する目的にちがひないと考へ、家來の梁其鏗を門に待たせ、「自分が士景伯を迎へに出た時、左の方を振りかへつて咳拂ひをしたら、すぐさま彼を殺せ。右の方を振りかへつて笑つたら、殺すには及ばない」と、命令した。しかし、別段に事なく兩人は面會した。席上「わが君は諸侯の長である責任上、やむなくあなたを長い間引き止めました。もう御歸國になつても差支ないことになりましたについて、粗品進呈のため參上いたしました」と士景伯はいふ。全く心の解けた叔孫婁は、くれぐれもその厚意を謝した上で、餞別を受取り、そのまま歸國した。

周の國が東王（敬王）と西王（朝）との二派に分れて争つてゐるので、晉の頃公は、いづれが正しいかを國民に訊ねたいと思ひ、士景伯をそのための使者とした。三月庚戌の日に、彼は周の王城附近で國民の聲を聞くと、人人は口口に東王が正しく、西王が不正の旨を告げた。それで晉は、西王（朝）から救援を求めて來たのをことわり、その使者を晉へ迎へ入れなかつた。

（經）夏五月乙未の朔日に、日蝕があつた。

〔傳〕この日蝕をうらなつた魯の梓慎は「これは陰氣が陽氣に勝つた現象だから、やがて洪水とならう」と、豫言した。けれども叔孫婁は反對してかういつた。「いや、自分は旱魃があると思

ふ。本来ならば、現在は春分を過ぎてゐるから、陽氣が盛んでなければいけないのに、今年は陰氣の方が勝つてゐる。この状態は長く續く筈はなく、やがて陽氣が陰氣を打負かす。その時に旱魃が起るのだ」

六月壬申の日になると、西王の軍隊が、東王に屬してゐた瑕と杏との二都を攻め取つた。鄭の定公が、家老の游吉（子大叔）を同行して晉に赴いた。游吉は晉の士鞅（范獻子）と會見して、「周の内亂はどうしたものでせう」と尋ねられた。「私は才能がなく、鄭の國さへ盛大にはできません。どうして周のことまで手が廻りませう。周の王室を安定させるのは、あなたに責任です。世間の人人はそれを非常に心配してをります。周の案れてゐるのは、大國である晉の恥であります。かう游吉に語られた士鞅は、韓起（韓宣子）と相談して、周を安泰にするために、明年、諸侯の會合を催すことを決定した。二十五年の黃父の會合は、かうして行はれたのである。

（經）秋八月になると、魯の國では盛大な雨乞の祭を舉行した。また、丁酉の日に、杞の平公がなくなつた。

〔傳〕さきに叔孫婁が豫言したとほり、夏の間、魯の國には雨が全くなかつた。それで秋になつて盛大な雨乞の祭を行つたのである。

（經）冬に入ると、吳が楚の巢といふ都を滅ぼした。杞の平公の葬儀が行はれたのも冬のことであつた。

〔傳〕冬十月癸酉の日に、周の西王（王族の朝）は、成周の寶物である珪の玉を黄河に沈めて河神を祭り、福を祈つた。ところが、その翌日に黄河の渡守が、河のうへでその寶物を拾ひ上げた。やがて、陰不佞といふ敬王の家老は、晋から加勢のために差向けた温の軍隊を指揮して、南方にある西王の領分に侵入した。その際、寶石を拾つたものがあるといふ噂を聞いて、強制的に取上げて賣らうとすると、石であつた。これは渡守が寶物を匿して石を差出したため、後に王位が定まると、敬王にそれを献上した。敬王は大變に悦ばれて、この男に土地を賜はつた。

一昨年、雞父で呉に伐たれたのを口惜しがつた楚の平王は、水軍を編成して呉の國境を侵す計畫を樹て、着着と準備を進めてゐた。けれども、楚の家老の沈尹戌だけは全然喜色なく、「今度の出征にもわが國は敗れるであらう。遠征する楚を呉は自國で引受けることになるし、わが君は平生から國民に同情がない。それで楚が引上げる時、呉がそれを追ふと、わが國境に防備がないから、きつと都會を敵に奪はれるであらう」と、心配した。

楚軍の出兵を聞いて、越の王族や家老が途中から加勢した。楚の平王は、圍陽（楚の地）まで進んで、そこから引返した。果して呉の軍隊は楚軍の後を追ひ、國境の警備の不足なのに乘じて巢と鐘離との二都を滅ぼした後引上げた。沈尹戌は「だから自分は心配してゐたのだ。幾回もこんな事をくり返してゐたならば、やがては郢（楚の首都）までも失つてしまはう」と嘆いた。かうした豫言が實現して、魯の定公四年になつて、吳軍が郢を攻めるのである。

二十五年

〔經〕二十五年の春に、魯の叔孫婁が宋に赴いた。

〔傳〕二十五年の春に、魯の叔孫婁が使者となつて宋の國に赴いた。そして家老の樂大心（桐門右師）と話をしてゐる間に、樂大心は宋の家老たちを輕蔑し、自分の本家の人人の惡口をいつた。會見が終つてから、叔孫婁は家來のものに、「樂大心はきつと亡びよう。君子ならば他人を輕蔑する筈がない」と豫言した。

宋の元公が叔孫婁を饗應して、新宮といふ詩を賦した。そこで叔孫婁も車轄といふ詩を唱ひ元公の王女を迎へて季孫にめあはせたい、といふ意を表した。その翌日も酒宴は續き、元公と叔孫婁とは、いろいろ物語つてゐるうち、共に涙を流して泣いた。その時、樂祁が宴席の取持をしてゐたが、退出してから「今年のうちに、わが君も叔孫婁も共に死なれるであらう。樂祁も場合哀しみ、哀しむ場合に樂しむのは、本心を失つてゐる證據である。本心を失つた人が長く生きられる筈はない」と、人人に語つた。

魯の季公若の姉は小邾の君の夫人となつて、宋の元公の夫人を生んだ。この元公の夫人が生んだ王女が、魯の季平子の妻となることに定められてゐた。今回、叔孫婁が使者となつて宋に赴いたのは、この王女を迎へるのが目的であつた。叔孫婁の副使となつて共に宋に赴いた季公若は、ひそかに元公の夫人に目通りを願ひ「王女を季平子にやつてはなりません。魯では近

いうちに季平子を逐ひ出さうとしてゐますから」と告げた。夫人は心配して事の旨を元公に報告する。元公も氣になるので、樂祁を召して意見を求めた。すると樂祁は「御心配されることはありませんから、姫君を季平子のところへおかたづけなさい。魯では三代の間（文子、武子、卒子）季氏が政權を握り、四代の間（宣公、成公、襄公、昭公）君に實力がありません。臣民の信望がなければ、一國の君であつても、その意志は一つ遂げられません。魯の君が、あせらず騒がず安心して落着いて天命を待つてゐられれば、まあ無事でありませうが、若し季平子を追放しようなどとの大望を持たれたら、反對に自身が他國へ亡命する結果になりませう」と申上げた。

（經）魯の叔詣は、晉の趙鞅、宋の樂大心、衛の北宮喜、鄭の游吉、曹、邾、滕、薛、小邾などの代表者たちと、黃父といふ土地で會合した。それは夏に入つてからのことであつた。

（傳）夏に、諸侯が黃父といふ土地で會合したのは、周の内亂を安定するための相談を行つたのである。會合の席上で、晉の趙鞅（趙簡子）は、諸侯の家老たちに命じて周の敬王へ穀物を献上し、「明年は敬王を周の國都にお迎へしよう」と謀つた。

すると一歩進み出た宋の樂大心が「わが宋の國は、周へ穀物を送ることは遠慮したく思ひます。なぜならば、宋は股の後裔で、周の賓客として取扱はれてゐます。決して周の下に在る國ではありませんから、他の國國はともかくも、宋だけは別格にしていただきたいと存じます」といつて、晉の命令を拒まうとした。晉の士景伯（士彌牟）はやや聲を上げませながら「宋だ

け別格にしろとは甚だしい無理な申分です。わが先君文公が主催された踐土の會合（僖公二十八年の條に見える）から今日まで、宋は晉と共に戦争のあるたびに、會合のあるたびに一緒になつてきたではありませんか。それに諸侯と同じく、協力して周の王室のことに努力しようとの盟約さへも結んでゐます。今となつて、あなたの國だけ別格にする理由を私どもは認めません。あなたは御一存でさういはれますが、それでも君に對して忠實なのでせうか」と、反駁した。それには樂大心も一言の返答なく、人數と穀物との量を割當てられた書附を貰つて退出した。樂大心が退出すると、士景伯は傍の趙鞅（趙簡子）にこんなことを囁いた。「あの男は宋の國に永く居られないでせう。君の命令を受けて使者にたちながら、同盟の主催國に無禮をはたらきました。他國へ亡命するのではないでせうか」と。

（經）鸛鶴といふ鳥が、魯の國に飛んで来て巢をつくつた。

（傳）「春秋」の本文に「鸛鶴といふ鳥が、魯の國に飛んで来て巢をつくつた」と記録したのは、元來この鳥は穴に棲んで木には巢をつくらぬ鳥で、しかも魯にはゐないから、特に書いたのである。魯の家老の師己は、この噂を聞いて「さてさて、何か悪い前兆でなければよいが。むかし、文公、成公の時代に、やはりこの鳥が来て、魯の君が亡命された。昭公もやがてさうした御身になるのであらうか」と、悲しみながら豫言した。

（經）秋七月の上旬と下旬に、魯では盛大な雨乞の祭を行つた。

（傳）秋になつて二度も雨乞を行つたと記録されたのは、旱魃がひどかつたからである。

〔經〕九月己亥の日に、魯の昭公は齊に亡命した。ただし、すぐ齊の國へは行かず、ひとまづ齊と魯との國境にある陽州といふ場所に逗留した。齊の景公がそれを聞いて、昭公を見舞つた。昭公は野井といふ土地まで出向き、景公の訪問を受けた。

〔傳〕秋になると、魯では内亂が勃發し、そのため昭公が齊に亡命するといふ大事件になつた。初め、魯の季公鳥（季文子の叔父）が齊の鮑文子の娘を妻として申といふ男の子を生んだ。やがて季公鳥が死んだので、その弟の季公若（季公亥）と、親族の公思展と、季公鳥の家來の申夜姑との三人が、申を助けて後見となつた。ところが季公鳥の妻の季嬖は、聞きびしいためか、料理番の檀といふ男と私通した。それが露見しさうになると、後見の人人に罪を責められるのを懼れ、召使の女に自分を管て叩かせて、その様子を家老の秦遄の妻（季公鳥の妹の秦姬）に見せて、「季公若殿が私に不義をしかけ、私がいふことを聞かないといつて、折檻いたします」と訴へ、また、季公甫（季平子の弟）には、「公思展殿と申夜姑とが私を手ごめにして、無禮な振舞をいたします」と、勝手なことを告げた。秦遄の妻は季公之（季平子の弟）にそれを語る。季公之と季公甫との二人が兄の季平子にむかつて、それぞれ自分の聞いた内容を物語つた。

立腹した季平子は、すぐに公思展を下といふ土地に捕へ、申夜姑を死刑に處さうとした。季公若は申夜姑が平常忠實であるのを知つてゐたので、助命を請はうと季平子の邸に出かけた。が、季平子は門前拂ひを喰はして絶対に面會しなかつた。そのうちに公思展を捕縛した役人が

その處分について指令を受けに来ると、季公之は兄の命だといつて早速に公思展を殺させてしまつた。この事があつてから、季公若は季平子を怨むやうになつた。

魯の季平子と邱昭伯との兩家が隣合つてゐて、鶏が常に蹴合ひをやつた。それで季平子の家では、薄い金屬の板を鶏の胸につけさせると、邱昭伯の家でも負けぬ氣になつて、金屬の蹴爪を自分の家の鶏の蹴爪の上にはめさせた。季平子は權勢を肩にきて、邱昭伯の邸宅の方に向つて屋敷を増増したのみでなく、鶏に金屬の蹴爪をつけさせたのはけしからんと抗議した。この事があつてから、邱昭伯も亦、季平子に遺恨を含むやうになつた。

魯の臧孫（臧昭伯）の従弟にあたる會といふものが亂暴を働いて、季平子の處へ逃げて行つた。臧孫の家來が季平子の邸に赴き、會を捕縛して引上げる。季平子は立腹して、臧孫の家老を拘禁してしまつた。この事があつてから間もなく、魯では襄公の廟の祭を行つた。同じ日に季平子も先祖の祭を行ふと、樂官はすべてその方に行つてしまひ、魯の昭公の御前で舞樂を奏するものは、ただ二人しかなかつた。臧孫は憤つて、「先君の祭を奪つたのは彼だ」と罵つた。

それで魯の家老たちも、大部分は季平子の横暴を憎むやうになつた。季平子を追放しなければ、魯は平和にならぬと、第一に考へたのは季公若であつた。それで季公若は昭公の子の公爲に弓を献上して、共に屋外で射乍らこの計畫を相談した。公爲は直に公果、公賁の二人の弟に話す。二人の弟は昭公の近侍の僚祖を通じて、この計畫を言上させた。時に就寢中であつた昭公は、それを聞いてわざと怒つた風をし、戈をとつて僚祖を撃た

うとした。驚いて僚祖は御前から逃げ出す。「僚祖を召捕れ」と、昭公はいつたものの、本氣でないで、別に逮捕状をも出さなかつた。數ヶ月間も僚祖は御前へ出ない。昭公は立腹した様子もなかつた。公果たちはこの様子を見て、ふたたび僚祖に命じて、季平子放逐の件を言上させた。昭公はまたも戈をとつて追ふ。僚祖は今度も逃げ出した。

三度目に僚祖が同じ事を言上した時、「おまへは小役人だ。そんな大仕事が出来るものではない」と、昭公がいつた。昭公にその意があるのは、これで知れたので、今度は公果が直接御前に進んで言上した。昭公はこの件を、まづ臧孫に話して相談した。「とても困難なことで、一朝一夕にはできません」と、臧孫はこたへた。つぎに郈孫（郈昭伯）に相談した。「結構です。ただちに決行なされませ」と答へた。最後に子家懿伯（莊公の玄孫）に相談した。「季平子を退けて自分の幸福をはからうとするものの讒言でございませう。萬一仕損じましたなら、わが君が季平子放逐の張本人であるとの汚名を受けます。魯の君は國民の信望を失つてをり、實權は季平子が握つてゐますので、この御計畫は實行困難だと考へられます」と諫言した。昭公は機嫌を損じて懿伯を退かせようとした。が、懿伯は御前から退出することを承知せず、「私は自分の思つたままを言上しましただけで、御計畫には加はつたのでございませう。この話が他に漏れたならば、私は罪を得て死ななくてはなりません」といつて、昭公の宮殿に泊つてゐた。時に叔孫婁は闕（魯の地）に向いてゐたので、昭公の相談には與らなかつた。

九月戊戌の日に、魯の軍隊は季平子の邸内に攻入つて、季公之を門前で殺した。季平子は樓

臺に登つて難を避けながら、「私に果して罪があるかどうかをも調査されずに、わが君には武力に訴へられました。私はお願ひいたします。ここから南方にあたる沂水のほとりに出て御糺明ください」と嘆願したが、昭公は許さなかつた。「それでは費（魯の地）で捕虜としていただき、その間に罪の有無を御調査ください」とこれをも昭公は許さない。「それでは車五台と共に他國に亡命するのをお許しください」とこれまた昭公は拒絶した。

その時子家懿伯（子家子）が御前に進み、「季平子がすつかり慌てて嘆願してゐます。どうかそのうちの一つを許してやつていただきたう存じます。魯の國政は長い間季平子の手で行はれてゐて、國民中にその御蔭で生活できるものが随分多くをります。夜になればきつとその者どもが季平子を援けに来るでせう。季平子の命を助けないと、國民の不平は大きくなり、わが君に謀叛せぬとも限りませぬ」と直言した。やはり昭公は許さうともしない。郈孫は「早く季平子を殺さないと、事が面當になります」と、昭公にすすめた。

昭公は、孟孫氏の人人を味方にしようかと考へて、郈孫を使者として、孟懿子（仲孫何忌）を迎へにやつた。昭公が季平子を攻めたと聞いた叔孫氏の家老慶辰は、家中の人人にむかつて、「われわれは何方に味方をしたらよからう」と尋ねると、誰一人返答するものがなかつた。そこで彼は新しく、「いつたい、季孫氏があるのとなないと、われわれにとつてどちらが利益だらう」と尋ねた。「季孫氏が繁榮すればわれわれも盛大となります。季孫氏が亡びれば、われわれ叔孫の者も亡びませう」とそれならば、季孫氏を救援しよう」と、人人を指揮して季孫氏の

加勢に出かけ、西北側から昭公の軍を破つて季平子の邸内に入つた。その時、昭公の軍は甲冑を脱ぎ棄てて酒宴を張つてゐた。穢戾は敵に乘じて安心してゐる隙をうかがつて猛烈に攻め、遂に昭公の軍を撃退してしまつた。一方、孟孫氏の人人は、昭公が季孫氏を伐つたといふので斥候を出し、西北の高臺からその邸内の様子を見させる。季平子の邸内には叔孫氏の軍旗が翻り、昭公の軍はさんざんに敗北してゐる有様がよく見えた。そこで孟懿子は、昭公の使者となつて自分を迎へに来た郈孫(郈昭伯)を捕へ、南門の西で殺した後、これまた季孫氏に味方して昭公の軍を破つた。

刻一刻に形勢が非となつたのを見た子家子(懿伯)は、昭公に献策して、「君に従ふ人人は罪を一身に引受けて他國に亡命しなさい。君は家來たちに強制された様子をして城内にとどまり、一步も出てはなりません。さうすれば季平子もわが君を尊敬するやうになりませう」といつた。しかし昭公は、「萬事の責任を家臣に負はせて、自分だけ罪をのがれる氣にはなれぬ」と反對し、臧孫と一緒に先祖の墓地の樹の生ひ茂つた蔭で相談した結果、魯を出奔することになつた。

己亥の日に魯の昭公は齊の國に、亡命しようとして、陽州といふ土地に到つた。それを知つた齊の景公が平陰といふ地まで出向いて見舞はうとする。昭公は先がけに、自分から平陰を通り越して、野井といふ處で景公を待ち合はせた。兩國の君が野井で對面すると、景公は、「私の不行届でありました。役人に命じて平陰でお待ち受けさせたのは、陽州に近いといふ理由だつ

たのです。わざわざ野井まで御足勞を願ひまして、恐縮です」と、叮嚀に謝した。

「春秋」の本文に「魯の昭公は齊に亡命した。ただし、すぐ齊の國へは行かず、ひとまづ齊と魯との國境にある陽州といふ場所に逗留した。齊の景公がそれを聞いて、昭公を見舞つた。昭公は野井といふ土地まで出向き、景公の訪問を受けた」とあるのは、禮にかなつてゐたからかう書いたのである。何事によらず他人に要求する場合には、第一に先方に對してこちらが遜讓卑下することが肝要である。齊の景公はさらに言葉をにつけて、「私はあなたに、僅な土地を進呈いたします。あなたの心配は私の心配でもありますから、私は軍兵を指揮してあなたの御守護をいたしませう」と申出た。昭公の悦ぶ色を見て、子家子は、「天は一人に二つの福祿は授けません。わが君は魯の國君である以上に、何を要求する必要がありません。それなのに今、齊から土地を貰つてその家臣となられたならば、齊の人人は誰一人あなたを尊敬しなくなりません。その上、齊の景公は信實の缺けた方ですから、信用出来かねます。齊に頼るよりも晉に頼る方がよいと存じます」と諫めた。しかし昭公は子家子の言葉に従はうともしなかつた。

さて、昭公に従つて出奔した臧孫は、一同にむかつて今後絶対に昭公に叛かぬと契約させ、その誓詞の文面を昭公の命だといつて子家子に見せた。子家子はそれを讀み終るや不満さうな顔色で、「自分は才能がとばしいから物事はよくわからないが、どうもこの誓詞は不穩當のやうに思はれる。心では昭公を迎へようとして表面季平子に従つてゐるもの、または君の罪を背負つて他に亡命したものなどを一緒に考へるのはどうか。季平氏と通じ合つてゐなければ昭公を

迎へ入れることは絶対に不可能事だ。それにもかかはらず、この誓詞では、さうした人人を大悪人と見てゐる。自分はその考へには従へない」と断言して、盟を結ぶことには關係しなかつた。

魯に内亂が起つた時、叔孫婁は闕といふ土地に赴いてゐた。やがて歸つて来て、季平子と會見する。季平子は頭を下げて、「私をどうする積りですか」「人は誰でも一度は死にます。あなたが君を追ひ出したといふ悪い評判をとると、御子孫にまで悪名を残します。現在私があるあなたをどうしたらよいか、自分ながらわかりません」「もし、あなたが私を君に執り成してくだされば、永久に恩にきます」かういつて、ひたすら叔孫婁に執り成し方を頼みこんだ。

春秋左氏傳

それで叔孫婁は齊に向向いて昭公に目通りした上、歸國についての相談を進めた。子家は、この會談の内容が他に漏れるのを恐れて、「誰も昭公の館に近づけてはならぬ。近づくものがあるれば、遠慮なく召捕れ」と嚴命した。昭公と叔孫婁とは、四方に引きまはされた帳のなかで談合した。叔孫婁は結論として、「私はすぐに歸國しまして、季平子の方の人人を説きそれからわが君をお迎へいたします」と申上げた。

〔傳〕冬十月戊辰の日に、魯の叔孫婁が死んだ。
〔傳〕魯の叔孫婁は昭公と秘密に相談を進めて、昭公を歸國させる工作にかかつた。昭公と共に齊に亡命した人人は、昭公だけが歸國できても、自分たちは季平子を伐つたから歸國は許されぬであらうと考へ、一足さきに魯に歸る叔孫婁を撃たうと、伏兵を置いて待つてゐた。そ

れを昭公の近臣の展といふ男が知つて、昭公に言上する。叔孫婁はそのため、脇道から歸國した。

歸國した叔孫婁は、季平子を訪ねて昭公を迎へる打合せをした。さきにそれを叔孫婁に頼んだ季平子は、時既に變心してゐて、どうしても昭公の歸國を承知しない。かねがね自分の家來が季平子を援けたために昭公が亡命するに至つた責任を感じてゐた彼は、今また季平子の變心に遇ひ、昭公に申譯がないと、神官に命じて自分が死ぬやうに先祖の神に祈らせた。祈らせたのは冬十月辛酉の日で、間もなく戊辰の日に彼はこの世を去つてしまつた。

かうした事件が魯に起つたとは夢にも知らず、昭公の近臣の展は、それから間もなく昭公を奉じて乘馬で歸國しようとした。昭公の家來たちは早くもそれと知り、展を捕縛して、その自由を奪つてしまつた。

周では相變らず敬王と王族の朝とが東西に王となつて勢力を争つてゐた。十月壬申の日に、朝の一味である尹文公は、鞏(周の地)から洛水を渡つて、敬王に屬してゐる東訾といふ土地を焼いた。けれども東訾の人人がよく防戦したため、そこを奪ふことはできなかつた。

〔傳〕十一月己亥の日に、宋の元公が曲棘の地でなくなつた。
〔傳〕宋の元公もまた魯の内亂について心痛し、十一月になると、晉の國に出向いた。ところがある夜、夢を見た。夢のなかで自分は父の平公と共に朝服を着て、太子の樂の即位式に臨んでゐた。夜が明けると、六人の家老を呼びよせて不吉な夢の次第を語り、「才能のとほしいのを願

みず、自分は宋の君となつて長い間皆へ心配をかけた。自分は間もなく死ぬてあらうが、葬儀一切はどうか先君の場合よりも粗末なものにしてほしい」と、決意のほどを告げた。それまで黙つて聞いてゐた家老の仲幾は、この時になつて口を開き、「わが君が國家のためとの理由で、酒宴の數を減じられるなどといふのであれば、われわれはけつして反對はいたしません。しかし、事がわが國の國法や禮制になりますと、御先祖代からの御命令で、われわれは死を賭して守らねばならず、現に守つてゐるのでございます。自分の職分を忘れたならば、私共は悦んで刑罰に服します。職分を忘れ刑罰に服するのは決して名譽ではございませぬから、私はたへわが君の御命令に背きましても、代代傳はる國法を守りたいと存じます」と、毅然とした態度で言上した。宋の元公は、それから間もなく曲棘といふ地てなくなつた。十一月己亥の日である。

〔傳〕十二月に入ると、齊の景公が鄆といふ地を攻めた。

〔傳〕十二月庚辰の日に、齊の景公は鄆といふ地を攻圍した。そこに魯の昭公を居らせようとする腹であつた。

楚の平王は家老たちに命じて、國內の諸方に城を築かせた。鄭の子大叔が、それを評して、「平王は間もなくなくなるであらう。所所に城を築いて國民をどしどし移してゐる。國民が苦しむ嘆けば、王の身に反映するのは當然だ」と、豫言した。

二十六年

〔經〕二十六年春、王曆の正月に、宋の元公を葬つた。

〔傳〕去年十二月に鄆を攻めた齊軍は、二十六年春王曆の正月庚申の日にそこを占領した。

宋の元公の葬儀が行はれたが、元公の命令にもかかはらず、(昭公二十五年の條に見える)先君どほりの規模とした。これは禮にかなつてゐた。

〔經〕三月になると、魯の昭公が齊から歸り、鄆といふ土地に居た。

〔傳〕「春秋」の本文にかう記録したのは、鄆が魯の地であることを明確にする目的からであつた。

〔經〕夏に、魯の昭公は成といふ地を攻めた。

〔傳〕昭公を魯の國に送り入れようとした齊の景公は、夏になると、「魯の國から賄賂を受取ることを嚴禁する」との命令を出した。魯の季平子は、どうにかして齊の攻撃を避けたいと思案し、家來に命じて商人に變裝させ、齊の陣中に入り込ませた。命を受けた家來は女の商人の從者になつて、齊の子猶(梁丘據)に錦を二匹賄賂とした。

魯の季平子から賄賂を受けた子猶は、すぐさま景公の御前に進んで、「われわれはわが君の命を奉じて、一刻も早く昭公を魯に納れ申したいと努力してをります。しかし、宋の元公が昭公のために晉の援助を求めようとして途中でなくなつたら、魯の叔孫婁もその君を國へ迎へ入れ

よう願つて、病氣でもないのに急死しました。これは天が魯を見棄てられたか、魯の君が神に罪を得たか、いづれかだと考へられます。とにかく、私は家來たちを昭公に從はせて、魯の季平子と戦ひませう。われわれの形勢がよかつたならば、わが君も續いて御出馬ください。たとへ形勢が悪くとも、わが君が御出馬ないのですから、御恥辱にはなりません」と、言葉巧に進言した。景公はその言を納れ、家老の公子鉏に命じて、軍隊を引率し昭公に從はせた。「齊の軍隊と共に昭公が魯を攻め出したと聞いた成（魯の地）の守護職の公孫朝は「私が成を守護してゐるのは、かうした時に御役に立ちたいためです。齊の軍隊を一手に引受けさせてください」と、季平子に願つて許可を得た。念のため、あなたのところにも人質を出しておきませう」と、自分は、おまへを信用してゐるから、それには及ばない」とかうして公孫朝は齊軍に使者を出し、成の人人は魯の租税が重いので我慢をしかねてゐます。あなたの方に降参して一息つきたいと思ひますが、いかがでせう」と欺いた。齊軍はそれを信じて、形式だけ成を攻め、淄水といふ河で、馬に水を飲ませてゐた。公孫朝の命を受けた成の人人は、齊軍の油断を見すましてそれを伐ち、われわれのなかにはまだ降参を承知しないものもゐますので、ちよつとの間、戦争の眞似をします」と、言譯させた。そのうちに魯では十分に軍備をととのへたから、公孫朝はふたたび使者をつかはし「最初は降参するつもりでしたが、賛成しない人人が多いので、さきの約束は水に流します。われわれは戰場で雌雄を争ひませう」と、通達させた。かうして、魯の季平子の軍隊と齊軍とは、炊鼻（魯の地）で決戦した。合戦最中に、齊の子

淵捷は魯の野洩（家老）を追ひかけて矢を放つた。矢は戦車にあたり、それから野洩の楯を三寸ばかり貫いた。今度は野洩が子淵捷の乗馬目がけて矢を射る。馬がたふれて死んだので、子淵捷は改めて乗り物に乗らうとした。魯の人人がそれを魯の叔孫氏の家老の臧辰と見まちがへて、手傳つて世話をした。子淵捷は「俺は齊の國のものだ」と正直にいふ。魯の一人はすぐさま射らうとして、あべこべに射られてしまつた。御者が「まだ他にも魯の人人がゐますから、射殺しなさい」と、いつた。「いや嚇かせば十分だ。怒らせてはいけません」と、彼はこたへて、またも亂戦のなかに飛び込んだ。齊の家老の子囊帯が、野洩を追ひかけて罵倒した。それで野洩は「今は非常時であるのに、平時の怒を遷して私を罵るとは何事ですか。それほど私が憎いものならば、公然と戦ひませう」とこたへる。子囊帯の方では、別に戦意もなかつたと見えて、ただ罵倒するだけだつた。仕方なく、野洩も罵り返して、兩人は別れてしまつた。季平子の家來の冉豎といふ男が、齊の陳武子をねらつて弓を射ると、矢がその手に當つた。陳武子は持つてゐた弓を取り落したので、冉豎を罵る事しかできなかつた。後になつて冉豎はこのことを主人の季平子に語り、敵軍に立派な位のある人物が居ました。色は白く、鬚と眉毛とが黒くて、口の大きな人でありました」といつた。その男はきつと陳武子であらう。おまへはその男に敵對しなかつたか。「私も立派な人物だと知りましたので敵對などしませんでした」と、冉豎は季平子に合槌を打つた。

魯の林雍は顔鳴の同乗するのを差づかしく思つて、戦車から下りて戦つてゐると、齊の家老の苑何忌と出合つた。顔鳴は驚いて戦車を奔らせて逃げる。苑何忌は林雍と渡り合つて、殺すまでもないと思つて耳を切り取り、戦車に乗りうとした。林雍は後から忍び寄る。苑何忌の御者がちらりとそれを見て「あぶない！」と、思はずさげんだ。瞬間、苑何忌は振り返りざまに太刀を横になぎ、林雍の片足を断ち切つた。片足を切り落された林雍は、この上戦ふこともできず、一本足で他の車に乗つて歸つた。とも知らぬ顔鳴は一度は逃げたものの、やがて三度まで齊軍のなかに駆け入つて、大聲でさげんだ。林雍はどこにゐるのか。早くこの車に乗れし。四月になると、周では單子(單)が晉に出向いて、事の危急を告げた。五月戊午の日に、敬王方の劉の人人(劉)が尸氏(地名)で敵を破つたが、戊辰の日には施谷(周の地)で復讐された。

(經)秋になると、魯の昭公は、齊、莒、邾、杞の君たちと會合して、鄆陵といふ土地で盟つた。やがて昭公はこの同盟を終へて鄆に歸つた。

(傳)齊の景公は、魯の昭公を魯の國へ納れようとして、秋になると莒、邾、杞の君たちを鄆陵の地で相談した。

劉を守つてゐた人人は、形勢が非なるを見て、七月己巳の日に敬王をつれて出奔し、庚午の日に渠(周の地)に到つた。これを聞いた王族の朝の一味は、劉の地に火を放つて燒討にしてしまつた。敬王は丙子の日に褚氏、丁丑の日に蕞谷、庚辰の日に胥靡、辛巳の日に滑といふ風に、周の各地を轉轉してゐたが、晉の國では知罫、趙鞅が軍隊を引きつれて敬王を迎へ、女寛

(家老)に命じて闕塞の地を守らせ、朝の軍勢に備へた。

(經)九月庚申の日に、楚の平王がなくなつた。

(傳)楚の平王が九月になくなると、上席家老の子常は、第一夫人の長子である子西を擁立しようとして、會議の席上で「現在わが國には、王といふ太子がゐられるけれども、まだ御幼少であり、その母君は第一夫人ではありません。王子の建といふ方が妻にしようと思つて秦から連れ来たのを、平王が横取りして夫人としたのです。それにくらべれば、子西殿は年齢も長じ、善を好む性質でありますから、年齢からいつても性質からいつても、子西殿が楚の君となられるのが當然です」と主張した。けれども、それを聞いた子西は非常に立腹して「子常は國を亂し、君の悪事をあらはにする大悪人だ。平王に立派な世繼があるのを否定し、秦から来た夫人を辱しめて秦の援助を失はうとする。自分は、太子を輕蔑したといふ悪名を後世にのこすのは絶対にいやだ。天下全部を賄賂にくれるといつても、自分は拒絶する。大悪人の子常は、自分の手で殺してくれよう」といつたため、子常は懼れて子西の擁立を断念した。かうして太子の王が位に即き、昭王と號したのである。

(經)冬十月に、周の敬王が成周に入つた。

(傳)晉が援助しはじめると、敬王の軍は急に勢ひづいた。冬十月丙申の日に、敬王は滑といふ土地で兵を擧げ、辛丑の日には、嘗て朝に従つた郊といふ地に陣を張つた。十一月辛酉の日には、晉軍が鞏の地で勝つと、朝の味方であつた召伯盈(召簡公)が朝を逐ひ出してしまつた。

それで王族の朝の一味や一族は、周の祕藏してゐる書籍を大事に持つて楚に出奔し、陰忌といふものだけは、莒（周の都市）に逃げて叛いた。召伯盈は敬王を戸から迎へ、劉子や單子と盟を結んだ後、圍澤、隄上（共に周の地）に陣を進め、癸酉の日には敬王が成周（洛陽）に入り、甲戌の日には襄公の廟て人人と盟を結んだ。かうして敬王が首尾よく周の國都に遷つたので、周の軍隊は家老の成公般に周を警備させて引上げた。十二月癸未の日に、敬王は王城にある宮殿に入つた。

卷之二十六

昭公

二十七年

〔經〕二十七年の春に、魯の昭公が鄆から齊に行き、やがて歸國して鄆に居た。

〔傳〕「春秋」の本文に、魯の昭公が鄆から齊に行き、やがてまた鄆に歸つた旨が記したあるのは、昭公が魯の首都には入れなくて、その他の土地に居たことを意味してゐる。

〔經〕夏四月に、吳ではその君を弑した。

〔傳〕楚の平王がなくなつたのに乗じて、吳の君（僚）は楚を討つ計畫をたて、王族の掩餘と燭庸とに軍隊を指揮させ、楚の潛といふ土地を攻めさせる一方、家老の季子を晉に使者に立てて諸侯の強弱を視察させた。ところが、吳軍の侵入を知つた楚では續續と兵をくり出して潛の地を遠巻にしたため、吳の軍隊は退却することが不可能となつてしまつた。

かねがね吳の王位をねらつてゐた王族の光は、「王を殺す絶好の機會は今だ」と深く決心して家老の鍼設諸に意中を打明けた。「おつしやるとほり、王を弑する機會は今です。しかし私には老母と幼い子供がありますので、私は残念ながら御援助できません。」母や子のことは心配し

なくとも、後は自分が引受けた。どうかこの相談に乗つてほしい。かうして、二人は秘に陰謀を進めてゐた。

夏四月が来ると、武装した兵を地下室に伏せておいて、光は吳王を酒宴に招待した。やがて吳の君は光の邸宅に向いたが、その警戒たるや、空前絶後の嚴重さであつた。宮廷から光の邸宅迄、武装した軍兵がづらりと並んでゐた。門を守るもの、階段を見張るもの、戸を開閉するもの、席上で斡旋するもの、これらはすべて吳王の近親から選ばれた。それに劍を持つた兵が左右から吳王を挟んで警固し、給仕のものはまづ衣服を脱いで、懷中に何も持つてゐないことを示し、食事を運ぶものの左右には、劍を持つた兵が常に目を光らせてゐた。この有様に王族の光はぶるぶると震へ出し、「急に足の疾が起りましたので、暫く失禮させていただきます」と、あらかじめ難を避けて地下室に入り、伏兵の間に身を縮めてゐた。やがて籌設諸は、丸燒にした魚の腹の中に短劍を隠して王の側に進み、劍を抜きとつて王を突き刺した。左右から警固の兵の持つた劍が、ぐさりと籌設諸の胸を突き、たがひに交叉したほどであつたが、それにもひるまず、到頭吳王を弑してしまつた。そこで王族の光は野心をとげて吳の君となり、約束どほり籌設諸の子を取り立てて上席家老とした。

そのうちに晉を訪問した季子が歸國して「自分にとつて、どんな君が立たうとも、先君の祭をよく行ひ、國民を愛し、國家の體面を保つてくれるならば差支ない。自分は決して誰をも怨まない。先君の死を哀しみ、現在の君に事へるより、何の手段があらう」といつて使者の趣

を弑された王の墓前で復命し、哭泣の禮を行つた後に、新しく立つた吳の君に事へた。本國に内亂が起つたと知つた王族の掩餘は徐の國へ、燭庸は鐘吾といふ小國に亡命し、楚の軍隊もまたそのまゝ引上げてしまつた。

(經)楚では、家老の郤宛を殺した。

〔傳〕正直であり、しかも穩和な性質だつたので、楚の家老の郤宛(子惡)は、國民の間に頗る人望があつた。それを嫉んだ郤將師と費無極とが腹を合はせて、郤宛を讒言しようとして考へた。上席家老の子常は賄賂をとることが好きで、讒言を信用するやうな與し易い人物である。それを見透した費無極は一計を案じ出し、「郤宛があなたを招待して酒宴を開きたいと申してをります。御出席願ひます」と子常にいひ、また、郤宛には「上席家老殿があなたの家で酒宴を催したいと望んでゐられる」と告げた。「私は位は低しい身分は賤しく、上席家老殿と酒宴ができるやうなものではありません。萬一、さうした光榮を擔へば私の家の名譽で、あなたの御骨折に御禮の言葉もありません。御臨席を願つても私には御返禮として献上する物がありませんが、どうしたらよいでせう」。あの方は甲冑や兵器を好まれます。あなたの持つてゐる甲冑と兵器とをお見せなさい。私はそのなかから上席家老殿の好みさうなものを擇び出してあげませう。そこで郤宛は言葉どほりにする。費無極は並べられた甲冑や兵器のなかから五品を勝手に擇び出して、「これを門に並べておきなさい。あの方が来れば、好きな道で、きつとそれを眺められます。その時献上すればよいのです」と、眞面目な顔でいひ聞かせた。

そのうちに約束の日となると、郤宛は費無極の擇んだ五品の武具を門に飾り、左手に幕を張りまはした。費無極は子常の家に掛けて、「私にはあなたを危地に落とすところでした。郤宛はあなたを殺さうとして門のところ甲冑をつけた兵を伏せてあります。決して招待の席に行かなくてはなりません。それにこの春、呉がわが國を攻めた際に、わが國は吳軍をうち破りました。そのままで進まず、吳の内亂に乗じて討つのはよくないといつて兵を退かせたのもあの男の仕業だといふことです。吳の國はわが喪に乗じて攻めたのですから、内亂があらうとなからうとそれを攻めるのに遠慮はないと私は考へますが」と、口を極めて讒言した。子常はこの讒言を信じ、人をやつて郤宛の家の様子をうかがはせると、果して武装をした兵がゐた。それで招待を受けずに、急に郤將師をよびよせてこの事を話した。すぐさま郤將師は郤宛の家を攻め、郤宛が自殺したと聞いて、その家を焼かうとした。

楚の國民は郤宛に同情して、命令が出てその家を焼くものはなかつた。それで郤將師は嚴命を出し、「郤宛の家を焼かないものは死刑にする」と觸れ出した。國民は手に手に薬を一握りづつ郤宛の家に投込んだまま、どうしても焼かうとはしない。終に郤將師は役人の手でそれに火をつけさせ、一族一黨のものを滅ぼし、さらに遠い親戚までも殺してしまつた。やつと命を助かつたものが、郤將師と費無極とは、王と上席家老とを欺いて、自分の利益をはからつてゐる。上席家老は二人を信用し切つて何事をもまかせてゐるのであるから、楚の前途はまつたく闇だ」と、決死の色で觸れまはつた。子常は事を荒立てては自分の不明を大きくすると考へ

郤宛の無罪を知らながらも、如何ともできなかつた。

〔經〕秋風が吹く頃になると、晉の士鞅、宋の樂祁犁、衛の北宮喜および曹、邾、滕の代表者たちが扈といふ土地で會見した。

〔傳〕晉が秋になつて、諸侯の家老たちと扈といふ土地で會合したのは、周の警備と、昭公を魯に迎へ入れる相談とのためであつた。

その席上で、宋と衛とは熱心になつて、魯の昭公を本國の首都に安定させねばならぬ旨を説いたところが、晉の士鞅（范獻子）は、魯の季孫子から賄賂を取つてゐたのでそれに反對し、宋の樂祁犁（司城子梁）と衛の北宮喜（北宮貞子）とにむかつてかう説いた。魯の昭公は齊軍と共に季平子を討たれたが、自分にはその理由がわからない。季平子にはどんな罪があつたのだらうか。幽囚の身となつて、押しこめていたのだきといふ願つても、他國へ亡命させていただきたいと願つても、昭公は承知されず、後になつて戰爭に敗けて、自身から出奔されたのである。これは天の助けが季平子にあつたと考へるより仕方があるまい。それに昭公は三年間も齊にゐられるが何一つ成就せず、今では齊の景公も昭公に同情など持つてはゐない。季平子の方では國民の同情も得てゐるし、軍備も十分で、魯は季平子が支配するやうになつてから領土も増加してゐる。それにもかかはらず、季平子は自分で魯の君とはならず、別の君を立てもしない。自分はこの様な理由で、現在昭公を魯に入れるのは非常な難事だと思ふ。あなたがたは成算ありげな口吻をもちますが、御手柄を拜見したいものである」と。意外な反對に遇つた樂祁犁と

北宮喜とは、晉の援助がなければ駄目だといづれも観念して、季平子を征討することを辭退した。士鞅はしてやつたりと、他の小國にもこの旨を通知して、晉の頃公には「諸侯が相談の結果、昭公を魯に入れるのは困難だといふ結論に達しました」と、復命した。

昭公を魯はうといふ目的で、孟懿子が大將となり、季平子の家來の陽虎が副將となつて鄆の地を攻めて來た。鄆の人人はこれに對抗して一戦しようとする。子家子はこの様子を見て嘆息し、「ああ、昭公を敗北させるものは敵の季平子ではなく、昭公にしたがつて鄆にゐる味方である。天は昭公に災禍を下してゐるのに彼等はそれを知らず、いい氣になつてゐる。天の加護があれば、今まで昭公が本國に歸れないわけではないのだ。徒らに戦争を好む人人がわが君の周圍にゐる以上は、永久にわが君は本國に歸れず、この場所を一生を終へられるであらう」といつた。昭公は子家子が戦を好まないのて晉の國に使者に出し、周圍のものを指揮して且知といふ土地で戦つたが、今度も勝つことができなかった。

楚では、卻宛が費無極の讒言に遭つて自殺したのに同情して、上席家老の子常を非難する聲がまだ絶えなかつた。國民は神前に出て、口口に子常の惡を告げる。見かねた沈尹戌は子常にむかつて、「卻宛は罪もないのに、あなたはそれを殺して、國中の非難を身にあびてゐます。費無極は今まで多くの人人を讒言しました。それを知らぬ國民は一人も居りません。さきに朝吳を斥けたのも（昭公十五年の條に見え）蔡の君を追ひ出したのも（昭公二十一年の條に見え）みな彼の仕業であり、君の御聰明を蔽ひました。もともと平王が溫和であり國民に同情を

持つてゐられたことは、成王や莊王以上なのでありますが、諸侯からの人望がないのは、彼を近づけて御信任あつたからであります。費無極はそれにも懲りず、今また卻宛とその一味を殺して、非難はほとんどあなたにふりかかつてゐます。あなたがここで適當な方法を講じて國民を安堵させないと、上席家老としての鼎の輕重を問はれませう。國民も家來もあなたを輕蔑してゐればこそ、鄆將師はあなたの御命令だと勝手なことをいつて卻宛などを滅ぼしました。それから今度吳に新しい君が立ち、わが楚の國境の人人は、何日侵略されはしまいかと騒いでゐます。こんな場合に、わが國に大事が起つたならば、あなたの身は風前の燈火よりも危くありません。智者といふものは、讒言を構へる惡人を斥けて、身を安全にするものです。あなたはそのと反對です。私はあなたの身について心配しては後悔してゐる。きつとあの人人を罰するから、どうか今後もかうした場合には遠慮なく諫言してほしいといひ、九月己未の日になると、費無極と鄆將師とを殺し、その一族をも滅ぼして國民に申譯をした。その日から、あれほど騒がしかつた國民の非難攻撃は、びたりとやんでしまつたのである。

（經）多十月に、曹の悼公がなくなつた。鄭の國の快といふものが、魯に亡命した。魯の昭公が齊に出向いたのも、齊から鄆に歸つたのも、冬のことであつた。

〔傳〕冬に、魯の昭公が齊の國に出向くと、景公は酒宴を催して正式に饗應をしたいと申出た。が、子家子が辭退したため、普通の酒宴を張ることになつた。席上、禮儀を知らない景公は、

主客の挨拶も終らぬうちに、昭公に安坐を要求し、また「自分の妻はあなたの一族の子仲(懋)の娘ですから、會つてやつていただきたい」と頼んだ。子家はそれをにがにがしく思つて、すぐに昭公をつれて退出してしまつた。

十二月に入ると、晉の籍秦は、諸侯から出兵した警備兵を周に送つた。しかし、魯の國では國難を理由としてそれを斷つてしまつた。季平子は昭公を奪はうとして失敗した。魯は相當に多事だつたからである。

二十八年

(經)二十八年春、王曆の三月に、曹の悼公を葬つた。魯の昭公が晉に行き、乾侯といふ都市に逗留した。

〔傳〕「齊の景公がかく自分を輕蔑するから、いつそ晉の保護を受けたいと思ふ」かういつた魯の昭公は二十八年の春に晉に行き、すぐさま乾侯といふ都市に赴かうとした。子家はそれを諫めて、「晉に迎へられようとして、直接乾侯まで行つてくつろいでしまへば、誰も同情はいたしません。まづ、晉の國境でとどまり、沙汰を待たれるのがよろしうございませう」乾侯から使者を出して、晉に迎へに來て貰ひたいと願ひ求めさせた。それを聞いた晉の人人は、「天の怒りを受けて魯の君は久しい間、國外で苦しんでゐられる。その間、ただの一度も晉へは御機嫌うかがひの使者をも立てず、自分の都合だけを考へて、少しばかりの縁續きを頼りに齊の

國に落附いた。さういふ人を迎へる必要がどこにあらう」といつて承知しなかつた。それで晉では、ひとたび昭公を國境まで立ち戻らせた後、それを迎へて乾侯に落ちつかせた。

晉の祁盈の家來である祁勝と郟臧とが、たがひに妻を交換し合つた。祁盈はその不埒な行爲を憎んで、二人を捕縛して殺さうと思ひ、家老の叔游に意見を求めた。「現在では世が亂れて、無道なものが勢力を得てゐます。あなたの行はうとするのは正當ですが、恐らくは災難をまぬかれますまい。殺すことだけは見合はせられてはどうですか」「しかし私が家來の罪を裁くので、國法とは關係ないでせう」かうこたへて祁盈は二人を捕縛した。捕縛される直前に、祁勝が荀躒に賄賂をつかつた。荀躒はこのことを晉の頃公に言上した。頃公は祁盈が專斷に處分するのを立腹して、それを召捕つてしまつた。祁盈の家來たちは、「どうせ自分たちも死ぬのだから、死ぬ前に二人を殺して御主人を喜ばせてあげよう」と、祁勝と郟臧の二人を殺してしまつた。夏六月になると、晉では祁盈を殺し、事に關係したとの理由で、叔向の子の伯石(楊食我)をも殺した。

伯石は生れる前から殺される運命を持つてゐた。はじめ晉の叔向は申公巫臣氏(子靈の家)から妻を娶らうと思つてゐたが、その母は自分の身うちから妻をえらびたいと考へた。「父上には愛妾がたくさんあり、私の母は幾人もみました。弟はほとんどありません。それといふのもあなたの嫉妬心が強かつたためです。さうした血筋を引いたものは妻にはできません」「まあ、私のいふことをよく聞きなさい。子靈の妻となつた夏姬は有名な淫婦で、三人の夫(陳

の御叔、楚の襄老、申公巫臣」と一人の君（陳の靈公）と一人の子（夏徵舒）とを殺したばかりでなく、一つの國（陳）と二人の家老（孔寧、儀行父）とを亡ぼしてゐます。非常に美しい女には棘があると昔からいひ傳へてゐます。あなたが見初めたといふ婦人は、鄭の穆公の愛妾であつた姚子の子で、子貉の妹です。子貉は早死して子孫がなく、天が美しさをこの女に注ぎました。だから天は屹度この女を利用して、大きな災難を興へようとしてゐます。美人のために國を失ひ家を滅ぼした例はたくさんあります。あなたはそれでも懲りませんか。いつたい美しい女は、人を迷はせるのに十分です。餘程心がしつかりしてゐない限り、およそ美人の魅力に迷はないものはありますまい」と、戒めながら道理をいつて聞かせた。叔向はそれですつかり驚き、申公巫臣（子靈）の娘を娶る心を失つたが、晉の平公が無理に押しつけて、兩人を夫婦にさせ、伯石を生んだのである。

伯石が生れた時、叔向の嫂が母にこれを通知した。母は生れた子の様子を見ようと思つて産室に近づき、子供の泣き聲を聞いただけで引き返して、「人間の泣き聲とはどうしても思へない。あれは狼の聲だ。きつと狼のやうな心を持つに相違ない。わが家を断絶させるのはこの子であらう」と嘆き、たうとうその子を見なかつた。

（經）夏四月丙戌の日に、鄭の定公がなくなり、六月に葬儀が行はれた。秋七月癸巳の日に、滕の悼公がなくなつた。

〔傳〕秋に、晉の韓起（韓宣子）が死んだので、その職を魏舒（魏獻子）が引きついだ。魏舒は

祁盈の領地を七縣に、羊舌氏の領地を三縣に分け、彌牟を鄆縣の、賈辛を祁縣の、烏を平陵縣の、魏戊を梗陽縣の、知徐吾を塗水縣の、韓固を馬首縣の、孟丙を孟縣の、樂書を銅鞮縣の、趙朝を平陽縣の、僚安を楊氏縣の長官にそれぞれ任命した。これらの人人は平常から眞面目で忠義な心を持つてゐたので、魏舒の眞眞を受けてゐたためではなかつた。

それでも魏舒は、身内の魏戊を地方長官にしたのを氣に病んで、成憚（家老）に意見を求めた。すると成憚は、「さうしたことを御心配する必要など全くありません。身内であらうと前から、人物本位に選ばれた以上は、他の評判など度外視されて結構です」と、勵ました。賈辛が任地に行かうとして、魏舒のところへ挨拶に来た。その時、魏舒は快く對面して、かういつて教訓したのである。「さあ、近くお進みなさい。少しお話ししたいことがあります。むかし、叔向が鄭の國に行つて、穢蔑といふ賢人と對面したことがあります。穢蔑は容貌が醜かつたが、叔向がどんな人物であるか知りたかと思つて、御馳走を運ぶものの中から臺所に行き、何か一言しやべりました。その聲が頗るよかつたため、酒を飲まうとしてゐた叔向はあれこそ穢蔑に相違ないと、すぐに臺所の入口まで行つてその手を執り、座敷へ来てからこんなことを話しました。——大分前の話ですが、賈の國に容貌の見苦しい家老がゐて、非常な美人を娶りました。その妻は家老の醜いのを嫌つて、三年の間、物もいはず、笑顔すらも見せません。ある日のこと、家老は妻のために狩獵に行き、雉を見つけて射ちましたところ、一矢であたりました。妻はそれを見て始めて笑ひ、家老に物をいひかけました。家老はその時、自分が

弓を人なみに射たからよいが、下手であつたら、おまへは一生自分に話もしかけないであらうといひました。失禮ながらあなたも美しいとはいへません。もし、あなたが口をきかなかつたならば、私はあなたと逢へなかつたかも知れません。——かういつて二人は非常に親しくしたとのことです。賈辛殿は平常から忠義心に厚く、職務に忠實であられたので、及ばずながら私は地方長官に御推舉いたしました。任地へ行かれたならば、一層職務を勵んで、今までの評判をおとさぬやうに努力していただきます。

さて、孔子は、今度魏舒が人物本位の立場から人人を推舉したと聞いて、それを道理に合つてゐると賞めたたへた。また、賈辛を地方長官に命じたことを聞き、「就任の挨拶の時に、魏舒は立派な教訓を垂れた。彼の子孫は永久に晉で繁榮するであらう」と評した。

(經)冬に、滕の悼公を葬つた。

〔傳〕冬になると、梗陽縣の人が訴訟を起した。長官の魏戊には裁斷がつきかねたので、魏舒に上申した。ところが訴訟人の本家のものが、女の樂人を賄賂として魏舒に贈つた。魏舒はそれを受納しようとした。それを聞いた魏戊は、魏舒の執事の閻没と女寛とにむかつて、「あなたがたの御主人は潔白人格を諸侯の間に知られてゐます。もし、梗陽縣の人から女の樂官などを受納したら、これより大きな賄賂はありません。どうしても諫言しなくてはなりません。」といひ、二人の執事を承諾させた。

いつもの通り二人の執事は魏舒の邸宅に出仕して、退出してから、諫言する折を見はからつ

て庭に待つてゐた。やがて食事時となつて、三人が會食することに定まり、食事の最中に二人は三度も嘆息した。食膳が引かれると、魏舒は改めて二人を座に就かせ、「食事をする間だけは、どんな心配事をも忘れなければいけないといふ諺を自分は聞いてゐる。おまへたち二人は、食膳が出てゐる時に三度も歎息したが、どうしたのか」と尋ねた。すると二人の執事は口を揃へながら、「先刻ある人がわれわれ二人に酒を下されたので、まだ夕食を済ましてはをりません。食膳が最初出たとき、御馳走はこれだけであらうか。それでは腹が満たぬであらうと氣遣つて嘆息いたしました。續いて食膳が運ばれて来た時、今迄勝手なことを考へてゐた自分たちが恥づかしくなりましたので嘆息しました。さて、三の膳が目の前に並べられると、それを見ただけで満腹しまして、われわれ小人の満腹のやうに、世に君子といはれる人たちも慾がなくてほしいと考へ、またも嘆息した次第でございます」と、暗に魏舒を諫言した。この諫言が身にしみたので、彼は賄賂として贈られた女の樂人を斷つて受納しなかつた。

(經)二十九年の春に、魯の昭公は晉の乾侯から歸つて鄆に居た。齊の景公が高張に命じて昭公を見舞はせた。やがて昭公はまたも晉に行つて乾侯にとどまつた。夏四月庚子の日になる

と魯の叔詣が死んだ。
〔傳〕二十九年の春に、魯の昭公は晉の乾侯といふ土地から歸つて鄆に居た。齊の景公がこの時、

高張を使者として見舞はせたが、昭公を輕蔑してわが君といはしめた。子家子は大いに憤り、齊の人人はわが君を全く輕蔑し切つてゐます。かうした國に保護を受けられても無駄で、やがては恥辱を受けられませう」と諫めたため、昭公はまたもや晉の乾侯へ行つた。三月己卯の日に、周では、王族の朝の一味であつた召伯盈、尹氏固などを首都で殺した。さきに尹氏固が一同と共に楚に出奔して、途中から引き返して來ると、一人の婦人と周の郊外で行き遇つた。その婦人は彼を見て、「國に居る時は人人を勤めて謀叛させ、王族の朝をそそのかしておきながら、形勢が悪くなつて出奔すると、間もなく自分だけが同志を裏切つて歸つて來た。こんな卑怯な男は三年たたぬうちに死ぬだらう」と豫言した。この豫言が的中して、彼は殺されたのである。夏五月庚寅の日に、王族の朝に一味してゐた王子の趙車は、周の鄆といふ都市に入つて謀叛した。けれども間もなく、陰不佞のために擊破されてしまつた。魯の季平子は毎年馬を買つて、昭公の從者たちの衣服や履物を用意して、それを乾侯に贈つた。昭公はその使者を捕へ、馬を他に賣却したため、季平子はやがて何も送らなくなつてしまつた。また、衛の靈公が自身で乾侯に來て、昭公に啓服といふ乘馬を進呈した。昭公は非常にそれを愛用してゐたが、ある機會に堀に落ちて死んでしまつた。馬のために棺を特別に製つて埋葬しようとしたのを、子家子が諫めて、「從者たちは饑ゑてゐます。どうか死馬の肉を與へてやつてください」といつた。これは馬より從者に手厚くしてやつてほしいといふ意味である。そこで昭公は普通に馬を葬ることにした。

魯の昭公は、太子の公衍に子羊の毛皮の衣を與へ、その代りに公衍の持つてゐた寶玉を齊の景公に献上させた。公衍は寶石は勿論、昭公から賜はつた毛皮の衣までも献上したので、景公は悦んで、公衍に陽穀といふ土地を與へた。公衍が魯の太子となるについては、一場の物語があつた。はじめ公衍の母とその異母弟の公爲との母は同時に妊娠し、同時に産室に入つた。ところが、最初に公衍が生れると、公爲の母は、「私たちが二人のものは同時に産室に入つたのですから、二人とも同時に子供が生れたと昭公にお知らせしませう」といつて、公衍の母に出産のことを知らせないやうに止めた。その後三日を経て公爲が生れると、公爲の母は約束を破つて、眞先に子供が生れたことを昭公に報告した。何も知らぬ昭公は、その報告のままに信じて、公爲を兄とした。やがて昭公は、今度公衍が齊の景公から、土地を與へられたのを知つて秘に喜び、魯に君となつてゐた時のことを追憶して、「自分が今日魯から亡命してゐるのは公爲の責任である。それに後から生れて長い間兄となつて平氣でゐた。實際不埒極ることだ」といつて、公爲から太子の地位を奪ひ、公衍を太子とした。

(經) 秋七月には、別に記録することがなかつた。冬十月になると、鄆の人人が魯の昭公に叛いた。
 (傳) 晉の趙鞅(趙武の孫)と荀寅(中行荀吳の子)とが、冬になると軍隊を引率して、晉で占領した陸渾の地の汝濱といふ土地に城を築き、首都の國民から四百八十斤の鐵を出させて鼎を

鑄造し、范宣子の作つた刑書を刻みつけた。

これを聞いた孔子は、「晉はやがて亡びるであらう。祖先以来の舊法を顧みないで、新法を採用してしまつた。晉國が盛大となつたのは、その祖先の唐叔が周王から頒たれた法度を守り、國を秩序立てたからである。新しい法律は詳細な事がより多く規定してあるかも知れないが、肝腎の禮が缺けてゐる。禮の缺けた國が永く繁榮する筈はないのである」といつて、晉の未來を豫言した。

また、晉の蔡墨といふ人も、同じくこれを評して、「范宣子と荀寅との家は共に亡びるであらう。荀寅は下席の家老でありながら上席家老に相談もせず、勝手に鼎に刑法を刻んで國法とした。その刑法は范宣子が編んだのだから、罪は彼にもある。なほ、趙鞅もこの事に關係してゐる以上、よほどの徳がない限り、災難を身に受けるであらう」といつた。

三十年

〔經〕三十年春、王曆の正月に、魯の昭公は晉の乾侯といふ土地に居つた。

〔傳〕三十年の正月に、魯の昭公は晉の國の乾侯といふ土地に居た。二十七、八、九の三年間の各正月にも、昭公は、あるひは郟に、または乾侯に居たのであるけれども、「春秋」の本文には記録しなかつた。それを今年になつて特記したのは、昭公を咎め、その過失を懲らしめる爲て、後世の人君の戒とする意から出たのである。

〔經〕夏六月庚辰の日に、晉の頃公がなくなり、葬儀は秋八月になつて行はれた。

〔傳〕夏六月になくなつた晉の頃公の葬儀が、秋八月に行はれた。弔問使となつて晉に出向いた鄭の游吉(子大叔)は、そのまま晉にとどまつて送葬使をも兼ねた。そこで晉の魏舒(魏獻子)は士彌牟(士景伯)に命じて游吉を詰らせ、「わが先君悼公の御葬儀に當つては、貴國から正使と副使とが會葬されましたのに、今回はあなた一人て弔問と送葬とを兼ねてゐるのはどうした理由ですか。まさか、わが國を輕蔑したわけでもないでせう」といつた。

すると游吉がこたへて、「小國のわれわれが大國を輕蔑するなどといふことは決してありません。諸侯はどの國でも禮を中心として貴國に奉仕してをります。禮といふのは、小國が大國に従ひ、大國が小國をあはれむといふ意味であります。小國が大國に従ふのは、その時に應じて大國の命令を奉じ、要求するものを提供すること、大國が小國をあはれむのは、小國に無いものをめぐむことでありませう。わが國は晉楚二大國の間に存在してゐますから、租税の提供と國防とでなかなか費用が嵩み、心配も多く、それでもどうかして御命令に背くまいと苦心を重ねてゐる次第でございます。わが國が無事な時には正使、副使を何人でも出せますが、わが君がまだ年少でありますため、有能な人人を國防方面に擔當させねばなりません。それと、條理正しく辯解しました。晉の人人も、そこでこれ以上咎める口實もなくなつてしまつた。」

〔經〕冬十二月に、吳が徐の國を滅ぼした。そのため徐の君が楚の國へ亡命した。

〔傳〕さきに、吳の王族の光がその君を弑した際、掩餘と燭庸といふ二人の王族は、それぞれ徐と鍾吾との國に出奔した。(昭公二十七年の條に見える)ところが光が吳の君となつて間もなく、この二人を捕縛しようとしたため、二人はそれぞれの國から楚に亡命した。楚の昭王は家老の尹大心に命じて二人に出迎へさせ、養といふ土地を與へたり、城を築いたりして、莠尹然と沈尹戌とに守護させ、やがて吳を討たうといふ作戦をたてた。

これを聞いた楚の子西は、取るものもとらずに昭公の御前に進み、「新しく立つた吳の君は、やがてわが國をも攻める計畫の下に、國民を子のやうに愛してゐます。わが國境地帯の者どもは、吳との摩擦を出来るだけ避けてゐましても、それでも戦戦兢兢として怖れびくついてゐる有様でございます。その上、わが國が吳の君の讎である二人の王族に土地を與へて勢力を増させ、吳を怒らせましたならば、わが國にとつて非常な不利となるのは申すまでもありません。吳の君はその祖先の周の大王王季ほどの大勢力を得たいといふ野心を持つてをります。天がわれわれに援助を賜ふか、または吳の君に幸福を授けられるかはわかりませんが、その結果が現れるのは、遠いことではありません。わが國としましては、暫くの間は御先祖の神靈を祀り、一族一門を安泰にして時機を待つのが宜しいと思ひます。現在は吳と事をかまへる時ではございませんと、諫言した。が、昭公はそれを聞き入れず、自分の思つたとほりに行つたので、吳の君が立腹したのである。

かうして、冬十二月になると、吳の君は鍾吾の君を捕へたのち、徐の首都を水攻として、己

卯の日に滅ぼしてしまつた。徐の君は最初降参して、夫人と共に吳の服裝となつて吳の君を迎へたが、やがて自分が吳の國に同行を強ひられると、すぐさま楚に出奔した。楚の沈尹戌は軍隊を指揮して徐國の救援に赴いたが間にあはず、夷といふ土地に城を築いて、徐の君を守護した。

さて、吳の君は伍員(子胥)に尋ねて、「おまへはさきに楚を伐つてと説いた。自分はそれに賛成であつたけれども、先君が自分を疑ふ様子が見えたので實行はしなかつた。現在、吳の國は自分の所有となり、誰にも憚る必要はなくなつた。わが國力で楚と戦つても、勝つ見透しがつくだらうか」といつた。前前から楚を伐つ機會をねらつてゐた伍員は、うれしさに身を震はせながらかう申上げた。「楚では家老が多すぎて、常に意見が一致いたしません。したがつて國難を一身に引受けて立つものがないのです。もし君におかせられて三軍を編成した上、楚の不意を襲つて一軍を出動させたならば、楚では全軍が出陣して防禦いたしませう。敵が出動して來たら、こちらは引上げ、あちらが引上げたらこちらが追撃するやうにしましたら、必ずや楚は奔走に疲れませう。その時、わが國で大軍を續いて繰出したなら、大勝利を得ることは疑ふ餘地もありません」と、吳の君は伍員の作戦どほりにしたので、さすが強大の楚も手を焼くことになつた。

〔傳〕三十一年春、王曆の正月に、魯の昭公は晉の乾侯といふ土地に居た。
 兩國から卑しめられ、内部的には家來どもから疎んぜられ、對外的にも對内的にもよくなかつたことを意味する。

〔經〕晉の適歴といふ土地で、魯の季孫意如と晉の荀躒とが會見した。

〔傳〕晉の定公は、軍隊を引率して、魯の季平子（季孫意如）を攻め、昭公をその本國に歸さうと決意した。その決意を知つた晉の魏舒は、かねがね季平子から莫大な賄賂をもらつてゐたため、これを阻止しようと思つて、「季平子がたとへ昭公を追出したのが事實としても、現在では後悔をして謹慎してゐます。それまで討たうとなされるのは、糧當を缺く御處置かと存じ上げます。もし季平子を呼びよせられて、それでも來なかつたならば討つても、決して遅くはありませぬ」と主張した。晉では魏舒の主張を納れて、使者をやつて季平子を呼びよせた。使者が出發するといふ前の夜に、魏舒は急使を出し、「わが國から使者が行つたならば、あなたは晉に來なくてはいけません。決して悪いやうにはしませんから」と、秘密に季平子に告げ知らせた。

使者となつた晉の荀躒は、季平子と適歴（晉の地）で會合して、「どんな理由があつて主君を追放したのであるか。主に叛いた家來は、周の刑法によつて處罰されねばならないと、わが君はいはれます」と、使命を傳へた。いかにも哀しげな様子で、喪服をつけ跣足で進んだ季

平子は、荀躒の前に身を伏せたままこたへた。「君に二心を抱いたといふ御詰問を賜はつたのは心外でございます。私の心持は以前も今も少しも變りません。私は君に十分事へたく思つてをりますが、わが君が御歸國なされないため、不可能な状態にあります。また、私は決して刑罰を恐れてかう申すのではありません。もし、私に罪があるとされるならば、どんな重刑にも處してください。われわれの先祖の功績を思召されて、わが家を斷絶させずに、私にだけ死を賜はるならば幸でございます。また私もお殺しにならず、わが家も無事にさせていただけますれば、それこそ幸福の頂上です。洪大な君恩は死んでも忘れません。わが君に従つて國へ歸るのには、もとより私の希望です。異議のあらう筈はありません。繰返して申し上げますが、私がわが君に二心を抱いてゐるといふ疑ひだけは、晴していただきたいと存じます」と。
 かうした會話が終つて、夏四月になると、季平子は荀躒に隨行して昭公の居る晉の乾侯に向いた。子家子は昭公にむかつて、「わが君には季平子と一緒に國へお歸りなさい。一時の恥辱のために、一生の恥辱を續けられてはなりません」といつて、懸命となつて歸國を勧め、昭公を承知させた。ところが、昭公と共に亡命してゐた他の家來たちが憤り、「晉はわが君に頗る同情をします。わが君の一言で、すぐに季平子を魯から追放してくれませう」と、半ば強迫する口調で進言したので、昭公もそれに従はざるを得なくなつた。
 間もなく荀躒は君命を帯びて昭公を見舞ひ、その席上で、「わが晉の君は私に命じ、昭公の御意であるといつて、季平子の罪をせめて伐たせられたのであります。しかし季平子は決して死

を免れようとせず、恐懼して、自身出迎へに参りました。私は季平子の恭順を認めましたから、昭公におかれても、共に魯に御入國あられてはいかががせうかと懇願した。昭公はそれによつて、晉の御努力は感謝いたします。けれども自分が季平子に對面するとしたならば害を受けるのは明白です。それだけは致しかねます」といふ。意外な昭公の言葉に驚いた荀躒は、あわてて耳を塞いで逃出したが、昭公を魯に入れようとするわが君の努力も水泡に歸りました。もう今後晉は一切魯の内亂に關係しません。御歸國されぬとすると、私の一存は何ともできません。わが君に事の旨を復命いたします」と、その足で季平子に會ひ、昭公の立腹はまだ解けません。あなたはそのまま魯に歸り、君に代つて祭祀のことを掌りなさい」と告げた。

心配した子家子は、「飛んでもないことをわが君はいはれました。今からでも遅くはありませんから、家來を棄てて車に召させ、魯の軍中に入つて、季平子と一緒に御歸國なさいませ」と勧めた。昭公はさういはれると、またもや心が變つて、その通りにしようとした。しかし魯の家來たちはこれを知り、昭公を強迫して歸らせなかつた。

〔傳〕夏四月丁巳の日に、薛の君の穀(獻公)がなくなつた。晉の定公が荀躒に命じて魯の昭公を乾侯に見舞はせた。

〔傳〕薛の君の穀がなくなつたと「春秋」の本文にあるのは、魯と同盟國であるので名を記したものである。

〔傳〕秋になると、吳の人人が楚に侵入して夷といふ都市を攻め、さらに潜と六邑とを奪つた。楚の沈尹戌は、至急に軍備をととのへて潜と六邑とを救援した。吳の人人は強て戦はうともせず、二つの場所から引上げてしまつたので、楚軍は潜の住民を南岡といふ土地に遷して引上げた。やがて吳軍は、今度は楚の國の弦といふ土地を侵略した。沈尹戌と稽とが、軍隊を指揮して弦を救ひ、豫章といふ處まで進んだ。吳の軍隊はまたもや簡單に引上げてしまつた。吳はかうして伍員(子胥)の計略を用ひはじめ、楚を困らせたのである。

冬に、鄭の國の黒肱といふ家老が、濫といふ土地を土産として、魯に亡命した。黒肱自身は家老のうちでも身分は低いものであつたけれども、持つて來た土地を重んじて、「春秋」の本文にはその名が記録してある。

これについて、ある君子は「春秋」の價值を論じながらかういつた。「黒肱の場合を考へても、人間は名を尊重しなければならぬことが判る。一體、名は人の尊ぶところであるが、名があつても無い方がましな場合がある。土地を持つて謀叛すれば、たとへ身分の低い家老であつても、土地と名とを必ず書いて、悪名を後世に傳へてゐる。君子はこのために、一舉一動を慎み、禮と義とを忘れない。齊豹は衛の家老でありながら事を起して不義であつたから、その名を「春秋」に書かれて盜となり、(昭公二十年の條に見える)鄭の國の庶其(襄公二十一年の條に見える)や莒の國の牟夷(昭公五年の條に見える)鄭の國の黒肱などは皆小國の家老であ

つたが、土地を持つて出奔したから、やはり「春秋」に名を記録されてしまった。かう考へると、「春秋」ほど世道人心に有益な書は、全く珍しいのである。むかしから——「春秋」の言ひ現しかたは、文章は極めて簡單であるが、意味は實に明瞭であり、婉曲に言ひまはされても、趣旨は誰が讀んでも間違へない。一國の支配者が、十分に「春秋」に述べてある義理を了解したならば、善人はますます勧めはげみ、悪人は怖れびくつくのである。君子はこの故に「春秋」を天下無類の貴重な書物だとしてゐる——といはれるのも無理はない」と。

〔傳〕十二月辛亥の朔日に、日蝕があつた。

〔傳〕日蝕があつた前の夜に、一人の子供が裸體で地をころがりながら謡を唱つてゐる夢を、晉の趙鞅が見た。それで夢と日蝕との關係を蔡墨にたづねると、蔡墨はしばらくうらなつてゐたが、「六年後の十二月庚辰の日に、吳軍が楚の首都に攻入りませう。しかし吳の國も最後に於いては勝を得られませう」と、豫言した。

三十一年

〔經〕三十二年春、王曆の正月に、當時晉の乾侯に居た魯の昭公が、闕といふ土地を奪つた。

〔傳〕三十二年の春に、魯の昭公が晉の乾侯といふ土地に居たと「春秋」に書いてあるのは、對外的にも對内的にもよくなく、子家子といつて忠義な家來の進言をも用ひられなかつたことを

明瞭にしたのである。

〔經〕夏に入ると、吳の國が越を伐つた。

〔傳〕この時、吳と越とが最初に戦つたのである。晉の蔡墨はこれについて、「今から四十年以内に、越が吳を奪はう。歳星が越の方に宿つてゐるのに、吳がこれに逆つて越を伐つたのであるから、きつとその禍を受けずにはゐられまい」と、豫言した。

〔經〕秋七月には、特記する事件もなかつた。

〔傳〕秋八月になると、周の敬王は富辛と石張とを使者として、周の首都の成周（洛陽）に城を築きたい旨を晉の定公に願ひ求めさせた。周に内亂が起つてから最早十年になり、晉をはじめ諸侯が警備兵を出して周を守つてから五年にもなるので、首都に城を築けば諸侯の守護も不要となり、賊の餘類も害をなさぬであらうといふのが、敬王の意志であつた。

これについて、晉の士鞅（范獻子）は魏舒（魏獻子）に相談した。「諸侯が兵を出して周を警備するよりか、周に城を築く方がよろしいでせう。敬王も實際これをいつてゐられます。それに一度城を築いた以上は、その後どんな事變が起つても、わが國の責任はまぬかれませう。警備兵を出さずにすみ、それに責任も輕くなれば、一舉兩得ではありますまいか」魏舒もそれには全く同感であつたので、晉では韓不信に命じて周にこたへさせ、「天子からの御命令は謹んで拜受いたします。私どもの方から、すぐにその旨を諸侯に通告いたし、萬事取りはからひませう。城の大小や工事をはじめる期日などについては、決定次第申上げます」といつた。

(經)多に入ると、魯の仲孫何忌が晉の韓不信、齊の高張、宋の仲幾、衛の世叔申、鄭の國參

および曹、莒、薛、杞、小邾の人人と會見して、周の成周に城を築いた。

〔傳〕多十一月に、晉の魏舒と韓不信とは周の首都に行つて、諸侯の家老を狄泉といふ場所に會合させ、成周に城を築く指圖をした。この時、魏舒が一段と上席から人人を指圖したので、衛の家老の彪侯は、「あの人はやがて、天から大きな咎を受けるであらう。かうした大事を指揮する人物ではない」と譏つた。

己丑の日となると、晉の士彌牟が成周に繩張をして城を築く用意をした。工事に必要なすべての事を詳しく調査した上、それを書付にして、魏舒の手から劉文公に差出した。劉文公の許可を得ると、韓不信が築城工事の指揮者となり、計畫にしたがつて、どしどし工事をすすめた。

(經)十二月己未の日に、魯の昭公が乾侯でなくなつた。

〔傳〕十二月に、魯の昭公が病氣にかかつた。危篤となると、昭公は自分に從つて國を出奔した家老たち一同に形見の品を與へようとした。が、家老たちは遠慮して受取らなかつた。そこで昭公は、虎の形に造つてある玉、穴の大きな輪になつた玉、穴の小さな輪になつた玉、絹服などを子家子に與へると、子家子はこれを受取つた。家老たちもそこで皆、昭公からの下賜品を頂戴した。

そのうちに己未の日になると、昭公がなくなつた。子家子は係の役人達に、昭公から賜はつ

た品物を返納して、「私は君の御命令にさからひませんでした」といつた。これを見た家老たちも、全部、下賜品を返納した。「春秋」の本文に「魯の昭公が乾侯でなくなつた」とあるのは、自國を出奔して、他國でなくなつたことを明白にしたのである。

定公 (名は宋、父は襄公で、昭公の弟である。魯國第二十三代の君主)

元年

春秋左氏傳

(經) 元年春、王曆の三月に、晉の人人が宋の仲幾を周の首都で捕へた。

〔傳〕 元年春、王曆正月の辛巳にあたる日、晉の魏舒は諸侯の家老を狄泉といふ處に會合させて、成周に城を築く相談をした。その際魏舒は周の大臣に代つて、一段と上座から築城工事の指揮をした。これを見てゐた衛の彪侯(家老)は、「天下の支配者の居城を築かうといふ場合に、諸侯の家來の身分でありながら、周の大臣に代つて命令を出すなどは潛越であるばかりにとどまらず、義にもかなはない。大事を行ふに當つて、義にそむくやうなことをするならば、必ず大きな咎があらう。晉の定公が諸侯から見放されるか、さもなければ魏舒はきつと近いうちに死なう」と、豫言した。

築城工事が進み出すと、魏舒は工事一切を韓不信(韓簡子)と原壽過(周の家老)とに委せたりて、自分は附近の高原で焼き獵を行ひ、歸途、甯といふ土地で急死してしまつた。それで、魏舒の葬儀の時、魏舒に代つて晉の國政を執ることになつた士鞅(范獻子)は、家老なら

ば必ず用ひる外棺を用ひさせなかつた。大任を負ひながらも、復命もしないうちに勝手に狩獵などして歩き廻つたからである。

魯では孟懿子が周に向き、庚寅の日から、割當てられた築城工事に従事した。ところが、宋の仲幾は、自國に割當てられた工事を引受けずに、「滕と薛と鄭(小邾)との三國が、宋に代つて宋の仕事を引ふのが當然だ」と主張して、薛の代表者と口論した。「私たちはむかしから周に従ひたい心はありました。ところが宋の國は無理にわれわれ小國を脅迫して楚に従はせたので、それ以後心ならずもわれわれは、宋の服役に従つてをりました。ところが私は、かつて晉の文公が踐土の同盟に際し、——同盟に加はつた諸國は、各自もともと通り舊職に立ちかへつて、周に忠實を盡してほしい——といはれたのを記憶してゐます。(僖公二十八年の條に見える) 今度の工事につきまして、私たちは踐土の同盟に基いて周の御命令を奉じませうか、または今までもほり宋の命令に従ひませうか。何卒、晉からかうしろと御指揮を願ひたいと存じます。」踐土の同盟で舊職に復せよとあるのは、舊に従へといふ意でせう。それならば宋の割當工事を行ふのが當然ではありませんか。「舊に従へといふならば、わが國は太祖以來王室に御奉公してゐますから、直接周に従ふのが本當です。諸侯に従ふのは舊に復することにはなりません。」そんな大昔のことをいつてゐるのではありません。文句をいはずにわが宋の工事を

をおやりなさい。宋と薛との口論が果しなく續くので、晉の士彌牟が割つて入り、晉の國では、魏舒に代つて

新任の工事監督が指揮してゐまして、故事に慣れませぬ。あなたは今度は割當てられた仕事をしてください。いづれ歸國したら、さうした關係をよく調査しませう」といつた。すると宋の仲幾が、「あなたはさうした調査を後日に延して、踐土の同盟を忘れたやうな顔をなさいます。が、同盟の契約を報告した山河の神は、決してそれを忘れませぬよ」と反駁した。士彌牟は立腹して韓不信に向ひ、「薛の代表者は人人の知る故事を證據としますが、宋の代表者は神を證據としてゐます。實に言語道斷の態度です。宋の罪は決して軽くはありません。わが晉を抑壓する目的で神を引合に出すやうな男は、是非とも處刑する必要があります」と告げ、その同意を得た上で、仲幾を捕縛して歸國した。しかし、晉もそれが不穩な行爲であるのを悟り、三月になつてから、仲幾を周の首都に送り歸したのである。

(經)夏六月癸亥の日に、魯の昭公の柩が晉の乾侯から魯の國に歸つて來た。

〔傳〕昭公の柩が魯に歸ることになつて、叔孫婁の子の叔孫成子は、夏に入ると晉の乾侯に出向いた。出發直前に季平子は叔孫成子を招いて、「自分は子家子の恩を深く感じてゐる。あの男は實に同情深く、昭公にいろいろと進言してくれた。どうか子家子を魯に歸るやう努力してもらひたい。一緒に協力して魯の國政を見たいと思ふから。それに昭公の御柩その他のことは、全部子家子の命令どほりしたいと考へる」と依頼した。乾侯に出かけた叔孫成子は、どうにかして子家子と對談したいとその機をうかがつても、子家子の方で避けて會はず、柩の前で弔意を表する時間をも、わざと變更したりなどした。

それでも叔孫成子は思ひきれず、使を出して、何時でも御指定の刻に參上するから、是非御面談を願ひたい旨を通告した。子家子はそれを斷つて、「私はあなたに對面することが出來ないうちに、昭公に従つて亡命しました。昭公はあなたに面會せよとの御命令をなさらずになくなられましたので、私は押し切つて御目にはかかれませぬ」とこたへた。成子はふたたび使者を向けて、「それなればやむを得ませぬ。ただ御指揮だけお願いいたします。魯の季平子を追放しよう」と計つたのは公衍と公爲との二王族でありますから、この二人はどちらも君とするのに不賛成であります。もし王族の宋(昭公の弟定公)殿が國王となられるならば、われわれの願ふところがあります。また、昭公と共に魯を亡命したもののなかで、今回歸國させてよいものがあるれば、あなたの御指名に従ひます。なほ、あなたの家は後繼者がありませんし、是非御歸國を願ひ、季平子と共に魯の國政を執つていただきたいと存じます。これらは季平子の希望で、私にお傳へするやうにさせたのであります」といはせた。すると子家子は、使者にこたへて、「君を立てるといふことは、上席家老と大事をうらなふ龜とがあれば十分で、私の關係したことはありません。わが君の御供を申上げて亡命したもののうちで、眞實に忠義な心に缺けてゐた人人は、この機會に歸國するのがよいでせう。眞實に忠義な心を持つてゐる人人は、季平子を國賊と考へてゐますから、歸國はできません。わが君昭公は、私が亡命したのを知つてゐられますだけで、歸國するのを知らぬわけです。私は君の命令のない處へ行けません。近いうちに又何處かに亡命するでせう」といつた。

〔傳〕戊辰の日に、魯の定公が立つた。

〔傳〕魯の昭公の柩が壞隕といふ土地まで来ると、王族の宋が最初に魯の國へ入り、大部分の人はそこから引返して出奔した。六月癸亥の日に、魯の昭公の柩が乾侯から魯の國へ歸つて来た。戊辰の日に、定公が位に即いた。

表面は上手につくろつてゐても、季平子が昭公を憎む氣持ははなはだ強かつたと見え、人夫をつかはして闕といふ土地にある魯の代代の墓地と昭公の墓との間に溝を掘つて區別しようとした。すると家老の榮駕鵝(榮成伯)が、「わが君の御生存中には事へず、墓所をも隔離するにあつては、あなたの惡を天下に公表するのと同じです。たとへ世間に知れなくとも、子孫の代になつてこれを恥辱とするものがありませう」と諫言したため、沙汰やみとなつた。また、季平子は榮駕鵝に質問して、「昭公に悪い諛をつけて、後世にまで傳へたらどうであらう」といつた。「とんでもない事です。人人は昭公よりもあなたの方を數倍惡人だと思ひませう」かう榮駕鵝が諫めた結果、これもまた中止となつてしまつた。

〔經〕秋七月癸巳の日に、魯の昭公の葬儀が行はれた。九月になると、魯では盛大な雨乞の祭を舉行した。また、煬公の廟を立てた。冬十月に、魯では霜が降り、豆類を枯らしてしまつた。

〔傳〕魯では、先代の君の墓地の道を隔てた南方に昭公の墓を建て、代代の君と區別した。これは秋七月癸巳の日のことであつたが、後に孔子が魯の役人となるに及んで、墓地の外まはりに

溝を掘つて、代代の君と同一區域にあるやうにさせた。

さきに昭公が魯から出奔すると、季平子は魯の先祖にあたる煬公の靈に福を祈つた。やがて昭公が國外でなくなつたので、これといふのも煬公の徳であると考へ、九月に入ると、新しく煬公の廟を立てた。

周の鞏簡公(大臣)は、同族を差しおいて自分に關係のない人人を用ひるのが好きであつた。

二年

〔經〕二年春、王曆の正月には、特記することがなかつた。夏五月壬辰の日に、魯の王宮の南方にある中門と、その兩傍の眺望臺とが焼けた。

〔傳〕二年の夏辛酉の日に、周の鞏簡公は同族の人人に殺されてしまつた。

〔經〕秋に、楚の人人が吳を伐つた。冬十月になると、新しく王宮の南方にある中門と、その兩傍の眺望臺とをつくつた。

〔傳〕楚に従つてゐた桐といふ國が、今年になつて楚に叛いた。かねがね楚を討つ機會をうかがつてゐた吳の君は、楚の屬國である舒鳩氏にむかつて、「楚が軍隊と共にわが國に侵入するやう計畫してもらひたい。さうすればわが軍は楚を畏れた様子をして、桐の國を伐たう。あなたの國は桐が楚に叛けば非常に不利であるから、是非ともさうしていただきたい」と申入れた。

舒鳩氏はその言葉どほり、楚にむかつて吳の讒言をした。秋になると、吳の子常は、吳を討

つ目的で豫章といふ地まで出陣した。吳では水軍を豫章の地に集合させ、表面は桐の國を伐つやうに見せて、その實、巢といふ地を奪はうとする作戦をたてた。冬十月になつて、吳は豫章に陣取つた楚軍を奇襲して破り、巢の地をも奪つて、巢を守護してゐた楚の繁といふ王族を捕虜とした。

鄭の莊公が家老の夷射姑と酒宴を催した。酩酊した夷射姑は、こつそりと小便をしに外に出た。すると門番がその姿を見て、もう歸るものだと早合點して、肴のあまりがあつたらいただきたうございませうといふ。酔つてゐるので何と聞きちがへたか、彼は大いに憤り、門番の持つてゐた杖を奪ひ取つて打擲した。

三年

〔經〕三年春、王曆の正月に、魯の定公が晉に出向いたが、黄河まで行つて引きかへした。二月辛卯の日に、鄭の莊公がなくなつた。夏四月は別に事件がなく、秋になつて鄭が莊公を葬つた。

〔傳〕三年二月辛卯の日に、鄭の莊公が門の傍にある眺望臺から宮庭内を見下すと、門番が瓶の水を宮庭のなかに流す姿が目に入つた。潔癖な莊公はそれを咎めさせる。夷射姑が小便をいたしましたから清めるのでございませうとの返辭を聞き、すぐに捕へようとしたが、捕へることが出来なかつた。ますます立腹した莊公は「よし、では自分が捕へてやる」と、駈出さうとす

る。その拍子に圍爐裏に墜ちて全身に大火傷を負つてなくなつた。葬儀にあつては、遺言により五臺の車と五人の家來とをさきに穴に埋め、それから莊公の柩ををさめた。

秋九月になると、鮮虞の人人が晉軍を平中(晉の地)で破り、晉の觀虎を捕虜とした。觀虎が勇氣を誇つて敵をあなどつたからである。

〔經〕冬に、魯の仲孫何忌は、拔といふ土地で鄭の君と平和の盟を行つた。

〔傳〕魯の定公があらたに位に即いたので、鄭の君と親交を結ぶためにこの舉があつた。拔の地は現在では鄭と呼ぶ地方である。

蔡の昭公は二つの美玉と二つの皮の衣服とを作つて楚に出向き、その一組を楚の昭王に献上した。昭王はそれらを身につけて昭公を招いて酒宴を張つた。楚の家老の子常はそれをほしがつたが、蔡の昭公が惜しんで與へなかつた。子常はそれを含んで、三年間も昭公を楚にとどめて歸國させなかつた。

唐の成公が楚に出向いたとき、二頭の駿馬を持つて行つた。子常はこれもほしがつたが、成公は惜しんで與へなかつた。そこで子常は、成公をも三年間楚にとどめ、決して歸さうとはしなかつた。

様子を知つた唐の人人は相談して、成公に前から御供してゐる人に代りたいと願ひ出た。成公はそれを承諾したので、前からの從者に酒を飲ませて酔はせ、その際に成公の馬を盗んで子常に獻じた。子常は満悦して成公を國へ歸らせた。馬を盗んだ人はその後役人に自首して捕は

れ、「馬と國家とのいづれが重大であるか、恐れながらわが君の御考慮をお願いたします。私どもはかならず、あれ以上の名馬を探してまゐります」と、成公の御前で申上げた。成公はその罪を許されたばかりでなく、「責任は自分にあるのだ」といひ、一同に褒美を賜はつた。

蔡の家來たちはこれを聞いて、無理に昭公に願つて美玉と皮の衣服を子常に献じさせた。子常はそれを受取るや否や楚の王宮に出仕して昭公に挨拶したのち、「蔡の昭公が長い間歸國できないのは、楚から差上げる禮物が備はらないからである。明日まで禮物を用意しないと、係の役人を死刑に處すぞ」と嚴命し、やつと昭公は歸國できた。歸途、漢水にさしかかると、昭公は寶玉を親ら河に沈めて「自分は今後ふたたびこの河を渡つて楚に朝することは絶對にない。それを漢水の神に誓ふ」といひ、その足で晉に向いて、王子と家老の子とを人質として晉を盟主と仰いだ。昭公の心中には、楚を討たうといふ固い決心があつた。

四年

〔經〕四年春、王曆の二月癸巳の日に、陳の惠公がなくなつた。三月になると、魯の定公は、周の劉文公、晉、宋、蔡、衛、陳、鄭、許、曹、莒、邾、頓、胡、滕、薛、杞、小邾の君たち、および齊の家老の國夏などと、召陵といふ地に會合して、共に楚に攻め込んだ。夏四月庚辰の日に、蔡の公孫姓が軍隊を指揮して沈を滅ぼし、その君を捕へて歸國後殺した。

〔傳〕四年春三月に、周の大臣劉文公が諸侯を召陵に會合したのは、晉の請ひによつて楚を伐つ

47

相談をしたのであつた。

この會合の際であつた。晉の荀寅は、楚を伐たうと最初にいひ出した蔡の昭公にむかつて賄賂を要求したが、昭公は例の調子で惜しんで與へなかつた。それを根に持つた荀寅は士鞅にむかつて、「現在わが國は危険で、諸侯の大部分は叛かうとして時機をうかがつてゐます。かうした時に宿敵の楚を討つのは困難でないでせうか。春雨は長く續き、濕氣は多く、諸方に傳染病は流行して、しかも鮮虞は服従しなくなりました。それなのに楚を伐つ大軍を派遣しましたならば、晉楚の同盟を破つた責任を負ひながら楚を破ることもできず、鮮虞を失つてしまひませう。蔡の昭公に楚を伐つことを斷つてしまふがよろしいでせう。かつて方城山で楚を破つて以來（襄公十六年の條に見える）わが國では、どうしても楚を征服できません。ただ苦勞を重ねるばかりであります」といひ、その承諾を得て、楚を伐つことは中止したと、昭公にことわつてしまつた。

竿の先に鳥の羽がついてゐる鄭國の旗を、晉の人人は珍しがつて借りた。借りただけでなく、その翌日の會合の席に、晉の人人は自國の旗竿の上にそれをつけて出かけて行つた。これは甚だ鄭を侮辱した振舞であつたから、晉はここで諸侯から見放されるやうになつた。

〔經〕五月になると、魯の定公は阜陽といふ土地で諸侯と同盟を結んだ。諸侯は召陵——阜陽のこと——に集つたが、その際、杞の悼公がなくなつた。六月には、陳の惠公を葬つた。許の國が容城といふ土地に首都を遷したのも六月のことであつた。秋七月になると、魯の定公

が召陵の會合を終つて歸國した。周の劉文公が死んだ。また、杞の悼公の葬儀が行はれた。
 「傳」いよいよ諸侯の會合に出ようといふ時、衛の家老の子行敬子は、諸侯の會合に當つて必要なのは外交上の取引でございます。議論が喰ひちがつたら大變な結果となることもありませう。雄辯な子魚（祝佗）を御連れなさいませ」と勧めた。「それはよいところに氣がついたと、衛の靈公は子魚を御前に呼ぶ。子魚は君命の旨を聞いて、「私は全力を盡して舊來の職務を守つてをりますのさへ、それでもなほ不十分で常に罪を犯すまいと懼れてゐます。もしまた、それに今度の職を兼ねましたら、大きな罪を招くやうになることと存じます。その上に、私の掌ります神職と申しますものは、國土の神、穀物の神に奉仕する賤しい臣下で、國が遷らぬかぎり他國に出ませんのが常制でございます。君におかせられまして、國土の神に禱られ、陣太鼓にいけへの血を塗つて御出陣あるやうな場合には、神職がその神を奉じて國外に御供いたします。盟主の國に參られる時には、國王ならば二千五百人の軍隊が、家老の席ならば五百人の兵士が従ひます。さうした際に、私など御供申上げて何の役にも立ちません。御辭退いたします」といふた。けれども靈公は「どうしても行つてくれ」と嚴命したので、子魚もこの上辭退する口實もなく、つひに君命にしたがつた。
 阜鼬といふ地に到つて、諸侯が誓の式を擧げることになつた。所て噂を聞けば、小國の蔡が衛よりも先に血をすすつて、誓の言葉を申上げる順序らしい。衛の靈公は子魚と相談して、ひそかに周の襄弘を訪問させて、「聞くところによりますと、蔡が衛より先になるさうですが、本

當てせうか」と問はせた。襄弘が「本當です。蔡の祖先の蔡叔は衛の祖先の康叔の兄に當りますから、蔡を先にしても不思議ではありませんまい」とこたへたので、子魚は一世一代の大雄辯をふるつて、その説を打破つた。
 「しかし先王の制を以てこの事を考へますと、人間の價値は、徳があるかどうかによつて定まり、兄弟の順序などは何の關係もありません。昔周の武王が商を亡ぼされました、成王が繼いで天下を定められ、明德の君を選んで周の王室の守りとして諸侯に封ぜられました。故に周公旦は王室を相けて天下を正しくせられ、周に對しては親しい關係におありなされましたから、その子の伯禽にいろいろの寶物や殷の民のうちの六族を賜はつて魯の國を興し、天下に周公の徳を明示されました。
 衛の先祖の康叔には、大路といふ車、赤と白と雜つた帛、さまざまの旗、大呂といふ鐘、殷の民のうちの七族を分け與へられ、土地の境の道を定められて、衛の北界の武父以南から、鄭の圃田といふ藪の北境までを賜はり、朝參のために有闔の地を賜はつて王職に事かかぬやうにし、契の孫の相土がゐる東都を賜はつて、周王が泰山を祭るとき御手傳の費用をそこから辨じさせました。そして周公の弟の聘季が王命によつて衛の土地を授けられる鞫旋をされ、陶叔が民を授けられるについて御世話下され、もとの殷の國の土地に領土を與へて諸侯とされたのであります。魯も衛もみな殷の政事を用ひ、土地の整理だけには、周の制度を採用しました。晉の祖先の唐叔には、いろいろの寶物や國民などを分け與へられ、もとの夏の土地に領地を

賜はつて諸侯とされました。それで夏の政事を用ひ、土地の整理だけには異種族の制度を採用しました。それにこの周公、康叔、唐叔の三人は、いづれも兄弟順にいつて年少のものであります。善徳があつたので、そのため多くのものを與へられました。もし、徳を貴ばれるのではないならば、文王、武王、成王、康王には多くの兄君がおはしましたにかかはらず、何故土地人民を賜はりませんでしたのでせうか。

ところで、管叔や蔡叔が殷の紂王の子の祿父を手引きして、周の王室を紊したことがあります。周王はそこで管叔を殺して蔡叔を流罪に處し、七臺の車と七八十人の兵とを與へられました。その子の蔡仲は行を改めて人間の道をよく守りましたので、周公はそれを自分の大臣としたうへ、周の成王に謁見させて蔡といふ國を興させたのであります。その際、周の成王は蔡仲にむかつて、くれぐれも父の蔡叔のやうな行爲があつてはならぬと仰せられた旨が記録されてあります。かうした蔡の國を、衛の先にする理由はいつたい何處にありませうか。

また、武王の同母弟は八人ありまして、そのうち周公、康叔、聃季の三人がそれぞれ高い位を得、殘りの五人(管叔、蔡叔、霍叔、曹叔)は無官でありました。どうして年長を貴んだといふことがありませうか。曹國の祖は文王の子で、晉は武王の子でしたが、曹は晉とくらべれば極めて小國であります。これも年長を貴ばぬ例であります。あなたが今、徳を捨てて年長を貴ばうとされますのは、先王の制に背くことになります。

晉の文公が踐土の會合をなされた時に、衛では成公の代理として、その同母弟の夷叔を派遣

されましたが、それでもなほ、蔡にさきだちました。その記録によりますと、王がいはれられた順序は晉の文公、魯の僖公、衛の武公、蔡の莊公、鄭の文公、齊の昭公、宋の成公、莒の丕公でありました。この記録は現在でも周の御庫に藏めてある筈ですから、御調査を願ひます。あなたが文王や武王の時の道に復歸しようと思はれながら、人間の價値は徳があるかどうかで定まり、年齢にはよらないことを認識しないのは、どうしたことでありませうかと。

子魚の大雄辯にすつかり感動した莒弘は、劉文公と士鞅とに事を告げて相談し、つひに衛が蔡よりも先に誓ふこととなつた。

召陵の會合から歸國する途中で、鄭の游吉(子大叔)が急死した。晉の趙鞅(趙簡子)は非常に悲しんで、うかつて、黃父の會合(昭公二十五年の條に見える)の時に、游吉は自分に九ヶ條のことを訓へていましめた。第一に、亂を起してはならない。第二に、自分の大祿をたのみにしてはならない。第三に、君の寵愛をたのみにしてはならない。第四に、同じ位にある人に逆つてはならない。第五に、禮を行ふに當つて、傲慢て人を凌いではならない。第六に、自分の才能を鼻にかけて自慢してはならない。第七に、人が自分について怒つても、その人に怒り返してはならない。第八に、不徳のことをたくらんではならない。第九に、道に外れたことを勝手にやつてはならない。これらがその九ヶ條であるが、今それを想ふにつけても、實際、惜しい人物がこの世を去つたものだ」と語つた。

(經)楚の人人が蔡の國を攻圍した。晉の士鞅と衛の孔圉とが軍隊を指揮して鮮處を伐つた。

周の劉文公の葬儀が行はれた。
 〔傳〕沈の國が召陵の會合に出席しなかつたので、晉では蔡に命じて討伐させた。夏の間に蔡は沈を滅ぼした。秋になると、楚は沈を救ふとの口實で、蔡の國をとりかこんだ。
 〔經〕多十一月庚午の日に、蔡の君は吳の君と協同して楚の人人と柏舉といふ土地で戦ひ、楚の軍勢が大敗した。楚の子常が鄭の國に亡命した。庚辰の日に、吳軍は楚の國都の郢に入つた。

〔傳〕伍員は吳の使者となつて楚を伐つことを謀つた。さきに楚で郤宛を殺した時に、昭公二十七年の條に見える。その一黨であつた伯氏の一族が出奔し、伯州犂の孫の伯嚭はやがて吳の家老となつて、これまた楚を伐たうと謀つた。楚では昭王が位に即いてからは、毎年吳から攻められ、その奔走に疲れ切つてしまつた。蔡の君は伍員と伯嚭とが楚に復讐する意が深いのを知つて、王子の乾と家老の子とを吳に人質に出し、楚を伐つ相談に加はつた。かうして、冬になると、蔡、吳、唐の君たちは、三國聯合軍を組織して楚を伐つた。
 吳軍は舟に乗つて淮水から進み、蔡を過ぎて、軍艦を淮水の折れ曲つた處に置いて、豫章といふ地から楚軍と漢水をはさんで對陣した。楚の沈尹戌は子常にむかつて、「あなたは漢水に沿つて上つたり下つたりして、吳軍を此方に上陸させぬやうに手配してください。私は方城山の外の民を悉く集めて、淮水の折れ曲つたところに置いてある吳の軍艦を破壊した上で、大隧、直轅、冥阨といふ三つのせまい道を塞ぎませう。その時、あなたは漢水を渡つて吳軍を撃破し

ていただきたい。その後から私が攻撃したならば、わが軍が大勝利を得ること、疑ひもありません」といひ、兩人の間に戰略を定めた。
 かうした戰略を定めたにもかかはらず、武城を守つてゐた黒といふ人が、吳の戰車は木製で、わが戰車は革で飾つてあります。革は雨のしめりけて破れ易いものですから、ゆつくりしてゐてはなりません。速に戦つた方がよいと思ひます」といひ、楚の家老の史皇もまた、「楚軍はあなたを憎んで沈尹戌を好んでゐます。もし沈尹戌が吳の軍艦を破壊して三つのせまい道を塞いで攻入つたならば、手柄は彼だけに占められませう。どうしても戦はれた方がよいと思ひます。さもなければ、禍を免れないでせう」と勧めたため、子常もその氣になつて漢水を渡つて陣し、小別といふ地から別といふ地までの間に三たび戦つた。やがて子常は味方が不利となつたのを知つて奔らうとした。史皇は「國の安らかな時には、政治に與らうとつとめられ、國家に難が起つた際に逃げられたのであつては、何處の國に身をかくすこともできません。御覺悟あつて戦死なさい。これまでの罪はのこらず免れます」とすすめた。
 十一月庚午の日に、兩軍は柏舉といふ土地で對陣した。吳の君(闔閭)の弟の夫槩王は、この日の朝早く、兄に願出た。「楚の子常は不仁でありますから、家來たちはそのために戦死する氣持がありません。まづ、子常の軍を伐ちましたならば、その手勢は必ず敗走するでせう。その時になつてわが全軍が續いて進撃すれば、楚軍に勝つことは容易です」と。けれども吳の君はそれを許さなかつた。夫槩王は、「臣たるものは、義にかなつて行へば君命は待つに及ばぬ

といふのはかうした場合のことであらう。自分が先驅して戦死すれば、楚の首都へ攻入ることが出来る」といつて、部下五千を指揮して、一気に子常の軍を撃つた。案の定子常の軍は敗れて楚軍は亂れ、呉は大勝利を得た。子常はそのまま鄭の國に逃げたが、史皇は子常の戦車に乗り、身代りとなつて戦死した。

敗走する楚軍を追撃して、呉の軍隊は清發といふ河の附近まで進み、なほも一撃を加へようとした。ところが夫槩王は、はやる呉軍を押しとどめて、「進退谷まれば、獸類ですら必死になつて双向ひます。楚軍がもう逃げられぬと知つて必死の戦鬪をしましたならば、必ずわが軍を破るてせう。もし先に河を渡つたものが逃げられるといふことを知り、後から河を渡るものも、先に渡つたものの後を慕つて逃れようとさせれば、反撃する心がなくなりませう。ですから半分程渡つた時に猛撃を加へるのがよいでせう」といひ、呉の君の許可を得て、またもや楚軍を破つた。

逃げのびた楚軍が、飯を炊いて兵糧をつくらうとしてゐると、呉軍がそれに追ひついた。楚の人人は出来た飯をそのままにして逃走する。呉軍は、敵が棄てて行つた兵糧を食つてなほも楚の人人を追ひ、雍澁といふ土地で戦つて打ち破り、都合五度戦つて、楚の首都の郢まで追ひせまつた。

己卯の日に、楚の昭王は妹の季芊をつれて首都をのがれ、睢水を渡つた。鍼尹固は昭王と同じ舟に乗つた。昭王は鍼尹固に命じて、象の尻尾に火のついたものを結びつけて、呉の軍勢

を逃走させた。

庚辰の日に、呉軍は堂堂と楚の首都に乗り込み、地位の順序にしたがつて楚の王室に入つた。この際、呉の王子の子山が執政の官舎に入つたのを見て、王弟の夫槩王は非常に憤り、「そこは自分の宿る場所だ」とばかり、子山を攻めようとした。子山は懼れて他の宿舎に入つたので、事は大事に至らないですんだ。

楚の沈尹戌は、息の地で戦つたのち、雍澁でも大奮闘をして、身に創を被つた。彼はかつて呉の君に仕へたことがあるので、捕へられることを恥ぢ、部下にむかつて「自分が戦死したならば、首級を呉の手に渡さずに何處かへ隠してほしい。誰かそれを引受けてくれるものはあるなにか」と尋ねた。家來の一人が「私は賤しいものですが、それでもよいでせうか」といふ。「おまへは誰だ」「呉で生れた句卑といふものでございます」「自分の希望を達してくれるか」「出来るだけのことを致しませう」「それで安心した」といつて、三たび戦つて三度とも傷つき、「もう役に立たぬ。どうかよろしく頼む」と、苦しい息をついた。句卑は裳を布いて、沈尹戌の首をはね、それを裳のなかにつつみ、死骸を匿したまま何處ともなく立ち去つた。

睢水を渡つて逃げた楚の昭王は、さらに長江を渡つて雲夢の澤の中に入つた。ある日、昭王が寝てゐると、急に賊が襲つて来て、戈をふり上げて昭王に撃つてかかつた。傍にゐた王孫の由于は身を以て昭王をかばひ、戈を背に受けて氣絶してしまつた。危機を脱した昭王は、鐘建といふ家老に妹の季芊を背負はせて鄭の國に奔つた。やがて息を吹きかへした由于はすぐに

後を追つて、その途中で追ひついた。
 鄭の君（辛）の弟に懷といふものがあつた。楚の昭王が亡命したのを幸ひとして、今にもそれを弑しようとした。楚の平王はわれわれの父を殺しました。（昭公十四年の條に見える）父の仇を討つのに何の遠慮がありません。君の命は天の命令と同じです。もし天命によつて死んだならば、誰も狙ふものはありません。君の命は天の命令と同じです。もし天命によつて死んだならば、誰を仇としませうか。詩に——柔かいものでも貪り食べてはいけない。堅いものでも一度口に入れた以上は吐き出してはならない。弱いものを輕蔑するな。強いものを懼れるな——とあるのは、仁者でなければ實行できません。強い平王を避けて弱い昭王を討つたとて、勇氣があるとならぬ人は何處にもありません。どうしても昭王を弑さうといふならば、その前に自分がおまへを殺します」と戒め、弟の巢と共に昭王のお供をして隨に逃げた。
 あくまで昭王を追撃した吳の君は、隨の人人にむかつてかういつた。周の子孫で漢水のほとりにあるものは、楚が大部分を滅ぼしてしまひました。それで天はその善心を復活させて、今回吳の力で楚を罰しようと思はれます。それなのに貴國の君はかうした悪人を匿されました。周の王室は何の罪があつてその一族を楚に滅ぼされたのでせう。もしも貴國の君が周の恩を復さうとせられ、その心を私にも及ぼされて、天が善人を助けることに援助されますならば、われわれは貴國の君の御恩を永久にありがたいと考へます。楚を滅ぼせば漢水の東にある楚の土地は、あなたがたの自由になります」と。

楚の昭王が隨の王室の北にゐるのに、吳軍はその南まで兵を進めたため、今や危機一髪の場合となつた。昭王の兄の子期は、自分の容貌が昭王と似てゐるのを幸ひとして、身代となつて昭王を逃れさせようとし、「自分を吳軍に渡せば、吳は軍隊を引上げませう」と申出た。隨の人人はそれをうらなふと不吉と出たため、吳の要求に應じないで、隨は楚に近く文化の中心地から遙か遠いので、楚の御蔭で獨立國の體面を保つてゐる次第です。代代楚には叛かぬとの契約書を提出し、その約束どほり、楚に忠實に事へてをりました。現在、楚が危急存亡の時に當つて、急に契約とちがつた行動をとりますならば、どうして今後、完全に吳の君にも事へることが出来ませうか。あなたの御心配は、ただに楚の一國だけではごさいますまい。もし楚の國家を安んぜられるのでしたら、仰せを承らぬことはありません」とこたへたので、吳の君もやむを得ずに軍隊を退けた。
 隨に鑪金といふ者があつて、初め楚の昭王の兄の子期に事へたことがあるので、昭王を吳に與へず、子期をも無事にさせる計略があると申出で、隨の人人と約束を結んだ。昭王は喜んで目通りに呼ばうとすると、彼に辭退して「私は君の御前に召出されるほどの手柄を樹てた覚えがありません。わが君の苦しまれてゐる場合につけ込んで、自分の利益を計らうなどは全く考へてをりません」といつた。そこで昭王は子期の胸の血をとつて隨の人人と盟ひ、その真心をあらはした。
 はじめ伍員は楚の家老の申包胥と親しく交つてゐた。伍員が楚から脱出するときに、申包胥

にむかつて、「私はいつか必ず楚の國に仇を報います」といふと、申包胥は「それが出来ると思つたら大いにおやりなさい。あなたが楚を滅ぼさうと努力すれば、自分もまた楚の復興に全力を盡しませう」といつた。いよいよ伍員ごゐんの計略が成功して楚の昭王が隨の國に逃げ出すと、申包胥は自身みづかみで秦の國に向き、哀公に援兵を請ひながらかういつた。「まるで長蛇のやうな吳の兵は、諸方の國國を侵略しようとして、手はじめにわが楚を襲ひました。残念ながらわが國はそれに敵對することができずに、草深い田舎に難を避けて、私に命じ、急を秦の君に告げ奉れと申し、その口上を傳へました。楚の昭王の口上は次のやうであります。——吳の本性は満足といふことを知りません。もしも吳が楚を滅ぼしてその國土を擴げますならば、貴國と隣國になりますから、國境に危険が生ずるでございませう。吳がまだ楚の國を取りませぬうちに、吳と共に楚の地を分割なさいませ。もし楚が亡びましたならば、楚は秦の君の領土になります。またもし、秦の君の御同情をもちまして楚の國をそのままにして置いてくださり、楚の君臣を撫育してくださるならば、子子孫孫に至るまで、楚は秦にお仕へ申します——かうした口上を昭王は私に傳へられました」と。

秦の哀公はこれを聞いて深く楚に同情を寄せ、「御使者の趣は承知いたしました。まづ館に着いて御休息ください。相談の上で御返事いたしませう」と、家來に命じていはせた。主人が草深い田舎で苦しんでをりますのに、私が立派な御屋敷に入れていただきましては勿體ないこととてあります」と申包胥はこたへ、庭の垣根の傍に立つたまま、七日の間涙を流し、一杯の

水をも口に入れなかつた。哀公はますます楚に同情して、そこで援軍を派遣することになつた。

五年

〔傳〕五年春、王曆の三月の辛亥の朔日に、魯では日蝕があつた。

〔傳〕五年の春、周の敬王側の人人が、王族の朝を楚で殺した。

〔傳〕夏になると、魯から穀類を蔡の國に送つた。

〔傳〕夏に魯が穀類を蔡の國に送つたのは、蔡で物資が缺乏したのを援けるためであつた。

〔傳〕越の國が吳に攻入つた。

〔傳〕吳軍が楚を攻めてゐる隙をうかがつた行動であつた。

〔傳〕六月丙申の日に、魯の季平子が死んだ。秋七月壬子の日に、魯の叔孫不敢が死んだ。

〔傳〕六月に、魯の季平子きへいし（季孫意如）が自分の所有地の東部を巡視して、その歸路、房といふ土地で丙申の日に急死した。そこで季平子の家來の陽虎は、魯の君の持つてゐる輿璠といふ寶石で屍を飾り、棺に斂めようとしたが、同じく家來の仲梁懷は、あくまで君臣の別を守つてそれに反對した。陽虎は憤つて仲梁懷を追放したいと同僚の子洩に相談する。「あの男は御主人のためを思つて反對したのだから、そんなに腹を立てることもなからう」と、子洩にだめられて、やつと我慢をした。

季平子の葬儀が無事に終ると、その子の季孫斯がふたたび父と同じやうに領地の東部を巡視

して、費といふ都市まで来た。子洩は費の支配者であつたので、郊外まで出迎へて季孫斯の一行をもてなした。それに對して季孫斯は敬意を表したけれども、同行した仲梁懷は何の挨拶をもしなかつた。子洩もそれで立腹し、以前に自分はあなたをなだめたが、仲梁懷といふ男は實に禮を知らぬ。どしどし追ひ出されるがよいでせう」と、陽虎にむかつていつた。

秦では子蒲と子虎との二將軍に、五百臺の戰車を指揮させて楚を救ふことになつた。子蒲は「吳の戰術を知らせんから」といつて、まづ楚の人人と吳軍とを戦はせ、稷といふ土地から楚軍と一緒になつて、吳の夫槩王の軍を沂の地で破つた。この合戦で吳軍は楚の家老の蕩射を柏舉といふ地に追ひつめて捕虜としたが、蕩射の子は敗軍をまとめ、子西にしたがつて吳軍を軍祥の地で破つた。秋七月になると、楚の子朝と秦の子蒲とは、吳に味方をしたとの理由で唐を滅ぼしてしまつた。九月に、吳の夫槩王は歸國して自分から國王と稱した。のちに吳の君が歸國すると、それと戦つて敗れ、楚に亡命した。後世、堂谿氏となつたのはこの子孫である。

吳軍は楚軍を雍澁の地で破つた。秦の軍隊はまた吳軍を破つた。そこで吳軍は退いて麇(地名)を守つた。楚の子期は麇の地を焚かうとして子西と相談した。現在、楚が陣を占めてゐる場所は、われわれの父兄が骨を晒した地です。その骨をも收めることができませぬのに、燒討にするのは感心しません。「わが楚の國は亡びたといつてもいいのです。われわれの父兄は、吳の陣を燒討にしたとき、はじめて悦びませう。父兄の靈を浮かび上らせるのには、これが最良の手段です」かう子期はいつて、子西の反對を押しきり、麇の地を燒討にして戦ひ、吳軍を

大いに破つた。その後公婿の谿でも戦つてまたまた吳軍は敗れ、吳の君は國に引上げた。引上げる時に、楚の家老の闞與罷を捕虜とした。捕虜となつた闞與罷は、吳の君よりも一足さきに行きたいと願つて、遂にうまく逃げ歸つた。

吳が楚に攻入つた際に、楚の沈尹戌の妻は吳軍のために捕虜となつた。その子の后臧は母に従つて吳の國に行つてゐたが、戦ひの最中、母を棄てて自分一人さきに歸國した。それで兄の子高は、弟の行動を憤つて一生涯對面を許さなかつた。

乙亥の日に、魯の陽虎が謀叛を起さうと思ひ、季平子の子の季桓子(季孫斯)とその一族の公父馱とを捕へ、仲梁懷を追放した。多十月丁亥の日に、彼は季孫氏の一族である公何藐を殺し、己丑の日に季桓子と盟を結び、庚寅の日に、公父馱とこれもその一族の秦遄とを齊の國に追ひはらつた。

吳軍が引上げたと聞いて、楚の昭王は隨から楚の首都の郢に入つた。はじめ、鄭の地の守護職であつた鬬辛は、吳の王子と王弟とが宿所について争つてゐるといふ噂を耳にして、謙遜を知らなければ仲良くなれないと昔からいはれてゐる。一軍が仲良くしないで遠征などできる筈がない。吳が楚の國で味方同志で争つてゐるから、必ず亂が起るであらう。亂が起れば、その結果は遠征に失敗し、軍を引上げるより外はあるまい。楚を滅ぼすことなど出来るものか」といつた。

また、楚の昭王が吳に追はれて隨に亡命した時に、成臼といふ場所から河を渡らうとした。

楚の家老の藍尹壺はその際、自分の妻子を渡して、昭王に舟を與へなかつた。楚が安定するに及んで、昭王は藍尹壺を殺さうとした。すると御前に進み出た子西は諫めて、「楚の家老の子常しじやうが、舊い怨だけを常に思つて忘れなかつたので、戰爭に負けたのであります。わが君におかれましては、決して子常の二の舞を踏んでほなりません」といつた。昭王もその點に氣づき、「よい事をいつてくれた。ではあの男を、もともとはりの地位に就けよう。自分は、あの男を見るたびに前日の失敗を忘れない目じるしとしよう」とこたへた。

やがて昭王は論功行賞を行ひ、鬬辛とうしん、由于いゆう、圉い、鐘建しやうけん、鬬巢とうさう（鬬辛の弟）申包胥しんほうしよ、賈か、宋木そうぼくおよび鬬懷とうわい（鬬辛の弟）の九人に恩賞を與へた。子西はまたも御前に進んで、「鬬懷といふ男はさきにわが君を弑し奉らうと謀つたこともありすから、今回の功を賞するのは御止めください」と申上げた。しかし昭王は「功績が大きければ小さい怨などを考へぬのが道であらう」といつて、豫定どほり賞を與へた。申包胥は「私はわが君のためを思つたばかりであります。わが君が御安泰となりました以上、私の満足はこの上もございませぬ。この外に望は何もありません。かつ、私は以前に子旗（鬬辛の父）が平王の難を救ひ奉つたとの理由で、恩賞を貪つて亡びましたときに、その行爲をとがめたことがあります。昭公十四年の條に見える）それをくり返すのは嫌でございます」といつて、恩賞を辭退した。

楚の國が平穩となつたので、昭王は妹の季芊を嫁入らせようとした。が、季芊はあくまでそれを斷つて、「婦人は男子に遠ざかつてゐなければ、嫁入りする資格がありません。私は雪夢

の澤のなかから鄖に逃げる際に、鐘建に背負はれました。かうして私は男子の傍へ近寄つたものですから他へは嫁に行けない身體です」といつた。そこで昭王は季芊を鐘建の妻として、鐘建を音樂を司る家老とした。

楚の昭王が隨に奔つたときに、國に残つた子西は昭王の車と服とを作つて、人人を安心させてから脾洩の地に假の首都を立てた。昭王がなくなつて、楚の國民がちりぢりになることを恐れたのである。やがて昭王の所在が判つてからそれに従つた。また、昭王は由于に命じて麋に城を築かせた。城が出来上つて復命すると、子西はその高さや厚さを問うたが、知らなかつた。そこで「満足にできぬならば、始めから辭退する方がよかつたせう。城を築いても高さや厚さを知らなければ、大小の問題などは分りますまい」と子西はなじつた。固より私は最初辭退しましたのを、あなたが無理に命じたのであります。人間には出来ることと出来ぬこととあります。昭王が雲夢の澤のなかで賊に遭はれました時は、私はその戈を受けとめました。その傷のあとは今もあります」と、由于はこたへながら背中を出し、「私の出来ることはこれです。勝手に君の車や服を作つて、脾洩に假の首都を立てるなどといふ大それたことは、私には出来ません」といつた。

（經）冬になると、晉の士鞅が軍隊を指揮して鮮虞を攻めた。

〔傳〕一昨年、晉の鞅が敵をあなどつたため、鮮虞の人人に捕虜となつたことがあつた。士鞅はその復讐を目ざして、鮮虞を攻めたのである。

〔傳〕六年春、王曆の正月癸亥の日に、鄭の游速が軍隊を引率して許の國を滅ぼし、その君を捕虜にして歸國した。

〔經〕二月になると、魯の定公が鄭の國を襲ひ、やがて歸國した。

〔傳〕周の僖嗣といふ男が鄭の人人と一緒に亂を起し、胥靡（周の地）を奪つた。二月になつて、魯の定公が鄭を奇襲して匡（鄭の地）を奪つたのは、鄭の人人が胥靡を攻めたのを咎めて、晉の國のために伐つたのである。

魯が鄭を伐ちに行くとき、衛の國に何の挨拶もなしにその領地を通過し、歸るときになつて季孫氏と孟孫氏との家來が、衛の南門から入つて城内を抜け、東門を通つて豚澤の地に宿陣した。かうして、餘りにも衛を踏みつけた態度を憤つた靈公は、家老の彌子瑕に命じて魯軍を追撃せよとした。その時手車に乗つて、あわてて靈公の御前につけた一人の老人があつた。見れば、もう隠居してゐる家老の公叔發（公叔文子）である。これは魯の陽虎のたくらみでございませぬ。あの男は主人の季孫氏や同じく家老の孟孫氏を追放して魯の實權を握らうとしてゐる悪人です。魯の昭公が危難に遭はれたとき、わが衛の國では上下そろつて魯に同情しましたばかりでなく、周の文王の王子たちのうちで、魯の先祖の周公と、わが國の御先祖の

庚叔様は特に仲が良かったのでありました。天は陽虎の罪をたくさん積らせて、その上であの男を殺さうとされてをります。陽虎の淺はかな計略などに乗せられてはなりません。魯軍を追撃するのは、暫く御見合はせになつたらいかかですかと、眞心を面にはらして公叔發は諫言した。そこで靈公もその言葉にしたがひ、魯軍に手を出すことをやめにした。

〔經〕夏になつて、魯の季桓子と仲孫何忌とが晉に向いた。

〔傳〕夏に、魯の季桓子（季孫斯）が晉に向いた。これは今年の二月に鄭の國を伐つた際に得た捕虜を、晉の定公に献上するためであつた。このとき、魯の陽虎は、無理に孟孫（孟懿子）に云ひつけて、別に晉の國に行かせ、定公夫人から嘗ていただいた、贈り物の返禮をさせた。これは本来ならば季桓子が兼ねるのであるが、陽虎は故意に別の使者を出して、晉の機嫌をとつたのである。

晉の人人は、二人の使者を一緒に饗應した。孟孫は接待に出た士鞅を別室に招いて、「わが國の陽虎が、もし魯にゐられなくなつて晉に亡命するやうなことがあつたら、貴國では相當な役に就けてやらぬと、わが魯の先君の神靈が怒りませう」といつて、暗に陽虎が晉に出奔しようと思つてゐることをほのめかして、陽虎の人物に油断しないやうにと注意した。すると士鞅は、「誰がどんな役に任せられるかは、凡てわが君の御一存であり、私などが嘴を入れる限りではありません」とこたへ、二人の使者がおの宿舎に歸つたあとで、「魯の人人は陽虎を持てあましてゐる。孟孫は陽虎が晉に出奔するだらうと考へ、早く追拂ひたいために、あんな謎をか

けたのだ」と趙鞅にむかつていつた。
 吳の君（闔閭）の子で夫差の兄に當る終曩は、四月己丑の日に楚の水軍を破つて潘子臣、小
 惟子などの大將と、七人の家老とを捕虜にした。楚の人人は全く驚き、國が滅亡するのではな
 いかと心配した。それにまた、楚の子期が陸軍を指揮して繁揚の地で吳に敗れた。子西はこの
 ときになつて「人人が畏れることを知つた今こそ、始めて國を治めることが出来る」と、郢か
 ら都の地に首都を遷し、弊政を改革して楚を安定させた。
 周の王族の朝の殘黨に僭翩といふものがあり、一味徒黨を引きつれて鄭の人人と一緒になつ
 て周に内亂を起さうとした。そこで鄭は、周の馮、滑、胥靡、負黍、狐人、闕外など六つの都
 市を侵した。六月になると、晉の闔閭は周を警備する一方、胥靡の地に城を築いた。
 （經）秋に入ると、晉の人人は、宋から來た使者の樂祁黎を捕縛した。冬に、魯では中城とい
 ふ地に城を築き、季桓子と仲孫何忌とが、大軍を率ゐて郟の地を攻めた。
 「傳」諸侯のうちで、晉に事へてゐるのはわが國だけとなりました。わが國から誰も使者に行
 かなければ、晉は必ずわが國を疑ふてせう」と、宋の樂祁（樂祁黎）は秋八月になつて景公に
 言上した。その後になつて彼は執事の陳寅にこれを話すと、陳寅は「わが君におかせられては、
 きつと御主人を使者になさいますてせう」と語つた。果して間もなく景公は樂祁を召して、「過
 日おまへが申した言葉は一理がある。是非使者となつて晉に出向いてもらひたい」といふ。樂
 祁は歸邸してまたも陳寅に話すと「晉へ行かれますのなら、御世繼を定めてからにしてくださ

い。さうすれば萬一の事があつても御安心ですし、景公様もあなたが決死の覺悟で行かれるの
 を知るでせう」といつた。それで樂祁は、わが子淵を世繼と定めて、景公に引合はせたのち出
 發したのである。

さて、樂祁が晉に行くくと、趙鞅（趙簡子）が出迎へに來て、縣上の地で酒宴を張つた。樂祁
 がそこで六十個の盾を趙鞅に献上するのを見た陳寅は、「わが國はむかしから晉に使者となつて
 出向く場合には、士鞅の家を第一と考へて献上品を致すのが常でしたが、あなたに限つて趙鞅
 を第一となされました。士鞅と趙鞅とはあまり仲が良くありませんから、あなたは盾を趙鞅に
 献上したために士鞅の怨みを受け、思ひもよらぬ災難に遇はれるでせう。しかし、あなたが晉
 て一命を失はれるのは宋の國への忠義ともなりませんので、御子孫は永く宋で繁榮されませう」と
 といつた。陳寅の推察どほり、士鞅は樂祁を怨み、定公の御前で「宋の樂祁は使者となつて來
 ながら、まだ使命をはたさぬうちに勝手に酒宴に臨んでをります。かうした態度は宋と晉との
 二國の君を尊敬しない證據ですから、その罪を咎めなければなりません」と申上げた結果、晉
 では樂祁を捕縛したのであつた。

魯の季孫氏の家來の陽虎は、ふたたび定公や三家老（孟孫、叔孫、季孫）と、魯の祖先を祭
 つた場所て盟を結び、魯の人人と都の中央に出て、盟に叛かぬといふ誓言をした。
 冬十二月に、周の敬王が姑猶（周の地）に居られたのは、僭翩の起した内亂を避けたのであ
 った。

〔經〕七年春、王曆の正月には、記録することがなかつた。

〔傳〕七年春二月に、周の僖公が儀栗（周の地）に入り込んで、謀叛を起した。

齊の人人が、鄆と陽關との二つの都市を魯に返した。魯からは陽虎がそこに出かけて、政事を行つた。

〔經〕夏四月も、特記することはなかつた。

〔傳〕夏四月になると、周の單武公（穆公の子）と劉桓公（文公の子）とが、僖公に味方して謀叛した尹氏と戦つて大捷した。

〔經〕秋に、齊と鄭との君が鹹といふ地で平和の盟を行つた。齊の人人が衛からの使者の北宮結を捕縛して、衛の國を襲つた。けれどもやがて兩國の君は瑣といふ場所て平和を約した。また、魯では雨乞の祭を行つた。

〔傳〕秋が来ると、齊の景公と鄭の獻公とは鹹の地で平和の盟を結び、衛の國も仲間に入れようとした。衛の靈公は晉に叛いて齊と鄭とが結んだ同盟に加はりたいと考へたが、大部分の家老が反對をした。そこで北宮結を使者として齊に行かせ、齊の景公にこつそりと頼み込んで、北宮結を捕虜にして、わが衛の國を襲つていただきたい。さうすれば、家老たちも貴國の威を懼れて同盟に賛成するでせう」といつた。景公はそのとほりにして、やがて靈公と瑣の地で同盟

した。

〔經〕齊の國夏が軍隊を指揮して、魯の西部國境地帯を伐つた。九月になると、魯ではまたもや盛大に雨乞の祭を行つた。

〔傳〕齊の國夏が、魯の國境を侵した。魯では陽虎が季桓子の戦車の御者となり、公斂陽が孟孫（孟懿子）の御者となつて出陣し、齊軍を夜襲する作戦をとつた。齊の方ではそれを知つて伏兵を置き、魯軍の襲撃を待ち受けてゐた。その際、公斂陽が「陽虎、おまへは輕輕しく進むから敵の伏兵に逢つたら討死するであらう」といひ、同じく季孫氏の家來の苦夷もまた、「おまへは魯の二人の家老を追ひ出さうとしてゐる。役人の手をかりるまでもなく、自分が殺してやらう」と嚇した。陽虎はすつかり怖氣づき、夜襲を中止して引上げた。そのため魯軍は敗北をまぬかれたのであつた。

〔經〕十月から始まる冬の間には、何事もなかつた。

〔傳〕周の敬王は、姑蘇の守護職の慶氏のところ居られたが、冬十一月戊午の日に、周の單子と劉子とがそれを迎へ、晉の籍秦が護送を申上げて、己巳の日に首都に入城した。